佐賀県立九州陶磁文化館

研　究　紀　要

第　10　号

世界に輸出された肥前陶磁

・・・・・・・・・・・・・・・　大橋　康二

佐賀県で出土したＶＯＣ（オランダ東インド会社）銘磁器の胎土組成分析による産地推定

・・・・・・・・　田端　正明・德永　貞紹

日本出土のＶＯＣマーク入り肥前磁器皿の種類と分布

・・・・・・・・・・・・・・・　德永　貞紹

【調査ノート】19 世紀有田大皿の雷文考

・・・・・・・・・・・・・・・　宮木　貴史

【資料紹介】因幡国高草郡竹生村近藤家文書―幕末期の有田焼製品納入・輸送に関わる資料

・・・・・・・・・・・・・・・　芳野　貴典

2025

佐賀県立九州陶磁文化館

はじめに

このたび佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第 10 号を刊行しました。

当館は、昭和 55 年（1980 年）に九州陶磁に関する文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与する目的で設立され、以来、多面的な活動を行ってきましたが、重要な活動の一つとして調査研究にも力を尽くし、研究紀要や展覧会図録等でその成果を公にしてきました。

当館における調査研究活動をより充実させ、今後の展示及び教育普及に活用するため、研究紀要の刊行を進めております。第 10 号では、肥前陶磁の世界的な輸出について国内外の出土状況を踏まえて整理した論考や、佐賀県内で出土したＶＯＣマーク入り磁器の胎土組成を化学分析により産地推定する研究、これに関連し日本出土のＶＯＣマーク入り磁器皿の種類や分布の整理、瀬川竹生コレクションに描かれた雷文を分類したもの、江戸時代における有田焼の流通のあり方を知る手がかりとなる近藤家文書の翻刻といった調査研究の成果を収録しました。

今後も、当館の設立目的にありますように、九州の陶芸文化の発展に寄与するべく九州陶磁に関する調査研究に尽力し、その成果を逐次報告したいと思いますので、皆様方の御叱正、御指導をお願い申し上げます。

令和７年（2025 年）３月

佐賀県立九州陶磁文化館

館長　鈴田　由紀夫

目　次

はじめに

論考

世界に輸出された肥前陶磁

・・・・・・・・・　大橋　康二　・・・・1 (74) 頁

佐賀県で出土したＶＯＣ（オランダ東インド会社）銘磁器の胎土組成分析による産地推定

・・・田端　正明・徳永　貞紹　・・・・37(38) 頁

日本出土のＶＯＣマーク入り肥前磁器皿の種類と分布

・・・・・・・・・　徳永　貞紹　・・・・49(26) 頁

【調査ノート】19 世紀有田大皿の雷文考

・・・・・・・・・　宮木　貴史　・・・・60(15) 頁

【資料紹介】因幡国高草郡竹生村近藤家文書―幕末期の有田焼製品納入・輸送に関わる資料

・・・・・・・・・　芳野　貴典　・・・・74(1) 頁

世界に輸出された肥前陶磁

大橋康二

１．輸出前夜

島国日本には中世に大陸から多くの陶磁器がもたらされた。大別すれば磁器と陶器があるが、相対的には磁器の方に高級品が多い。技術的、材料的に製作が難しいなどの理由から、日本では磁器を作ることができず、もっぱら輸入に頼っていた。しかも磁器は食器が多く、陶器は天目茶碗のようなものもあるが、どちらかといえば壺・瓶などの容器となるものが多く、それ自体を商品とするだけでなく、中に別の商品を入れて運ばれてきた場合も少なくない。また輸入される陶磁器の多くは中国産であるが、いくらかは朝鮮産であり、さらにわずかに東南アジアなどから渡ってきたものがある。

中世における大陸から輸入された磁器、特に中国磁器は青磁（せいじ）から染付（そめつけ）へと大きな変遷がある。13 世紀から 15 世紀頃にかけては青磁が中心の時代であった。その生産の中心は中国浙江省南部の龍泉（りゅうせん）窯である。龍泉窯の青磁は南宋時代から広く海外輸出されるようになる。元時代には西アジアにまで中国の勢力が及ぶため、龍泉窯の青磁は西アジアにも多く輸出された。西アジアには日本には少ない大皿や大花瓶のように大作が多いのは、生活文化の差と考えられる。

２．青磁から染付へ

元時代、龍泉窯の青磁が全盛の時代に、全く新しい装飾の磁器が、より内陸の江西省景徳鎮（けいとくちん）窯で生まれた。景徳鎮窯も宋代から青白磁（せいはくじ）など白い良質の磁器原料を使って磁器を焼いていた。ところが新たに白い磁胎にコバルト成分の青色顔料（あおいろがんりょう）を使い筆で絵文様を描き、上に透明の釉（ゆう）をかけて高温で焼いて青い文様を表す、染付（中国では青花（せいか）と呼ぶ）という磁器を作り出した。この染付は、磁器の世界を飛躍的に装飾性豊かで華やかなものにした。青磁は花や唐草などの文様を表す時は、素地にヘラや釘のような道具で文様を陰刻したり、文様を貼り付け青磁釉（せいじゆう）をかけて焼いた。青磁釉の下にうっすらと文様が浮かび上がるのである。これに対し、染付は白地に鮮烈な青の文様が浮かび上がるのである。筆で描くから絵画のように、より写実的な表現も可能になった。以後、現代まで、磁器の主流をなす装飾という点を考慮するならば、この元時代、14 世紀が焼物の歴史の中で一つの重要な画期といえよう。

宋・元時代の中国では私貿易が盛んであり、中国商人をはじめ民間交易活動は活発であった。ところが、明を建国した洪武帝が私貿易を禁じ、鎖国に近い政策をとり、明との通商をのぞむ国に対しては、明の属国となり、朝貢の形式をとることを求めた。こうした中では自由な交流

はしにくくなるに違いないから、元時代のような大帝国の下で東西の交流が活発な時代に、西アジアの装飾性と関りが認められる染付磁器の生産が元時代に始まった蓋然性は高いといえよう。

染付が景徳鎮で作られ始めたからといってただちに青磁に取って代わって主流になったわけではない。生産量もまだ少なかったのであり、したがって伝世品も少ないため、元時代の染付は「元染付」と呼ばれて珍重されている。

３．明代東アジア陶磁貿易状況

「元染付」の大作は西アジアに多く渡っており、日本では遺跡出土例も少ないし、伝世品はさらに少ない。日本の中で比較的多く出土するのは沖縄である。中国は明時代初めから沖縄を「琉球国」と呼び、琉球は朝貢貿易を行ったことが記録から知られるが、沖縄の中国磁器出土状況からは、元時代にも少なからず貿易が始まっていたことが分かる。明初から中国に臣属した琉球は東アジア海上貿易で活躍する。日本は 1401 年から明が発給する勘合符（かんごうふ）で管理された勘合貿易を通じての日明の国交に入る。1547 年まで計 19 回の遣明船が派遣された。この時期に琉球の商船は東アジアから南海にかけてめざましい活躍をした。琉球船はシャム、スマトラ、ジャワ、マラッカ、パタニ、ベトナムなど南海の各地で活発に貿易するようになった。こうして南海の物産は那覇を中継地として博多にもたらされ、さらに朝鮮にも輸出された。当時、明の側では海禁令をしいて中国商人の渡航を厳禁していたので、琉球船が南海と東アジアとの中継貿易に活躍したのである。しかし、琉球船の活躍は 16 世紀前半頃までであった。その理由は、ポルトガル人の進出や中国の海禁令が弛められたためである（小山 1985）。

（１）東南アジアの陶磁貿易

14 ～ 15 世紀の陶磁貿易の中で、東南アジアの陶磁器流通をみておこう。生産地としてはベトナムとタイの陶磁器生産が注目される。消費地として重要であったインドネシアのマジャパイト王国の都トロウラン遺跡出土の状況からみてみよう。

トロウラン遺跡は、マジャパイト王国時代以前の中国陶磁が少量出土しているが、ここでは王国時代の、中国・ベトナム・タイの陶磁器の特徴を述べる（坂井・大橋 2018）。

中国、ベトナム、タイの陶磁器の質量が 13 世紀末～ 16 世紀初に集中していることで、マジャパイト王国が 14、15 世紀に栄えた国であることを裏付けるものである。13 世紀末にはじまるというのは妥当であるし、王国の滅亡については 15 世紀末～ 16 世紀初の少量の中国磁器やわずかながらもベトナム青花が出土している点から、16 世紀初の滅亡説を裏付けている。

トロウラン遺跡出土の豊富な内容のベトナム陶磁器は、15 世紀後半～ 16 世紀初の沈没船資料として知られる中部ベトナムのホイアン沖引き揚げ品（Butterfield 2000）との比較により、

この資料に類似するものが、本遺跡出土のベトナム陶磁器の最も新しいグループであり、多くはこれより古式のタイプである。ベトナム陶磁器の年代の重要な基準資料として知られる、トルコ・トプカプ宮殿博物館所蔵の大和８年（1450）銘の天球瓶より古いタイプが多いのである。青花であれば 15 世紀前半頃のものが多いようであり、他の白磁・青磁・鉄絵などは 14 世紀のものが少なくない。15 世紀には、ベトナム青花に加え、タイの青磁と鉄絵陶器が多くなる。もちろん中国龍泉窯の青磁も多量に出土しているが、このような東南アジアの青花・青磁・鉄絵も多く出土していることがトロウラン遺跡の特色である。

マジャパイト王国時代に当たる貿易陶磁器は内容をみると、13 世紀末から 14 世紀には龍泉窯の青磁も酒海壺を始め、盤・鉢・瓶など高級な青磁が少なくない。そして 14 世紀後半の元末・明初でも景徳鎮の青花大壺類など高級磁器が多い。磁州窯の翡翠釉や鉄絵陶器大壺も 14 世紀に当たる。15 世紀に比べ、14 世紀には中国の青磁・青花・紅釉・釉裏紅・白磁・翡翠釉・鉄絵などの高級な大壺・瓶類が多いことが特徴として挙げられる。それは明・洪武（1368 ～ 1398）期の大壺までみられる。明に入ると洪武期の後は、瓶などで、いわゆる威信財的なものは永楽（1403 ～ 1424）の天球瓶や瓶などが官窯クラスのものでみられる。青花碗も官窯クラスのものが出土しているが、永楽頃までである。そして本遺跡出土の 14 世紀後半から 15 世紀初めにかけてと推測される青花を中心に被熱痕が多い。大火が想定されるのである。記録からは 14 世紀後半のハヤム・ウルク王（在位 1350 ～ 1389）が名君とされるが、15 世紀初には国内で対立が生じているとみられ、明・鄭和の第１回航海（1405 ～ 1407）の際にジャワに寄航したが、東王と西王の抗争が記録される。陶磁器から推定される火災がこのような抗争時に起きた可能性が高いのである。この点については深見純生氏の研究（深見 2014）によると、鄭和の第１回航海の際、マジャパイトの都で内戦に巻き込まれ 170 人の死者が出た（深見 2014 の 51 頁）。この内戦の記録により王都の中に東西２つの王宮があり、その間の対立と内戦であったと明らかになった。よって出土陶磁器の被熱痕は、この内戦時に王宮、あるいはこうした威信財的な磁器の保管場所が焼けたためかと推測される。

王国自体はそれで弱体化したとは言えないと深見氏は述べる。過去の歴史家には史料の誤読があり、実際は中国への朝貢が 1450 年代まで多いとする。中国ではマジャパイトを「爪哇」と記すが、15 世紀のジャワの朝貢は 1400 年代 11 回、1410 年代７回、1420 年代 14 回、1430 年代７回［実は８回］、1440 年代８回、1450 年代３回、1460 年代２回、1470 ～ 1480 年代０回、1490 年代２回とする（深見 2014 の 51 頁）。よって、マジャパイトの対明朝貢貿易は 1450 年代前半まで持続的に行われていたといえる。このように 15 世紀と言っても朝貢貿易は 1460 年代までであり、15 世紀後半には行われない時期が 20 年以上あったことがわかる。これは中国明の朝貢体制の中で、琉球も 1440 年代に朝貢回数減少に転じるので、1450 年代以降の朝貢回

数減少の原因は明朝側の制限、つまり消極姿勢にあった。この原因は明の財政悪化であったとする（深見 2014）。

とはいえ、1465 年から 30 年間爪哇の朝貢がないのは爪哇側に何らかの原因があったと考えるべきであろうとし、15 世紀後半、特に 1460 年代以後、その地位はムラカ（マラッカ）やタイのアユタヤに移っていったとする。トロウランをはじめインドネシアではほとんどみないベトナム・タイの陶磁器がラオス（清水 2014）で多くみられることはその表れかもしれない。清水 2014 の PL.15-18、20-28 などが、トロウラン遺跡にみられず、16 世紀頃と推測されるベトナム磁器である。

1460 年代以前まで朝貢が続いたことをトロウラン遺跡出土の多量の中国龍泉窯青磁が示している。つまり、青磁の碗皿は 15 世紀中葉頃までのものがほとんどであり、15 世紀後半のタイプの青磁は少量となること、景徳鎮窯青花も 15 世紀初頃の後は 15 世紀末～ 16 世紀初のフィリピン・パラワン島沖のレナ・カーゴ引き揚げ品（Goddio et al 2002Fig.228）に近いものが少量出土しているが、明らかなその間のものはみないのである。まさに、朝貢回数の変化に比例するような中国青磁、青花の出土量である。15 世紀後半頃の割合に絞ってみるとトロウラン遺跡出土の龍泉窯青磁の碗皿は 15 世紀としてあげた坂井・大橋 2018 の表 1 の 1,120 個体中１％弱であるし、景徳鎮窯青花は 263 個体中 44％位であるが、多いのはレナ・カーゴ引き揚げ品に近い。つまり、弘治（1488 ～ 1505）頃と推測される青花磁器である。

インドネシアでトロウラン遺跡以外にこの時期の中国や東南アジアの陶磁器が出土している例として、ほかにスラウェシ島のゴア王国の居城ソンバ・オプー城があり、15 世紀前半ころの中国・景徳鎮青花が少量とタイの青磁や鉄絵陶器が出土しており、王国の居城としての機能は 15 世紀前半ころに始まるとみられる。それが 15 世紀後半～ 16 世紀初に景徳鎮磁器も多くなり、ベトナム青花も加わり、タイの陶磁器もあるなどにより、盛んになることが分かる。さらに 15 世紀末～ 16 世紀には景徳鎮磁器が多く出土し、ラオスのヴィエンチャンで多くみられるようなベトナム、タイ陶磁器はほとんどみられなくなる。マジャパイト王国滅亡により、ベトナム、タイ陶磁器が 16 世紀のインドネシア群島部に流通しなくなるのであろうか。今後も注意する必要がある。

（２）16 世紀の変化・欧州勢力の到来

中国の磁器生産は 16 世紀には青磁に代わって青花（染付）が中心となる。明の海禁令と勘合貿易体制の下で、14 世紀後半から 15 世紀初頭にかけての前期倭寇（わこう）は衰滅した（小山 1985）。16 世紀に入る頃から中国の経済は新しい発展をみせるようになり、密貿易を促すことになる。その中心はニンポウ（寧波）近くにある雙嶼（そうしょ）（浙江省）と漳州（しょうしゅう）の月港（げっこう）（福建省）であった。密貿易を促進したのはポルトガル人の来航であった。1511 年、南海における東西交易の中心的

な中継地であったマラッカをとり、1517年、ポルトガルの船隊は初めて広州（広東省）に到着した。しかし、中国側は正式の通商を拒み、ポルトガル人は北上して中国の密貿易商人と積極的に交易するようになった。その後ポルトガルは広州における通商許可を得、1557年にはマカオ（澳門）に居住することを認められた（小山1985）。

倭寇の圧力により1567年、明朝は海禁令を解除し、倭寇は次第に収束に向かった。ただし、この海禁令の解除は南海各地との貿易についてだけであり、日本への渡航は依然として禁止されていた（小山1985）。

こうした情勢の変化に関わる陶磁器流通の変化として、中国福建省南部の漳州窯で青花生産が16世紀中葉に始まり、明末にかけて盛んであった。これらは景徳鎮の青花に比べて安価な青花であり、それまでの支配者層向けに比べて一般向けの日常用品としての青花を供給したところに特徴がある。

（３）日本・肥前陶器の始まり

16世紀に磁器需要が高まるとともに、後半の豊臣秀吉時代には日本独特の茶の湯が武将や豪商の間で流行り、高麗茶碗（こうらいちゃわん）などの朝鮮の陶器への評価が高まる中で、肥前、松浦党の豪族波多氏が朝鮮陶工を連れてきて1580年代末には居城岸岳（きしだけ）城（佐賀県唐津市）下で陶器を焼かせたと推測される。朝鮮の陶工の技術で始まったにもかかわらず、早くも茶の湯の陶器が作られていることは、権力者秀吉が茶の湯の陶器を重視していたことを知った波多氏が、いち早く対応したことを物語っている。もちろん窯場としては、一般商品としての陶器碗皿の生産が主であり、その生産は未だ小規模であったとはいえ、製品は関西から日本海側は山形、秋田などで出土している。このグループの窯の製品で特徴的なものとしては藁灰釉（わらばいゆう）の碗・皿がある。この波多氏は朝鮮出兵の際、秀吉の逆鱗に触れ、1593年（文禄２）に取り潰されると、保護者を失った陶工は離散する。

その後、伊万里や武雄など佐賀県南部に陶器窯は拡大する。慶長の役の後、1598年（慶長３）に撤兵した鍋島軍などにより多くの朝鮮陶工が連れてこられた。その結果、窯は激増し、生産量は急増し、広く全国に流通する。特徴ある製品としては鉄絵装飾を施した碗・皿であり、胎土目積（たいどめづみ）により量産した。この時期まで茶の湯の指導者古田織部（ふるたおりべ）の影響が強い茶碗や中国でも作られていなかった水指（みずさし）などが作られた。織部が1615年に亡くなる1610年代頃には、肥前陶器は大きく変化する。窯詰（かまづ）め法は胎土目積から砂目積（すなめづみ）に変わり、鉄絵が急速に消え、溝縁皿（みぞぶちさら）と呼ぶ無文の灰釉（かいゆう）皿が主力になる。この溝縁皿と一緒に草創期の磁器が焼かれ始める。

４．日本の朱印船貿易時代と鎖国

豊臣秀吉から３代将軍徳川家光時代にかけて、朱印船（しゅいんせん）貿易が行われ、東南アジアに日本人町

ができた。1601 年、家康は朱印船制度を創設して、日本商人の対外貿易を統制した。朱印船は中国へは渡航できなかったので、インドシナの諸地域を中心にルソン島、台湾、マカオ、パタニ（マライ半島）などと通商した。朱印船制度は、幕府により 1635 年、日本船の海外渡航禁止令が出されるまで続いた。この時代は日本陶磁が積極的に輸出された形跡はない。逆に中国や東南アジア陶磁の輸入はあり、タイの焼締め壺なども日本で出土する。

明後期、16 世紀から 17 世紀前半の時期には、東アジアの通商関係はそれ以前に比べて一段と進展してきていた。明朝の衰退に伴って、その規制下の国際交易秩序は弛緩し、私商の貿易が活発となり、交易内容もそれ以前の支配者層間の奢侈品貿易から、各国の国民経済に、より一層関連したものとなる（小山 1985）。陶磁器においても 16 世紀後半～ 17 世紀前半に、景徳鎮より粗製で安価な青花が福建漳州窯で量産され、東アジアに多く流通したこともその表れであろう。

この朱印船貿易時代も江戸幕府の方針により 1635 年に終わり、日本は鎖国時代に入る。

（1）日本の肥前磁器の始まり

朱印船貿易時代の江戸初期の肥前陶磁は、砂目積段階に磁器焼成が始まる。磁器にも砂目積みが行われるものがある。砂目積は朝鮮の陶工が母国で行っていた窯詰め方法であり、朝鮮陶工によって肥前磁器が始まったことの証拠といえる。傷には違いないので、安定した生産に移行した 1630 年代の中でこの窯詰め法は消えていく。砂目積の皿には見込みを蛇目釉剥（じゃのめゆうは）ぎしたものがあるが、この蛇目釉剥ぎや圏線（けんせん）だけの染付文様などから考えると、中国の漳州窯の粗製品との競争を目論んだものと推測できる。一方、普通の染付磁器は中国景徳鎮磁器を目指したものと考えられる。1620 年代頃、古田織部亡き後、小堀遠州（こぼりえんしゅう）が茶の湯の指導的役割を果たしていくが、景徳鎮に対して磁器の水指や会席具（かいせきぐ）を注文した結果、「古染付（こそめつけ）」と呼ばれる独特の染付が景徳鎮で日本向けに作られた。天啓（1621 ～ 1627）銘があるものなどで知られる。一方で、国産磁器として生産が始まった肥前・有田に対しても水指などの茶道具の注文が行われたらしく、1620 ～ 1640 年代にかけて肥前磁器でも茶陶といえるものが他の時代に比べ多く作られた。中国に磁器注文されたのも、明に進攻しようとした秀吉時代にはかなわなかったことであるが、徳川家康時代に直接通商できるようになったからである。古染付に三足付きで自由な形が多いのは織部の影響がうかがえるから、注文されたのは織部存命中のことかもしれない。

この後、中国に注文されたとみられる茶会席具としては「祥瑞（しょんずい）」がある。崇禎（1628 ～ 1644）年間に作られた。これらは茶の湯の道具で大事にされたから、廃棄される割合は低く、遺跡出土例は多くない。一方、普通の景徳鎮産の碗・皿・小坏がたくさん輸入されているが、こうした景徳鎮磁器の供給量の不足を補う形で肥前磁器は国内に流通し始めた。

佐賀・鍋島藩は当初、この陶磁器生産に深く介入した形跡はないが、陶器・磁器両方合わせ

た生産が活発となり、結果として燃料の薪を取るため、陶業者が山を切り荒らすことになり、1637年（寛永14)、佐賀藩はそれを理由として日本人陶工826人を窯業から追放し、伊万里の窯場４か所すべてと有田の窯場７か所の計11か所をつぶし、有田の13の窯場に統合した。この大事件によって有田から陶器の日常食器生産などが消え、有田は磁器中心の生産体制を確立した。

（２）中国の王朝交替に伴う内乱

その後、1648年（慶安元）までの８年間で、有田皿山に対する佐賀藩の課税が35倍に急増したが、その大幅な増税に対し、有田は納め切ってしまう。こうした増税に応じることが結果としてできたのも、1644年（正保元)、中国が王朝交替に伴う内乱で、中国磁器の輸出が激減し、日本にもほとんど輸入されなくなったためである。つまり、国内の磁器需要が一気に肥前窯に集まり、有田は生産量増大の工夫をして、国内の磁器市場を独占してしまう。日本が中世以来の磁器輸入国を脱する大きな転換点であった。

中国の内乱は明の遺臣（いしん）が南部に逃れながら清王朝に抵抗を続けたためである。南部の江西省景徳鎮窯や福建省漳州窯などの世界的な磁器の大産地が戦乱に巻き込まれ、ほとんど輸出ができない状態となる。当然、仕事を失う陶工も多かったに違いない。失業した陶工が最も海外流出しやすい状況であったと推測できる。記録にはないが、肥前窯跡出土の窯道具までが中国的に変わる状況などをみると、景徳鎮などの陶工が肥前に来て技術をもたらしたものと推測される。ここで肥前磁器窯は中国の磁器技術を導入し、朝鮮的技術から中国的技術へと著しい技術革新を果たした。技術革新により景徳鎮並みの薄手でシャープな器を作ることができるようになる。この技術革新のうち第１にあげられるのは色絵（いろえ）の技術である。朝鮮の技術者によって始まった有田には色絵の技術はなかったが、酒井田柿右衛門（さかいだかきえもん）家に伝わる赤絵（あかえ）始まりの「覚（おぼ）え」によれば、長崎にいた中国人から技術を伝授され、試行錯誤の末、1647年には出来上がったという。

中国の内乱による中国磁器輸出激減は、日本以外の地域も困ることになる。日本同様にそれまで中国磁器を買っていた国・地域は世界的であり、中国磁器の輸出ストップは大きな波紋を及ぼす。結果として、代替品の磁器を求める動きが出るのは自然のことであった。こうした中で、肥前磁器の海外輸出が始まるが、その始まりから盛衰を５つの時期に分けて説明する。

５．肥前磁器輸出の始まり

（１）海外輸出の始まり（1644 ～ 1650年代）

日本は鎖国に入っていたため、長崎で中国船とオランダ船だけが江戸幕府により貿易を許されたのであり、まず中国船が1647年、シャム（タイ）経由カンボジア行きの船で磁器を運ん

だのが肥前磁器輸出の初見と考えられてきた（山脇 1988）。しかし、ベトナム・ハノイのタンロン王宮では 1630 ～ 1640 年代と推測される肥前磁器が少なからず出土しており、フォルカーの記録（フォルカー 1981 の（20）の 60 頁）でも 1645 年５月８日付けのベトナム・トンキンから出島への報告によると、一官（鄭芝龍）所有のジャンク船が１行李の磁器その他を積んでカチューに到着しているとある。カチューはベトナム・ハノイのタンロンのことであり、この磁器が、中国か日本かは明記されていないが鄭一官所有のジャンク船であり、トンキンから出島へ報告していることから、日本磁器、すなわち肥前磁器の可能性がある。これが肥前磁器とすると、山脇氏が記録中、1647 年を肥前磁器輸出の初見としたよりも２年遡ることになるし、明王朝が倒れた 1644 年の翌年のことになる。記録と出土例からみると、すでに 1645 年には、肥前磁器のトンキンへの輸出が始まった可能性が高い。1645 年は鄭芝龍らが福建の福州に唐王隆武帝（1645 ～ 1646）を擁立し、清への抵抗を始めた年である（石原 1959）。以後、オランダ船も 1650 年代には東南アジアに向け肥前磁器を運び始める。この 1645 ～ 1647 年頃からの肥前磁器の東南アジア輸出は出土資料でも裏付けられる。つまり、インドネシア・バンテン遺跡の染付手塩皿（九陶 1990 図 282）、タイ・アユタヤ遺跡の染付瓶（九陶 1990 図 352）、ベトナム・ホイアンの染付瓶（菊池他 2002 の 25 頁）など少なくない。

＜「三官」銘＞（図１）

ベトナム・ハノイのタンロンに運んだ磁器とすれば、東南アジアの中で、タンロン王宮のみで出土している肥前磁器として、「三官」や「雨香斎」の文字を見込に施した染付があることも注意しなければならない。この２つが出土している窯は有田町猿川窯である（図１、図４）。タンロン王宮の見込「雨香斎」字文皿（Bui 2011 の 139 頁）の高台内には「仁房」とある。猿川窯では「仁房」銘（図４-２）のほか、「鍋茂」「森記」の３通りの銘が出土している。「鍋茂」銘の出土例は東京・汐留遺跡（東京都埋文 1997）にある。「仁房」銘は猿川窯のほか、有田町谷窯でも１点出土している。長崎市では出島和蘭商館跡（長崎市教委 2019 の 70 図 23）、万才町遺跡（長崎市埋文協 1996 の 25 図 26）で出土。銘のないものは興善町遺跡（長崎市教委 2007 の 46 図 143）で出土している。銘のない類品は九陶 2001 図 208 にある。徳川将軍の居城・江戸城（東京）でも見込「雨香斎」字文皿が出土している（日比谷図書文化館 2013 のⅥ-081）。見込「雨香斎」字文と推測される「森記」銘皿は長崎市勝山小学校で出土している。（長崎市教委 2003）これらの裏銘は中国の例はみられず、いずれも肥前での人名の可能性が高い。「鍋茂」は鍋島家の一族の可能性があり、「鍋□茂□」の省略形と考えられる。この時期には、武雄鍋島家の茂和（1605 ～ 1664）などがいる。平碗形であり、必ずしも輸出用とは言えない。特に裏銘が肥前の人名という点でも輸出用ではないと思われる。出土地は江戸で１例あるが、長崎に多いし出島和蘭商館でも出土していることから、国内向けとも言いきれない。

この２つの特殊な肥前磁器は長崎市内では出土している。「雨香斎」字文皿は中国景徳鎮磁器が崇禎期に作り（大橋・扇浦2021の図８-11)、わが国にも輸入され、長崎市築町遺跡などで出土しているから､その写しといえる。興善町遺跡の寛文大火（1663年）層下の廃棄資料に、景徳鎮の明末の「雨香斎」字文皿と肥前磁器の両方がみられる。両方を比較すると、器形も異なり、景徳鎮の方は腰が張るが、肥前の方は高台から大きく開く、いわゆる平碗形である。しかし、「三官」は景徳鎮例もなく、肥前磁器のみが作り出した。長崎市興善町遺跡（長崎市教委1998のPL ５-A/B）で出土し､海外ではタンロン王宮(Bui 2011の138頁)でのみ発見された。興善町遺跡出土品は底部片であり、見込に猿川窯出土例同様に「三官」の文字を染付し、高台内に「大明」銘を染付する。タンロン王宮出土品は見込中央に「三？官」の文字を染付し、その周囲を唐草文帯で囲む。側面にも文様が描かれるが不明。高台内に「大明？成？化年製？」銘を染付。猿川窯の鉢（図１-３・４）は上部を失った破片であるが、見込には「三官」字のみが書かれ、外側面の一方に梅かと思われる樹木が描かれている（大橋・尾崎1988の図版65-１)。２点とも高台内に読めない漢字６文字が記される。猿川窯、タンロン王宮の２種とも鉢と思われる｡「三官」銘の中皿が窯ノ辻窯で出土している（図１-１)｡折縁口縁は稜花形にカットし、蓮弁文を連ねる。見込に岩と竹と飛鳥を描き、絵画に添えるように「三官」と落款風に角福を描く。高台内に「太明」銘を記す。「五官」銘の小皿（図１-２）と筆致なども似通っている。

ここで「三官」の意味を検討する。

三官が鄭一官（芝龍）同様に中国人の通称とするならば､1630～1640年代の記録で「三官」がみられるのは､『平戸オランダ商館日記』（永積訳1969）に1630年（寛永７）１月22日に平戸商館長ナイエンローデは、竹中の許可書だけを持って長崎の三官が中国本土に出発することを知ると、三官にタイオワン（台南の安平）に寄航するよう勧め、タイオワン長官ハンス･プットマンス宛の手紙をことづけている。そしてプットマンスには「長崎奉行兼西の地区全体の裁判官に任命された竹中采女（重義）殿に、三官が悪い報告をしないよう、彼を優遇してほしい。我々は三官と大きな取引をしているのだから」（傍点部分筆者加筆）と、書いている。三官は長崎で銀吹屋（銀の精錬業）を営んでおり、オランダ人は国内流通銀の丁銀を、輸出向けのソマ銀への吹き替えを三官に依頼していた（永積2001の87頁)。1630年２月、町の前の川にはガレオッタ型の船尾をした新しいジャンク船２隻が投錨していた。この中の大きい方は、三官と呼ばれるシナ人の銀吹師―会社は毎年彼と交換している―の船で、交趾シナに向かう予定である。この船で交趾シナの大使（と言われている）は皇帝（徳川将軍[筆者注]）の拝謁を受けぬまま、出帆することになっている。もう１隻のジャンク船は日本人のものだが、シナ人との契約により、これと同時にトンキンに出帆する筈である。

1630（寛永７）年 10 月、会社の銀吹師のシナ人三官の通詞が、我々を訪ねて来た。

先の三官と故カピテン・シナ（李旦（りたん）（1625 年平戸で没（注））の息子アウゴスティンはそれぞれジャンク船１隻にシナ人船員を乗組ませ、タイオワンに送る準備をしている。このアウゴスティンは海賊トーセイラクに生糸４ピコルを贈り、彼の艦隊と共に自分のジャンク船で貿易に行き、獲物を市場にもたらすため彼と同行したいと希望した。尚ジャンク船２隻が艤装しており、１隻はトンキン、１隻は交趾シナに行く筈である。これらは日本の資本を積んでいるが、日本人は１人も乗船を許されず、乗組員はシナ人だけである。トンキンに行く船には、長崎に住む（オランダ人２人）が同行する筈である。

（この間にも三官の名が出る記録が一つある）

1630 年（寛永７）10 月 12 日か （長崎で）昼頃シナ人三官の家に行き、非常に古典的で美しい彼の庭に招ばれた。ここで我々は共に浴場に行った。そこで数人の湯女に洗われ、拭かれ、もてなされた。その後立派な邸で、あらゆる種類の豊富な食べ物、飲み物及び宴会でもてなされ、この国の習慣に従って、名誉ある方法で鄭重に立派に心ゆくまで歓待された。食事の後で私と舵手は、感謝して別れを告げ、そこにピーテル・ファン・サンテンと日本人商人数人を残して立去った。

1631 年（寛永８）３月 22 日、主な両替人、シナ人三官のジャンク船により送る。（略）長崎の三官のジャンク船で手紙を書き、相次いで送った。

1633 年（寛永 10）武士による貿易品の直接購入禁止命令があり、幕府は唐人から直接貿易品を買い取ることを禁じている（武野 1985 の 30 頁）。

1633 年にも長崎の中国人のジャンク３艘がタイオワンに来航したが、その中の１艘は三官の船で、ソマ銀 200 貫目、同 300 ピコルの資金を積んでいた。（略）日本人、日本在留の中国人が様々な武器、殊に日本刀、中国刀を持ち込んで先住民に売り、（略）長崎から来る中国人の船は竹中采女正の許可書だけを持って渡航し、その上武器を輸出していた （永積 2001 の 87、88 頁）。竹中采女正重義は 1628 ～ 1633 年の長崎奉行である。

1634 年（寛永 11）８月、長崎から、シナ人三官とその息子２人を含む合計 11 人が十字架にかけられたという報告が来た。彼の３人目の息子（７才）と日本人７人、シナ人 26 人は首をはねられた由。これは日本の鉄砲を輸出したためである。中村質氏によると、佐賀藩の武具輸出禁令は「鎖国令」ではないが、1634 年（寛永 11）５月 28 日の幕令（『武家厳制録』）にみえ、同年７月には同条違反の長崎在留中国人の処刑があり、すでに 1621 年（元和７）からの禁止事項であったとする（中村 1988 の 237 頁）。これが幕府による中国船の長崎集中令と朱印船貿易の禁止令に発展するのであるが、この裏にはオランダが朱印船の排除に動いたことは明白とされる（中田 1986 の 223 頁）。これによってオランダはベトナムのトンキンなどにオランダ商

館を開設していく。日本の「朱印船の活躍する南方諸地域にオランダ船を派遣し、残留日本人の協力を得て、日本向け商品の買い付けに努め、以後貿易額が飛躍的に増大して大いに実績をあげてきた」(中田 1986)。

1634年(寛永11)８月８・９日、トンキンの国王は70万人を率いて交趾シナに遠征していたが、彼の軍隊は多大の人員を失って追い返され、不名誉にも退却。シナ人三官一家が鉄砲輸出で同じ８月に処刑されたのもこのトンキン国王の交趾シナ戦争と関係ないのであろうか。前述のように、1630年10月に三官ともう１艘は交趾シナとトンキンに出帆している。トンキン国王はオランダの軍事援助を期待してオランダに貿易を許可したという(永積2001の167頁)。

このように三官はベトナムのトンキンか交趾シナにも行っていたとみられるジャンク船を持ち、オランダ商館とも取引をしていた有力な中国人であるが、禁制の鉄砲輸出で処刑されたのである。

続く1635年(寛永12)に幕府は中国船の長崎集中令を出し、朱印船貿易を禁止(鎖国令)した。これによってオランダはトンキンなどにオランダ商館を新設し、朱印船に代わって南方の日本向け商品取引に乗り出す。

この三官については小倉細川藩の史料(西日本文化協会1990)に、1627年から1628年７月にかけて唐人「三官」の名がみえる。ここでは細川三斎の御供や歯の疼きの治療などに対応したことが記される。その後、前述の通り、1630年に長崎で貿易商人として現れるのである。同一人か否か確証はないが可能性はある。他の三官としては、1626年(寛永３)、黄三官が投銀を元に台湾の北港へ向けての朱印船(有力な朱印船貿易家である平野藤次郎船)を出し、1639年(寛永16)に投銀の請人として黄三官とある。これはオランダ商館の前述の三官が1634年に刑死しているため、異なる三官である。そして、黄三官は台湾貿易までであり、オランダやトンキンとの関りも史料からは認められない。オランダ商館の記録の三官の方が住宅唐人として、オランダ商館との関りや、その前には小倉細川藩主との関りで、「寛永初期の小倉細川家の対外貿易のブレーンとして、一方一族の貿易資金を長崎奉行御内衆(おうちしゅう)より調達している明寰(めいかん)」(中村1988の195頁)とともに、三官は1628年(寛永５)４月と５月に細川三斎から褒美をいただいているのであり、有力貿易家であった可能性が推測できる。そして1630年以降、オランダ商館日記に出てくる三官につながる。長崎に立派な邸宅を構える有力唐人貿易家である。そしてベトナムのトンキンや交趾シナにジャンク船を出しているのである。

このように1634年には長崎で刑死した三官であるから、猿川窯で作られた「三官」銘の鉢が、この三官にまつわるものである確証はない。しかし鄭一官の前に活躍しトンキン貿易も行っていた中国人貿易商の記念品として一官時代に作らせた可能性は考えられる。李旦が1625年に病没した後は、息子と東シナ海で勢力争いを繰り広げた鄭芝龍(一官)である。「三官」銘の

鉢を前述のオランダの記録通り、1645 年５月８日、一官所有のジャンク船がトンキン･カチュー（タンロン）に運んだ可能性はあると思われる。

＜日字鳳凰文皿＞（図２・３）

日字鳳凰文皿は本格的東南アジア向け輸出品として作られた最初のものと考えられる。肥前の多くの窯で作られた。東南アジアではベトナム中心に出土しており（菊池　他　2002)、わずかにインドネシア・ジャカルタのパサリカン遺跡（九陶 1990 図 136）と日字を見込蛇目釉剥ぎの皿の中央に染付した皿がソンバ・オプー城（坂井・大橋 2018 図 314）で出土している。ベトナム・ホイアンなどでは明末の景徳鎮産や漳州窯産の日字鳳凰文皿が出土しているが、他では確認されていない。この点でも、肥前の日字鳳凰文皿はベトナムでの需要をもとに作られた可能性が高い。

日字鳳凰文皿を焼く窯の中では、荒磯文碗鉢を伴わない窯の例と、共伴する例がある。有田町山辺田窯では４号窯を物原とする窯で日字鳳凰文皿（図２-16）が出土するが、ここでは荒磯文碗・鉢はみられない。それに対し、山辺田２号窯では日字鳳凰文皿（図２-17）と共に見込荒磯文碗・鉢が出土している。両方の日字鳳凰文皿を比較してみると、２号窯のものの方が「日」字の表現や鳳凰の表現に崩れがみられる。掛の谷窯２号窯物原では荒磯文碗はみられず中層と上層で日字鳳凰文皿（図３－１・２）が出土（九近陶 2000 の 125 頁）し、上層のもの（図３－２）がより整っているようにみえる。

年代の判る資料で長崎市興善町遺跡の寛文大火（1663 年）層下より出土した中に日字鳳凰文皿が、２通りあり、扇浦・大橋 2020 図４ - 28 のきちっと表されているものの類似例は有田町弥源次窯（九近陶 2000 の 131 頁７）がある（図３－３)。年代的に新しいタイプの日字鳳凰文皿と推測される。

長崎寛文大火層（1663 年）廃棄資料では五島町遺跡出土の扇浦・大橋 2020 図９ - 19 は鳳凰の表現がかなり異なるが、高台径は広く新しいグループと考えられる。このことから、長崎寛文大火層やその下層出土の 1650 年代とみられる日字鳳凰文皿は、相対的に新しく、1650 年代頃のもので妥当といえる。窯跡で荒磯文碗を伴わない有田町の掛の谷窯、広瀬向１号窯物原３層以下（図２-13)、山辺田４号窯（図２-16）や楠木谷窯（図２－１)、枳藪窯（図２－３・４）のものは共伴資料から 1640 年代から 1650 年代前半頃の古式と推測される。有田町天狗谷窯でも PT ４c 層で日字鳳凰文皿（図２－５）が出土しているが、荒磯文碗は出土せず、1640 年代頃の碗・小皿・瓶と一緒に出土している。

日字鳳凰文皿製作の下限年代について検討してみよう。

台湾で出土していない点も矛盾しない。台湾は 1625 年から 1662 年２月１日鄭成功によって奪取されるまでオランダ商館が置かれていた。よってゼーランジア城（安平）では 1650 年代

になると中国磁器に代わって肥前磁器が出土するが、それは欧州人の食器として作られたとみられる粗製芙蓉手皿が主であり、ベトナムで主に出土する日字鳳凰文皿は出土していないのである。そして、鄭成功が、1661年（寛文元）４月末に攻撃し、翌1662年２月１日（寛文元年12月13日）台湾長官フレデリーク・コイエットが降伏した後、鄭成功は1662年死去するが、鄭氏が拠点とする台湾高雄市左営遺跡（旧鳳山県城）や台南市ゼーランディア城（安平城）などで肥前磁器が出土している。そして、清朝に降伏する1683年までと推測される肥前陶磁器に限られている。この中には日字鳳凰文皿は含まれていないのである。

1664年遭難と推測される鹿児島県吹上浜採集品には日字鳳凰文皿はみられない。よって、1662年～1664年頃までには作られなくなったと推測される。窯跡の中でも1655・1656年頃に開窯と推測される有田町長吉谷窯や、1660年頃には年木山から移り開窯したと推測される有田町柿右衛門窯ではみられない。窯の場合、窯による製品差も考慮しなければならないが、古いタイプの日字鳳凰文皿は有田町猿川窯のほか、有田町の天狗谷PT ４c層、山辺田窯、広瀬向窯、コウタケ窯（以上図２）、掛の谷窯（図３）などで出土している。内山では金ヶ江三兵衛にまつわる天狗谷窯と小樽窯で出土している。金ヶ江三兵衛は1655年没。平戸領の佐世保市三川内では長葉山窯で古いと推測されるタイプ（図３-11・12）が古いタイプの荒磯文碗と共に出土している。有田で新しいタイプの日字鳳凰文皿がみられるのは天狗谷窯PT １層（図２-９・10）と弥源次窯（図３-３）、山辺田２号窯（図２-17）、広瀬向１号窯物原２層以上（図２-15）でみられるだけである。新しいタイプがみられるのは有田以外で、有田の黒牟田・応法地区と関りがあるような製品内容の嬉野市吉田２号窯（図３-４）、見込蛇目釉剥ぎなど、より粗製品が長崎県波佐見町中尾上登窯で多く作られる（図３-９・10）。広瀬向窯物原２層以上で１点みられる「月」のようなはねをもつ表現（図２-14）が、波佐見町三股青磁窯（図３-５）にある。このように有田でも外山から、大村領波佐見に拡大したかと思われる。ベトナム・タンロン王宮では、初期的な「日」字の表現はみられないが、広瀬向窯に近いものが多く（Bui 2011の144頁）、また「月」のようなはねをもつもの（Bui 2011の145頁）は広瀬向窯の図２-14に近いが雲はみられない。

＜平碗形小皿＞（図４～６）

径の小さい高台から直線的に大きく開く平碗形の小皿は、景徳鎮の明末にみられ、伝世例で見込に「雨香斎」字を染付し、内外側面に色絵で草花を描いた例がある（九陶2020図419）。景徳鎮の影響と思われる「雨香斎」字文皿が猿川窯で出土している（図４）。また、猿川窯ではより扁平な小皿があり、口縁部に雷文帯をめぐらす例（図５-１）がある。以後の平碗形皿に通有の口縁部雷文帯につながる可能性がある。実際に平碗形で口縁部に雷文帯を染付した皿は有田町長吉谷窯で多くみられる。見込文様の違う４種類があるが、１つは、見込に「大明成

化年製」の２行６字銘を染付したものである（図５－２）。口縁の雷文帯は縦線を８本並べる。２つ目は、口縁部を欠失しているが、見込に兎を描き、高台内に「太明」銘を染付したもので、ベトナム・ホイアン・ディン・トウレー出土品（菊池他 1997 図 68-27）にあり、口縁部に雷文帯を描くことから同類とわかる。３つ目は見込に花と思われる文様、高台内に「太明」銘を染付したものである（図５－５・６）。口縁は異なる雷文帯を染付する。長崎の 1663 年寛文大火で築町遺跡出土品に見込菊のような草花を描くものがある。口縁の雷文帯は縦線を 10 本引き、高台内は「太明」銘を染付する。これは長吉谷窯のものと同時期とみられる。４つ目は、長吉谷窯出土品であるが異なる雷文帯を口縁に描き、見込に土坡と草と思われる文様を描く（図５－８）。これに近いものは、嬉野市不動山皿屋谷窯でみられる（図６－１・２）。波佐見では、辺後の谷窯で見込に土坡と草花文を描いたものがある（図６－３）。口縁部はダミ塗の帯を配するが、染付線の有無は分からず、雷文か否かは不明である。

以上のように海外ではベトナムのホイアンで２点出土している。

口縁部に雷文帯を描く平碗形小皿は、荒磯文碗と共に、長吉谷窯で作られたのが早いと思われ、1650 年代後半に始まると推測される。長吉谷窯と併行期に操業したとみられる不動山皿屋谷窯や波佐見の辺後の谷窯でみられるので、1660 年代頃であり、辺後の谷窯の見込の土坡と草花文は長崎市築町遺跡寛文大火（1663 年）層中の例（扇浦・大橋 2020 の図 12-14、図 16-３）に近いが、築町遺跡の例は高台内に「太明」銘をもち古式といえる。次の延宝（1670 年代）の末次断絶期とされる長崎市勝山町遺跡出土品の例（扇浦・大橋 2020 の図 14-17、図 16-４）がより近いといえる。唐人屋敷造成土下（1688 年以前）の例（扇浦・大橋 2020 の図 16）が肥前のどこで焼かれたかは現在のところ不明である。長吉谷窯の見込牡丹折枝文（図５－７）の流れと思われる。

＜内側面魚文小皿＞（図７）

日字鳳凰文皿と重なる時期の特徴的製品として内側面に魚文を三方に描き、外側面腰部に圏線で区画し、折枝文を配す小皿がある。古いものが有田の年木谷３号窯（図７－１）、楠木谷窯（図７－２）、枳藪窯（図７－３）で出土している。地域的にも有田泉山に近い年木山だけでみられる。これに近いものとして外山の広瀬向窯（図７－６）で出土している。残存状態がよくないため、比較が難しいが、似通った草花を見込に描いたものが有田町南川原窯ノ辻窯（図７－７）で出土している。1650 年代末か 1660 年頃に柿右衛門窯が年木山から南川原に移転したと推測されるので、移転直後の時期に作られた可能性もある。その見込文様などが異なる新しいタイプが長吉谷窯（図７－４）でみられる。両窯とも古いタイプの荒磯文碗が出土しているので、1650 年代後半頃と推測される。興善町遺跡寛文大火（1663 年）層下でも出土しており（扇浦・大橋 2020 の図４－30）、見込の草花文は楠木谷窯や年木谷３号窯のものに近く、有田の年木山

産と考えられる。1664 年遭難と推測される吹上浜採集品では新しい例が含まれる（大橋 2010b 図１-20、PL. 12)。有田以外では波佐見の辺後の谷窯（図７-９・10）で新しいタイプが出土している（波佐見町教委 1993)。辺後の谷窯では新しいタイプの荒磯文碗、寿字鳳凰文皿（図９-４)、「宣明年製」銘碗（図 10-４）などがともに出土しているので、1660 年代前後に操業時期があると推測される。よって魚文小皿の新しいタイプは 1660 年代までで終わると考えられる。この小皿が生産窯も限られ、生産期間も 1650 年代中心で短いためか、海外でもベトナムのタンロン王宮（Bui 2011 の 150-156 頁）で発見され、ズンフォン古墓（菊池 2010 の 132 頁）で１例みられるだけである。タンロン王宮では２種類あり、１つは吹上浜（1664 年）採集品に見込文様などがもっとも似通っている。もう一つは、波佐見の辺後の谷窯の見込の草花がより略化したような表現であり、型紙摺を用いたもの（Bui 2011 の 152 頁）もある。ズンフォン古墓も辺後の谷窯の見込の草花より古式とみられるものである。外側面の文様の略化も年木山のものより後出とみられる。

＜見込荒磯文碗＞（図８）

見込の荒磯文様などから、新旧が明らかになり、長崎寛文大火（1663 年）、吹上浜（1664 年、図８-２）採集品を境に新旧が分けられる。窯場も、古いタイプは佐賀県有田（図８-１）と長崎県三川内で作られ、新しいタイプは、有田では外山の多々良（たたら）の元（もと）窯や樋口（ひぐち）窯（図８-３）程度と少なくなり、代わりに佐賀県嬉野から長崎県波佐見、三川内、つまり、佐賀の私領山と大村領、平戸領の窯に生産の主体が移動していることがわかる（大橋 2021)。この主体の移動は、地理的に輸出港長崎に相対的輸送距離が短くなるといえる。輸送距離短縮は、時間と輸送コストの低減につながるという意味をもつであろう。

現在までに年代を知る根拠として、重要な事例を挙げてみる。

１．江戸の明暦大火（1657 年）に伴う遺跡では出土した例はない。これは国内遺跡のために強い根拠とは言えないが、あえて挙げておく。

２．万治３年（1660）銘の見込荒磯文碗が有田町長吉谷窯で出土している。

３．鹿児島県吹上浜で遭難船の投げ荷と推測される資料（大橋 2010b）に大量に含まれ、オランダの記録（フォルカー 1982）の中で、1664 年６月６日の出島台帳に、長崎からアモイに向かった小さなジャンク船が悪天候のためにやむなく「多くの日本製の粗製磁器」を海に投げ込んだ、とあり、続く記述からシャム（タイ）のジャンク船であり、琉球諸島で沈没したことがわかる。琉球諸島の前に投げ荷したと推測できるため、吹上浜の 3000 点以上のほぼ同時期の肥前磁器はこの沈船の積み荷であったことは間違いあるまい。

４．長崎市で寛文大火（1663 年）にあったことがわかるいくつかの遺跡で出土している。前述の 1664 年の投げ荷と推測される鹿児島県吹上浜採集の荒磯文碗に似通った文様表現であ

る。また、栄町遺跡の寛文大火資料では多いが（扇浦・大橋 2020 の図６－９）、見込龍頭文碗が多くみられる（扇浦・大橋 2020 の図６－３～５）。見込荒磯文の代わりに龍頭を表した見込龍頭文碗は吹上浜にも１点ある。これらは見込龍頭文をもつ雲龍（鳳）文碗の古いタイプ（以下Ⅰ期とする）といえる。長吉谷窯でわずかにみられる鯉の丸の代わりに龍頭を描いた碗（図８－４）も龍頭文の祖形かもしれない。

見込龍頭文碗はベトナム・タンロン王宮（Bui 2011 の 101 頁）で多く出土している。文様表現は崩れており、新しいタイプ（以下Ⅱ期とする）であり、類似のものは長崎県佐世保市三川内東窯出土品（図８－５）にみられる。三川内東窯の見込龍頭文碗は長崎寛文大火の栄町遺跡の龍頭文や 1664 年遭難船の吹上浜採集品の中に１点みられる龍頭文とは異なる。つまり、よく見ると、雲の表現が逆３の字状より崩れた表現であり龍頭の上下にこの雲を描くものが普通である。栄町遺跡の寛文大火例（扇浦・大橋 2020 の図６－５）は逆３字状の雲を龍頭の上にだけ描くのが普通であった。また、龍頭の表現も三川内東窯のものはより崩れがみられるし、栄町遺跡の例や吹上浜の例では上部に太陽かと思われる点が描かれるものが多いが、三川内東窯のそれには見られない。この新しいⅡ期の下限年代の指標といえるものが、長崎市唐人屋敷建設が 1688 年に行われる時の造成土下から多数出土した見込荒磯文碗（扇浦・大橋 2020 の図 15-４）と見込龍頭文碗（長崎市教委 2013 の第８図 16）である。両方ともに三川内東窯のものに似通っている。新しいⅡ期とみられる、より崩れた荒磯文碗を焼いた窯は有田にもある。樋口窯（図８－３）であるが、この窯は有田の内山ではなく三川内に近い外山に位置する。それ以上に、有田の周辺の窯に生産の中心が移っていく傾向がみられる。つまり、長崎県波佐見の咽口窯、中尾上登窯、佐世保市三川内東窯、佐賀県嬉野市の吉田窯などである。つまり、荒磯文碗の生産窯は 1655 ～ 1660 年代頃のⅠ期段階には有田の内山の長吉谷窯（図８－１）、谷窯、天狗谷窯など中心部の窯で焼造したが、1670 ～ 1680 年代には有田外山の樋口窯からさらに嬉野の吉田窯、そして藩が異なる波佐見（大村領）から三川内（平戸領）などの周辺が生産の中心となった。こうした荒磯文碗が天草でも作られたのは磁器原料となる陶石があるだけでなく天領であったからかもしれないが、出土している荒磯文碗はⅠ期タイプのものである。年代は 1650 年代後半から 1660 年代と推測されるものである。

文様表現の崩れ方から、Ⅰ期とⅡ期の中間的なものがあるが、やはり有田内山ではなく、有田の外山の広瀬向窯、佐世保市江永窯、嬉野の不動山、波佐見の中尾上登窯などでみられる。そして、長崎市勝山町遺跡では 1676 年に長崎代官末次家が断絶するのに伴う出土陶磁があり、この中にも見込荒磯文碗がみられる（扇浦・大橋 2020 の図 14-12）。

a. ベトナム

ベトナムの中で最も調査が進んだホイアンでの荒磯文碗の出土状況をみてみる。ディン・カ

ムフォー第１T（菊池他 1997）では、明末、中国景徳鎮、福建の磁器中心であり、上層から、肥前磁器は荒磯文碗（Ⅰ期）と日字鳳凰文皿が多く出土。この中では１点の「宣明」銘小碗が年代的に新しい。ディン・カムフォー第２T では、古い溝と新しい川跡があり、古い溝跡では中国景徳鎮と福建漳州窯の染付磁器が中心であり、肥前磁器は３片に過ぎない。新しい川跡では、明末、中国磁器は少量の漳州の染付と色絵があり、清の磁器（康熙）もわずかに出土。肥前は古い荒磯文碗（Ⅰ期）と日字鳳凰文皿が主である。新しいⅡ期の荒磯文碗１点、龍頭文碗１点が 1670 年代頃のもの。これらと「宣明」銘小碗が、1670 年代までこの遺跡が機能していたことを示す。ホイアンで他に古いⅠ期の荒磯文碗が出土する遺跡としては、潮州（ちょうしゅう）会館地点（菊池他 2002）があり、1655 ～ 1660 年代とみられるⅠ期の荒磯文碗と日字鳳凰文皿が出土。このような荒磯文碗のⅠ期の出土がみられる遺跡に対し、ホイアン・トゥーボン川右岸沿岸部に位置するチュンフォン地点（菊池他 2002）で表採された中国､肥前磁器中の肥前磁器の碗が、すべて長崎の 1663 年寛文大火後であり、1688 年唐人屋敷造成前の 1680 年代のものに近い荒磯文碗（Ⅱ期）と見込龍頭文碗（Ⅱ期）である。荒磯文碗の古いⅠ期タイプは１点である。またファン・チューチン 69 ／５地点（菊池他 2002）の４号土坑（どこう）で清朝磁器と共に出土した肥前磁器が荒磯文碗（Ⅱ期）である。

荒磯文碗が多く出土した既報告遺跡として、ハノイのタンロン王宮（Bui 2011）がある。荒磯文碗のうち、Ⅰ期より後出とみられ、Ⅱ期との中間的なもの（Bui 2011 の 99 頁）がわずかにあり、Ⅱ期が多く出土し（Bui 2011 の 100 頁）、龍頭文碗も多い（Bui 2011 の 101 頁）。ここでは「宣明年製」銘碗（Bui 2011 の 120、121 頁）もあり、有田で 1670 年代に始まる染付の型紙摺の碗（Bui 2011 の 102、106 頁）・鉢（Bui 2011 の 136 頁）・皿（Bui 2011 の 152、167 頁）が多いのである。オランダの記録によると、1676 年台湾のジャンク船が日本から 32,000 個のカップなどをトンキンに運んで来たこと、龍文のカップ 7,000 個、同種のやや小振りのカップ 2,000 個などを王家が購入したことが記される。1681 年に中国のジャンク船が日本からトンキンに到着したが、碗皿などを積んできたことが記される。Ⅱ期（1670 ～ 1680 年代頃）の荒磯文、龍頭文碗や、他ではほとんど見ない型紙摺の有田磁器などが、この記録に当たる可能性が高い。Ⅱ期の荒磯文碗と龍頭文碗、コンニャク印判の皿が出土した例としてはフィリピン・マニラのイントロムロス遺跡がある（野上 2006）。

b.　インドネシア

インドネシアでも、荒磯文碗は古いⅠ期タイプはジャカルタのパサリカン遺跡やマカッサルのソンバ・オプー城で確認できる。ソンバ・オプー城はゴワ王国の居城であるが、ゴワ王国はオランダに攻撃され、1669 年で終わる。ここではⅠ期もしくは中間タイプのみでⅡ期の荒磯文碗は見られない。新しいⅡ期タイプはバンテン王宮、ティルタヤサ離宮（りきゅう）、パサリカン遺跡

で出土している（坂井・大橋 2018）。特にティルタヤサ離宮の例は、ティルタヤサ大王（在位 1651 ～ 1678）の退位後の離宮であり、1682 年 12 月にオランダに攻略された歴史から、1670 ～ 1682 年の肥前磁器や中国景徳鎮磁器が主である。肥前磁器では染付五弁花か四弁花文皿が出土しており、五弁花か四弁花文は有田で 1670 年代に始まる見込文様である。タンロン王宮で型紙摺が多くみられる中での荒磯文と似通っている点からも、両遺跡の荒磯文碗の年代が 1670 年代頃を主とすると考えることができる。

このティルタヤサ離宮で景徳鎮磁器が多く出土したことについて、1674 年のオランダの記録があり、1675 年、バンテンスルタン・ティルタヤサ大王の船「ティルティアサ号」と中国のジャンク船の２艘がマカオからバンタムに多量の磁器を運んでいるとあるし、これについて 1674 年の『華夷変態』「五番広東船之唐人共申口」に、「ジャガタラ仕出し船４艘、今度広東へ寄せ渡り有り候間、跡より追々出船仕り筈に御座候、（中略）四艘船之内一艘はチャンドラ船にて御座候」とある。これには、中国磁器が多く含まれている可能性が考えられ、ティルタヤサ離宮で肥前磁器と共に多数の景徳鎮の良質磁器が出土しているのに当たるものと考えられる。これらが清朝の展海令（1684 年）以前に少しずつ輸出が始まった中国磁器の内容を教えてくれるものであろう。

また、バンテンに中国のジャンク船が日本製磁器を多量に運んだことは、1678 年、１艘の中国のジャンク船が日本からバンタムに多量の磁器を積んで入港とあることや、1680 年、中国のジャンク船が日本製の磁器を積んでに入港とあるのは肥前磁器の五弁花か四弁花文皿などを含むのに当たるのであろう。バンテン王宮でも五弁花文が２点出土している。現在のところ、海外ではインドネシア以外ではメキシコシティ大聖堂の発掘で小碗が出土している（エスピノサ 2010 の 286 頁）程度である。色絵の五弁花の小碗はオランダ・アムステルダムで出土（九陶 2000 の図 261）。このように日本国内では一般的な文様であるが、海外では特殊品がバンテンとティルタヤサ離宮で複数出土しているのは、同じ時に運ばれたのではないかと思われる。

このように、インドネシア、ベトナムに 1670 年代から清・展海令の 1684 年頃までに、それぞれ他では見られない肥前磁器の良質磁器がみられ、共通のものとして荒磯文碗のⅡ期タイプがある点は、それぞれ、ティルタヤサ大王、タンロンのトンキン王家が日中の磁器購入に力を入れたことが理由と考えられる。

両者には荒磯文碗の新しいⅡ期タイプを除けば違う点が多いのはそれぞれ別のジャンク船によって肥前磁器が運ばれたことを物語るのであろう。違う点は、ベトナムにあるものとして、型紙摺による鉢・皿、西洋風景文皿（Bui 2011 の 168 頁）、寿字鳳凰文皿（Bui 2011 の 144 頁）、鶴仙人文鉢（型紙摺）（Bui 2011 の 136 頁）、龍頭文碗が多い。

インドネシアのティルタヤサ離宮（坂井・大橋 2018 図 464）やバンテン王宮（坂井・大橋

2018 図 399、403）では五弁花か四弁花文皿・碗・小皿などである。

荒磯文碗のⅠ期と同時期には、ベトナムで日字鳳凰文皿が多く、インドネシアではほとんど例がない。寛文大火後の 1663 ～ 1670 年代頃にみられるものに「宣明」の２文字銘小碗がある（図 10-２、３、５）。より古い「宣明年製」の４文字銘（図 10-１・４）は栄町遺跡の寛文大火資料で染付鉢（長崎県教委 2001 第 25 図 200）が１点出土している。台南の安平地域でも出土し鄭氏船が運んだ可能性が推測される。インドネシアでは伝世の合子でこの銘の例があるが、出土例は見ない。ベトナムではディンカム・フォー第１T で１例出土。タンロン王宮遺跡でも２点以上の「宣明年製」銘碗が出土（Bui　2011 の 120、121 頁）。このほかタイのアユタヤ川引揚げ資料（九陶 1990）に２例ある。ラオス・ビエンチャンでも後述のように、「宣明年製」銘小碗が２点、「宣明」銘小碗が１点出土している。

c.　タイ

タイではアユタヤ川引揚げ品（九陶 1990 の 157 ～ 171 頁）に荒磯文碗が多く、Ⅰ期タイプが４点に対し、Ⅱ期タイプが５点あり、龍頭文碗もⅠ期が１点に対し、Ⅱ期が４点みられることと、1660 年代頃に多い「宣明年製」銘小碗が２点ある。

タイでは日字鳳凰文皿はみられず、前述の通り、一般的な日字鳳凰文皿はベトナム中心に多い。ラオスでも日字鳳凰文皿はみられない。

d.　ラオス

ラオス・ビエンチャンでは荒磯文碗のⅠ期が２点、Ⅱ期が１点あり、「宣明年製」銘小碗が２点、「宣明」銘小碗が１点ある。「宣明」銘は東南アジアへの輸出ルート上の台湾の左営遺跡で２例出土している（王 2010）。台南・安平地域で「宣明年製」銘が出土し、鄭成功がオランダの台湾商館を 1661 年に攻略して後の左営で出土したものは、より新しい「宣明」銘で妥当といえる。よって、1663 年以前で近い頃には「宣明年製」銘が現れている可能性がある。そして、勝山町遺跡の延宝期（1673 ～ 1681 年）の廃棄資料には「宣明」の２文字と「宣明製年」のアレンジ名が出土しているが「宣明年製」銘はみないので「宣明」銘に新旧があることを裏付けていると思われる。「宣明年製」（図 10-１）だけは 1663 年以前に現れ、他のアレンジ銘は 1663 年以降に現れた可能性がある。見込荒磯文は鉢が２例報告されているが（清水 2010、2017）、時期は碗のⅠ期と同じものであり、またセボン鉱山遺跡でもⅠ期タイプの荒磯文碗があり、Ⅱ期がなく、もちろんⅡ期の龍頭文碗もない点が特徴として挙げられる。

ビエンチャンではこの頃までで、龍頭文碗Ⅱ期タイプはない点で、ベトナムやタイのアユタヤとも異なる。なお、カンボジアでも龍頭文碗は未発見である。ラオスの場合、流通ルートがベトナム、カンボジア、タイのどこから入るかで内容が異なる可能性があるが、今後の課題といえる。荒磯文碗と龍頭文碗で見る限り、ラオスはベトナムやタイとは異なるといえる。

e.　台湾

台湾の澎湖群島や東山冬古湾沈船で肥前の荒磯文碗のⅡ期タイプが各１点ではあるがみられるのは、1661 年オランダから台湾を奪取し、台湾を拠点とした鄭氏一派と関りがあるのではなかろうか。

小結

このように東南アジアで荒磯文碗、龍頭文碗が 1670 年代（～ 1682 年）にも多い点を記録から考えてみると、トンキン王家向けや、トンキンに 1676 年、1681 年に多量の碗・皿類が日本からトンキンに運ばれた記録がある。運んだのは台湾のジャンク船、中国のジャンク船とあるのは状況から鄭氏一派の船と推測されるから、台湾などでもこのⅡ期タイプが出土していることで裏付けられる。

Ⅰ期タイプの荒磯文碗（図８－１）は鹿児島県吹上浜で大量に採集されており（図８－２）、遭難船の投げ荷と推測され、内容と記録から、1664 年のシャムのジャンク船によるものと推測された。とすれば、ほとんどが東南アジア向けと考えられる。

以上のように、1650 年代後半から 1680 年代にかけて、肥前の広域で生産された荒磯文碗が、時期により生産の中心地域も変化したこと、また流通地域は東南アジア中心であるが、地域により時期・内容に差があることも明らかになりつつあることを検討した。

（２）東南アジア向け磁器の出現（1650 年代頃）

1650 年代の粗製の肥前染付皿などもインドネシア・バンテン遺跡などで出土しており、また佐賀県嬉野の吉田窯の 1650 年代頃の色絵印判手皿、有田・山辺田窯の青手大皿・粗製五彩手大皿などがある。これらは他の海外地域での出土例は無い。インドネシアで吉田産とみられる粗製芙蓉手皿もあり、吉田窯の輸出は取扱商人がインドネシア中心に運んだことを物語っている。有田町掛の谷窯などができ、焼かれた染付日字鳳凰文皿や粗製の芙蓉手皿が 1650 年代前半から加わった可能性は高く、インドネシア、ベトナムなどで出土している。1650 年代であることの証左として、1660 年代からのインドネシア・ティルタヤサ離宮跡や台湾・鄭氏関連遺跡ではみられない。1650 年代後半には東南アジア向けの主製品として肥前一帯から熊本県天草の窯でまで焼かれた染付荒磯文碗・鉢が現れる。この時期にはオランダ東インド会社の記録にあるように、バタビアの薬局や病院用の薬瓶や薬壺などが輸出されたと考えられる。近年、その古さを示す資料が出土している（野上 2008）。古いものは有田の猿川窯で出土していることはすでに紹介した（大橋 2000）。

６．肥前磁器の輸出時代

（１）欧州輸出の始まりと輸出時代突入（1655 ～ 1684 年）

1659 年からのオランダ東インド会社による本格的輸出、特に、東南アジアより西のヨーロッパまでの地域の輸出開始である。そして 1684 年までの東南アジア向けの代表は染付荒磯文碗・鉢であり、日字鳳凰文皿に代わって寿字鳳凰文皿が有田の長吉谷窯、柿右衛門窯などで作られ、東南アジアに輸出され、ベトナムで出土している。

＜ヨーロッパ向け輸出品＞

ヨーロッパ向け輸出の代表的なものは、染付芙蓉手皿など芙蓉手意匠の磁器である。17 世紀前半にヨーロッパで大変好まれた景徳鎮磁器の意匠であり、オランダの絵画などにも盛んに描かれた。1660 ～ 1680 年代にはヨーロッパの生活にもとづく様々な器種、器形の磁器を有田は作り出しヨーロッパに輸出した。

はじめは中国の磁器を手本としたような意匠が多かったが、次第に独自のデザインの磁器を作り出していく。その象徴的なものが柿右衛門様式である。1650 年代の有田の色絵はまだ「初期色絵」と呼ぶ濃い色調のものであったが、ヨーロッパ人はより白い素地に明るい色調の色絵を求めたためか、1660 年代の中で明るい色調の色絵が中心となり、1670 年代に典型的な柿右衛門様式が成立する。

＜柿右衛門様式＞

典型的柿右衛門様式とは､その代表的製品である 7 寸皿は折縁に作る皿の器形からいっても、これはナイフを使うヨーロッパの食生活を考慮した器形と考えられる。日本国内での遺跡出土品や伝世品もほとんどないことからもヨーロッパ向けの当時最高級の色絵磁器といえる。より完璧な品格高い色絵であり、柿右衛門窯でそれを作り出すと、有田諸窯（色絵は赤絵町であるが）でも色絵の特徴だけ似たものを作り出し、一時代の流行様式になった。

柿右衛門窯系の南川原は、当時、有田の中でも最高水準の技術をもっていたと推測できるが、その製品は色絵に限らず、主力である染付でも特徴をもつ製品を生産したことが窯跡資料などから明らかである。柿右衛門窯系の南川原での染付製品はインドネシアで見込に蟹を描いた小皿が出土しており（九陶 1990 の図 318)、出土例もわずかにではあるがみられる。バンテン王宮遺跡出土の蟹文小皿と同じ皿がオランダのトウィッケル城に伝世している（Jorg 2003 の no. 167)。蟹文などは日本国内でもあまり多くないものだけに、これはオランダが運んだことを示唆するものである。こうした柿右衛門窯系の南川原での染付が海外で多くみられるのはイギリスを中心とした欧州であり、伝世品ではあるが極めて多い。1655 ～ 1684 年の中に肥前磁器が陶器も加えて最も多く広く輸出された時期がある。それは 1650 年代後半から 1670 年代、特に 1660 ～ 1670 年代中心である。これは中国が 1656 年、海禁令を発布し、貿易禁止を

強化するが、清朝に抵抗を続ける鄭成功が台湾のオランダ商館を 1660 年、攻略して拠点とする。そして 1659 年にオランダ東インド会社が本格的大量輸出を開始し、輸出時代に入る。その 1660 ～ 1670 年代である。それを証する考古資料としては、インドネシアの西ジャワに栄えたバンテン王国のティルタヤサ離宮遺跡とベトナム･ホイアン遺跡、長崎唐人屋敷（造成土下）がある。

＜初期輸出色絵＞

この時期に東南アジアに多くみられる色絵磁器について述べるが、そのためにはこの時期に肥前で作られた輸出色絵、すなわち典型的柿右衛門様式が成立する前の初期の輸出色絵の種類をまとめてみると、

① 赤を多く用い､特に袋物では壺瓶など上下に赤の帯を配するのが特徴となるものがある。

② 赤をほとんど使わず緑・青・黄を主に使うタイプ。

③ 赤・緑・黄を主として使い、東南アジア向け碗・鉢類が多いタイプ。

④ 瑠璃釉に多いが、金・銀・赤で彩色したもの。

③だけが東南アジア向けに主に作られ、中国の漳州窯の呉須赤絵を手本としたように、付け立てで描く。主にインドネシアで出土したり、伝世品が知られる。

この時期の一般的流通を複数の出土例がある製品でみていくと、見込荒磯文碗・鉢は大橋 2010a 図１のように台湾、ベトナム、カンボジア、タイ、ラオス、マレーシア、インドネシアと広域で出土する。しかし、この荒磯文碗・鉢も中国が本格的に輸出再開する 1684 年以降急速に消える。肥前諸窯でも 1690 年代以降の窯ではみられない。

一方､地域差のある碗として「宣明」（図 10-２・３）もしくは「宣明年製」（図 10-１・４）など、「宣明」を伴う銘を表したものがある｡これは有田が明末の中国磁器の銘を模倣して用いる中で、適宜アレンジして使った結果、中国磁器にないような銘が出現する。「宣明」を伴う銘もその一つであり、1660 年代に現れ、1670 年代頃まで多く用いられた。国内でも出土するが、台湾、タイ、ラオス、インドネシアで出土している。

同様の分布を示す磁器に独特の器形の小瓶（九近陶 2010 のカラー図版 12､37 ～ 40）がある。伝世品での分布が主である。1650 ～ 1660 年代で少し違う出土分布を示すのが粗製の芙蓉手皿である。普通の芙蓉手皿と共にフィリピンのマニラで出土しているからである（大橋 2010a の図２）。台湾のゼーランジア城でも出土し、オランダ時代の 1650 年代頃に普通の芙蓉手皿より先行して欧州人の食器として運ばれた可能性がある (大橋 2024)。後述するようにマニラはスペインのアジア貿易の拠点であり、スペイン船は太平洋を越えてアメリカ大陸との貿易を行ったため、メキシコやキューバで肥前磁器が出土している。普通の芙蓉手皿はメキシコシティで出土している（野上 2013 の図 21)。

1659 ～ 1684 年の出土分布に共通するのが、肥前陶器の二彩手大皿である（大橋 2010a 図１）。肥前の陶器、すなわち唐津焼は 1580 年代頃に始まり、1590 年代から日本国内に広く流通した。インドネシアでは 17 世紀前半と考えられるものがわずかに出土しているが、多く出土したり、伝世品もあるのは 17 世紀後半の二彩手大皿である。以上のような、荒磯文碗･鉢、宣明銘の碗、小瓶、二彩手陶器大皿などは 1659 ～ 1684 年に東南アジア向けで、ヨーロッパには渡らなかったと推測される代表的な製品である。

これらの肥前陶磁のうち、年代の古い粗製芙蓉手皿以外は鄭氏がオランダに代わって根拠地とする台湾の遺跡で出土し、中国船が盛んに運んだとみられるシャムやその流通ルートにあると考えられるラオスで出土し、インドネシアも鄭氏の交易圏であることを考えると、これらは鄭氏船が扱った可能性が高い。

もう一つ鄭氏船が重要な役割を果たしたと考えられるのは、フィリピンのマニラを東洋貿易の根拠地とするスペインに肥前磁器を運んだとみられる点である。江戸幕府により貿易が許されなかったスペインが、鄭氏船から肥前磁器を購入し、太平洋を越えてメキシコなどに運んだと考えられる。最近、キューバやスペインで肥前の染付チョコレートカップの出土例が確認されており（田中 2010）、1660 ～ 1670 年代頃に限ってはスペイン船も肥前磁器を商品として運んだと考えられる。

1659 ～ 1684 年にヨーロッパ向けの象徴的な磁器として、前述の典型的柿右衛門様式があるが、この典型的柿右衛門様式はかなり限られた需要の下に作られたことが、次第にわかってきた。典型的柿右衛門様式は、器種から言えば象徴的な壺・瓶など装飾性の高い板作りであることが特徴である（大橋 2019）。ところが幕府の貞享令（1685 年）によって、オランダ東インド会社は大型品を脇荷輸出品として扱い始めたと思われる。当時の欧州王侯の間で室内装飾に大型の東洋磁器を求められたとみられる。こうした新たな需要の結果、1680 年代頃から色絵傘持ち人物文大壺など総高 60 ㎝前後くらいの大壺が大瓶との５点セットで作られ始めた。以上のように、1690 年代頃には八角に面取りした大壺・大瓶が色絵と染付で少なからず作られる。1659 ～ 1684 年の肥前磁器輸出の最盛期には、国・地域によって様々な形のものが作られた。

（２）東南アジアの生活文化の差異などによる地域差

a.　ベトナム

日本などと同様に箸を使って食事をとるため、碗・小皿が主製品である。デザインは中国・明末の磁器を見本とした荒磯文碗・鉢や日字鳳凰文皿などが主たる製品である。瓶がいくらかある。年代は 1650 ～ 1680 年代が主であるが、瓶で 1640 年代頃の天狗谷窯と推定できるものが１点ある（菊池他 2002 の 25 頁）。

b.　タイ

箸は使わず、碗を主とした食器構成であり、他に蓋物などが多いのが特徴である。肥前の二彩手陶器大皿がみられる。磁器の年代は 1650 ～ 1670 年代が主である。

c. カンボジア

資料は少ないが、タイと同様と推測される。噛みたばこの石灰入れとして使われる小壺などがある。

d. ラオス

箸を使わず、碗を主とし、他に蓋物があり、肥前の二彩手陶器大皿があるなどタイと同様である。年代もタイと同様。タイ、カンボジア同様の小壺が出土しており、噛みたばこの石灰入れの可能性がある。

e. インドネシア

東南アジアの中でもインドネシアにオランダの根拠地バタビアがあり、長くオランダが支配したため、肥前陶磁の内容は特別であり、量的にも多い。イスラム教が主で手食のためか地元向けには大皿などが多い。荒磯文碗・鉢はあり、合子などもあり、多彩である。1680 年代以前はヨーロッパ向けと東南アジア向けが混在。インドネシア向けとしては初期色絵の大皿（青手と五彩手）や色絵印判手大皿（嬉野市吉田窯）、二彩手陶器大皿や粗製芙蓉手皿、青磁大皿があり、鳥形合子、染付大合子、白磁瓶、ケンディも東南アジアの中ではインドネシア以外では発見されていないのでインドネシア向けと考えられる。他に、染付六角小杯、色絵碗もある。比較的インドネシアに多い合子は噛み煙草の石灰入れであるが、大合子の場合、ヨーロッパにもあり、石灰入れかどうかはわからない。

インドネシアで出土するこの時期のヨーロッパ向けは染付芙蓉手大皿など芙蓉手意匠の皿・鉢、染付大深鉢、南川原産の染付蟹文皿などがある。1682 年に攻略されたティルタヤサ離宮遺跡では見込五弁花文皿が出土しているように東南アジアでは、他に例のない染付皿も出土している。1680 年代頃を境にインドネシアを除く東南アジア諸国から肥前磁器が消えていき、中国磁器で占められるようになるのは、1684 年に中国が展海令を発布して再び中国磁器輸出が本格化したことが主因といえるだろう。もちろん中国磁器の輸出はそれ以前の 1670 年代頃から段階的に増え始めている。おそらくインドネシアにおいても、肥前磁器が中国磁器より割合が多かったのは 1650 ～ 1660 年代頃の間であろう。台湾出土の中国の桐一葉文皿の年代が 1670 年代であることや、吹上浜採集の福建産染付寿字文碗などの 1650 年代後半～ 1664 年、特に遷界令の頃の 1655 ～ 1660 年代は肥前で東南アジア向けの代表である荒磯文碗・鉢が大量に生産された中心の時期と符合する。あるいはこれらの大量生産、大量輸出は 1656 年の清朝による海禁令以後に始まったと推測される。1680 年代までで東南アジア向けといえる製品はほとんどなくなる。クンディや白磁の薬瓶が残るかもしれない程度である。カンボジア、ラオ

スなどではみられなくなるが、ベトナムでは1680年代末か1690年代頃とみられるコンニャク印判の染付皿の伝世例がある。もちろんこれは東南アジア向けというわけではない。

７．肥前磁器の輸出減退

（１）中国の本格的輸出再開による欧州での競争の時代（1684年～1710年代）

1684年、中国清王朝は台湾の鄭氏が降伏し、国内統一を果たしたため、貿易禁止を解く展海令を発布した。このため、中国磁器の輸出はそれまで少しずつ行われていたのが本格化し、夥しい量の陶磁器が再び輸出され、東南アジアなどのより中国に地理的に近い地域では瞬くうちに、肥前磁器は締め出されてしまう。つまり、現象としては東南アジア向けの肥前磁器は消えることになる。

以後の肥前磁器の海外輸出はオランダ東インド会社によってヨーロッパ輸出されるものが主となる。しかしこのヨーロッパ市場でも輸出が本格化した中国・景徳鎮磁器が圧倒的に多く、肥前、といっても有田磁器に絞られるが、量的には減退する。そのことはオランダやイギリスでの遺跡出土品の割合や、南アフリカのケープタウンで1697年沈没のオースターランド号引揚げ陶磁器（九陶2000）の割合などから推測できる。

この時期、ヨーロッパ向けの象徴的な有田磁器として、大型の壺・瓶の５点セットがある。これはサイズの大きい壺・瓶は焼く窯の大きさにも制約されるから、蓋付総高90㎝もの大壺の場合には、蓋はのせずに別に焼いたらしい。身は60㎝台が最大であるため、高さを高めるためか、1700年代以前の壺に比べて蓋の甲を高く作り、さらにつまみに人形、獅子や高い宝珠形に作り、総高をより高くしたものと考えられる。これもヨーロッパ富裕層からのより丈の高い壺の需要と､有田の技術的制約から生まれた形であろう。またこうした大型の壺･瓶はヨーロッパ向けに作られたものであり、日本国内には基本的に流通しなかった。

1690年代に有田の色絵は柿右衛門様式に代わって金襴手様式が主流となる。金襴手の前の典型的柿右衛門様式の壺は総高33㎝程度が最大であった。これは板作りという特殊な技術とサヤの大きさに制約されてのことであろう。ところが、典型的柿右衛門様式の影響を受けた有田で乳白手でない大きな壺が作られる。総高50㎝を越す壺であり、しかも壺と花瓶のセットで作られるのである。この壺・瓶の５点セットが有田に注文され始めた理由は、次のことが考えられる。1685年の幕府の長崎貿易制限令で、オランダ船による磁器輸出は公式貿易から定額となった脇荷と呼ぶ私貿易に中心が移り、体積が大きい製品でも取り扱うようになったものと考えられる。ヨーロッパの需要もあって、この頃から大型の壺・瓶５点セットの輸出が始まったのであろう。脇荷輸出で壺･瓶の５点セットが輸出されたことは、1709年、壺2,256個、花生け1,286個、1711年、壺9,619個、花生け4,076個、1712年、壺2,180個、花生け1,490

個と、それぞれ壺・花生けがたくさん入っているし、常に壺の方が多く、1709 年、1712 年の壺と花生けの割合はほぼ壺３対瓶２の数量関係にある。つまり５点セットとして売ることができるような壺・瓶の数量関係で調達されたものが多いことが推測できる。

私貿易が盛んになったため、幕府は 1696 年、出島に脇荷専用蔵を２軒建てるほどであり、1723 年までは脇荷輸出が盛んであったと推測される。まさにドイツ・ドレスデンのアウグスト強王が盛んに日本の磁器を収集していた時期がこの私貿易が盛んであった時期の中に入る。

こうした大壺・瓶のセットは基本的にはヨーロッパの王侯貴族向けであり、今も宮殿邸宅を飾って目立つため、有田磁器輸出の代表のように思われているが、実際に輸出数量が多かったのは、コーヒー、茶、チョコレート飲料のカップ＆ソーサーであった。オランダでの遺跡出土品で最も多いのがカップ＆ソーサーであることがそれを物語っている。

この時期はアジア市場での肥前磁器輸出は激減したわけであるが、唯一多く出土している地域はインドネシアである。しかし、インドネシアでの出土品をみると、特にインドネシア向けというものはみられず、ヨーロッパ向けの磁器がオランダのアジア貿易の拠点であったバタビアをはじめインドネシア地域内に流通したと考えられる。バンテン王宮遺跡でも色絵壺の蓋や染付チェンバーポット、染付植木鉢のほか、大小の色絵皿や鉢、カップ＆ソーサー、段重、色絵髭皿など、いずれもヨーロッパ向けとみられる製品である。

スラウェシのブトン・ウォリオ城では、色絵と染付の大壺・大瓶が 90 個体分もの破片が出土しているのは異例といえる。ほかに大皿やカップ＆ソーサーが少量出土しているが、この大壺・大瓶の出土の多さは特別であり、内容からみればオランダ東インド会社が贈答のような形でもたらした可能性が高い。香料貿易のためにこの地域を支配しようとするオランダ東インド会社に対抗して 1668 年に滅ぼされたマカッサル王国に対して、オランダに協力的であったブトン王国への友好の証かもしれない。

（２）肥前磁器輸出の終焉（1720 ～ 1757 年）

1715 年頃から磁器収集をしたザクセン選帝侯アウグスト強王が 1733 年に亡くなり、有田磁器の輸出はさらに減少傾向に入るが、1740 年に即位したオーストリアのマリア・テレジアの時代にウィーンなどに新たな特徴をもつ有田磁器がみられる。1757 年、オランダ総督官邸用の「金彩平鉢、金彩大皿など 300 個」を輸出とオランダの記録にあるが、これを最後にオランダ東インド会社による有田磁器の公式輸出は終わる。以後は脇荷輸出という私貿易で細々と輸出されたが、1799 年でオランダ東インド会社が解散となる。

有田磁器輸出の終焉の理由としては、景徳鎮磁器との価格競争に敗れたことと、オランダ東インド会社がイギリスにアジア貿易の首座を奪われていったことが主因と考えられるが、加えてヨーロッパでの磁器生産技術が広まっていったことも有田磁器への需要減に影響したと考え

られる。

そして中国景徳鎮磁器の欧州輸出の盛期も有田よりおよそ50年後の18世紀末には終わるが、この主因はイギリスなどで量産化していく陶磁器生産との価格競争に敗れたことである。高い輸送費を払ってはるばる東洋から運ぶ価格の高い中国磁器を買う必要がなくなるのであろう。19 世紀中葉になると、逆に産業革命で量産されたヨーロッパの陶磁器がアジア市場に流通するようになり、中国磁器が広く輸出する時代は終わるのである。

注

箭内 1986 の 239 頁、「李旦が寛永２年平戸で病没したのちは、その子アウグスチン一官と鄭芝龍との間で東シナ海での勢力争いが行われ、やがて鄭芝龍がその主役となって日中貿易に大きくクローズアップされてきた。」

参考文献

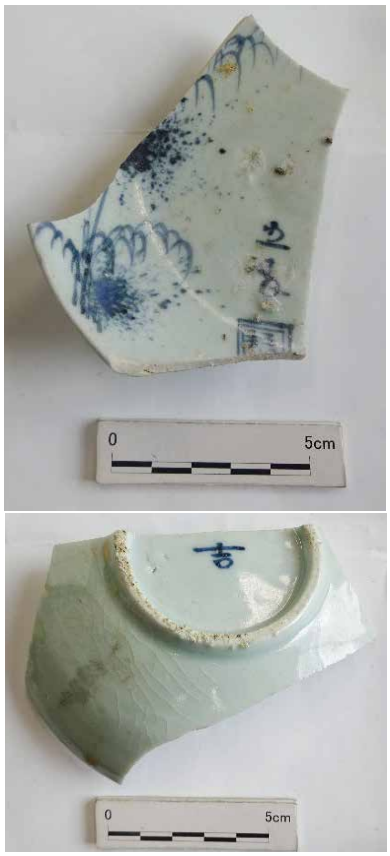
有田町教育委員会　1986 『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査（遺物篇）』
有田町教育委員会　1986 『小樽２号窯跡』
有田町教育委員会　1989 『窯の谷窯・多々良の元窯・丸尾窯・樋口窯』
有田町教育委員会　1990 『一本松窯・禅門谷窯・中白川窯・多々良２号窯』
有田町教育委員会　1992 『楠木谷窯・天神町窯・外尾山窯』
有田町教育委員会　1993 『小物成窯・平床窯・掛の谷窯』
有田町教育委員会　1994 『小溝上窯・年木谷３号窯』
有田町教育委員会　2017 『山辺田遺跡』
石原道博　1959 『国姓爺』
岩生成一　1958 『朱印船貿易史の研究』弘文堂、東京
扇浦正義・大橋康二　2020 「長崎の寛文大火層出土陶磁を中心に」『江戸時代における年代の判る罹災資料』近世陶磁研究会
大橋康二・尾崎葉子　1988 『有田町史古窯編』有田町
大橋康二　2000 「輸出した伊万里の医療品（１）」『目の眼 283 号』
大橋康二　2010a 「世界に輸出された肥前陶磁」『世界に輸出された肥前陶磁』pp. ２～ 29　九州近世陶磁学会
大橋康二　2010b 「鹿児島県吹上浜採集の陶磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』pp. 42 ～ 66　九州近世陶磁学会
大橋康二　2021 「肥前染付荒磯文碗の生産と流通」『港市・交流・陶磁器』雄山閣
大橋康二・扇浦正義　2021 『近世長崎の発掘と中国明朝磁器』アジア文化財協力協会（電子書籍）
大橋康二　2024 「17 世紀における台南・安平地域出土の中国と肥前磁器の特徴」『17 世紀前後の台湾とその周辺（1550-1717）考古学的観点から』国立成功大学考古学研究所
菊池誠一他　1997 『ホイアンの考古学調査』昭和女子大学
菊池誠一他　2002 『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』昭和女子大学
菊池誠一　2010 「ベトナム出土の肥前陶磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』pp. 123 ～ 132　九州近世陶磁学会

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会　2010 『世界に輸出された肥前陶磁』
小山正明　1985 『東アジアの変貌』講談社
坂井隆・大橋康二　2018 『インドネシアの王都出土の肥前陶磁』雄山閣
佐賀県立九州陶磁文化館　1985 『百閒窯・樋口窯』
佐賀県立九州陶磁文化館　1987 『楠木谷窯・小溝上窯』
佐賀県立九州陶磁文化館　1989 『嬉野町吉田２号窯跡』
佐賀県立九州陶磁文化館　1990 『海を渡った肥前のやきもの展』
佐賀県立九州陶磁文化館　2000 『古伊万里の道』
佐賀県立九州陶磁文化館　2001 『柴田コレクションⅦ』
佐賀県立九州陶磁文化館　2020 『柴澤コレクション』
佐世保市教育委員会　1999 『長葉山窯跡発掘調査報告書』
佐世保市教育委員会　2014 『市内遺跡発掘調査報告書』
佐世保史談会　2002 『平戸藩御用窯総合調査報告書』
清水菜穂　2010 「ヴィエンチャン旧市街地内出土の肥前陶磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』pp.133 ～ 176 九州近世陶磁学会
清水菜穂　2014 「ラオス出土のヴェトナム陶磁」『14・15 世紀海域アジアにおけるベトナム陶磁の動き』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.21、昭和女子大学
清水菜穂　2017 「近世ラオス・ヴィエンチャン旧都城出土の Blue and White」『中近世陶磁器の考古学第６巻』雄山閣
武野要子　1985 「細川藩の貿易の変遷」『九州と外交・貿易・キリシタン（Ⅱ）』国書刊行会
田中恵子　2010 「メキシコ、キューバ、スペインでの４個の肥前染付チョコレートカップの発見」『世界に輸出された肥前陶磁』pp.307 ～ 312 九州近世陶磁学会
千代田区立日比谷図書文化館　2013 『徳川将軍家の器』
東京都埋蔵文化財センター　1997 『汐留遺跡Ⅰ』第３分冊
長崎県教育委員会　2001 『栄町遺跡』
長崎市教育委員会　1998 『興善町遺跡』
長崎市教育委員会　2003 『勝山町遺跡』
長崎市教育委員会　2007 『興善町遺跡』
長崎市教育委員会　2013 『唐人屋敷跡』
長崎市教育委員会　2019 『出島和蘭商館跡 第１分冊』
長崎市埋蔵文化財調査協議会　1996 『万才町遺跡』
永積洋子訳　1969 『平戸オランダ商館の日記　第１輯』岩波書店
永積洋子　2001 『朱印船』吉川弘文館
中田易直　1986 「第五節　鎖国の形成と貿易統制」『長崎県史対外交渉編』pp.205 ～ 232 長崎県
中村質　1988 『近世長崎貿易史の研究』吉川弘文館
野上建紀　2006 「スペイン時代のマニラ出土磁器」『金沢大学考古学紀要 28』pp.29 ～ 60 金沢大学考古学講座
野上建紀　2008 「アーフォントステル号発見の有田産アルバレロ形壺」『金大考古第 60 号』pp.19 ～ 23 金沢大学考古学研究室
野上建紀　2013 「ガレオン貿易と肥前磁器」『東洋陶磁第 42 号』東洋陶磁学会
野上建紀　2015 「清朝の海禁政策と陶磁器貿易」『金沢大学考古学紀要 37』pp.11 ～ 20　金沢大学考古

学講座
波佐見町教育委員会　1993 『波佐見町内古窯跡群調査報告書』
波佐見町教育委員会　1994 『下稗木場窯跡・三股古窯跡・永尾高麗窯跡』
波佐見町教育委員会　1996 『Ⅰ高尾窯跡』
波佐見町教育委員会　1998 『三股青磁窯跡』
波佐見町教育委員会　2008 『中尾上登窯跡』
箭内健次　1986 「第一節鎖国日本をめぐる国際環境」『長崎県史対外交渉編』pp. 233 ～ 250 長崎県
山脇悌二郎　1988 「貿易篇―唐・蘭船の伊万里焼輸出―」『有田町史商業編Ⅰ』有田町
波佐見町教育委員会　1993 『波佐見町内古窯跡群調査報告書』
日比谷図書文化館　2013 『徳川将軍家の器』
深見純生　2014 「15 世紀のマジャパヒト」『14・15 世紀海域アジアにおけるベトナム陶磁の動き』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.21、昭和女子大学
西日本文化協会　1990 『福岡県史　近世史料編細川小倉藩(1)』
王淑津　2010 「台湾ゼーランディア城、大坌坑と左営遺跡出土の 17 世紀の肥前陶磁」『世界に輸出された肥前陶磁』pp. 九州近世陶磁学会：67-75
エスピノサ / エラディオ・テレロス（野上建紀訳）　2010 「メキシコシティ中央歴史地区から出土した東洋陶磁」『世界に輸出された肥前陶磁』pp. 284 ～ 292 九州近世陶磁学会
フォルカー･T、前田正明訳　1981 「磁器とオランダ連合東インド会社 (20)」前田正明訳、『陶説 337 号』日本陶磁協会
フォルカー・T、前田正明訳　1982 「磁器とオランダ連合東インド会社 (30)」『陶説 350 号』日本陶磁協会
Bui Minh Tri　2011 “Japanese Ceramics in Thang Long Royal Palace”, Social Sciences Publishing House, Ha Noi
Butterfield Auctioneers Corp　2000 “Treasures from The HoiAn Hoard”
Goddio, Franck et al　2002 “Tresor De Porcelaines”,Periplus Publishing London Ltd.
Jorg/C.J.A. 2003 “Fine & Curious” Amsterdam

＜窯ノ辻窯＞

1



2

＜猿川窯＞

3

4

図１　染付「三官」「五官」銘皿

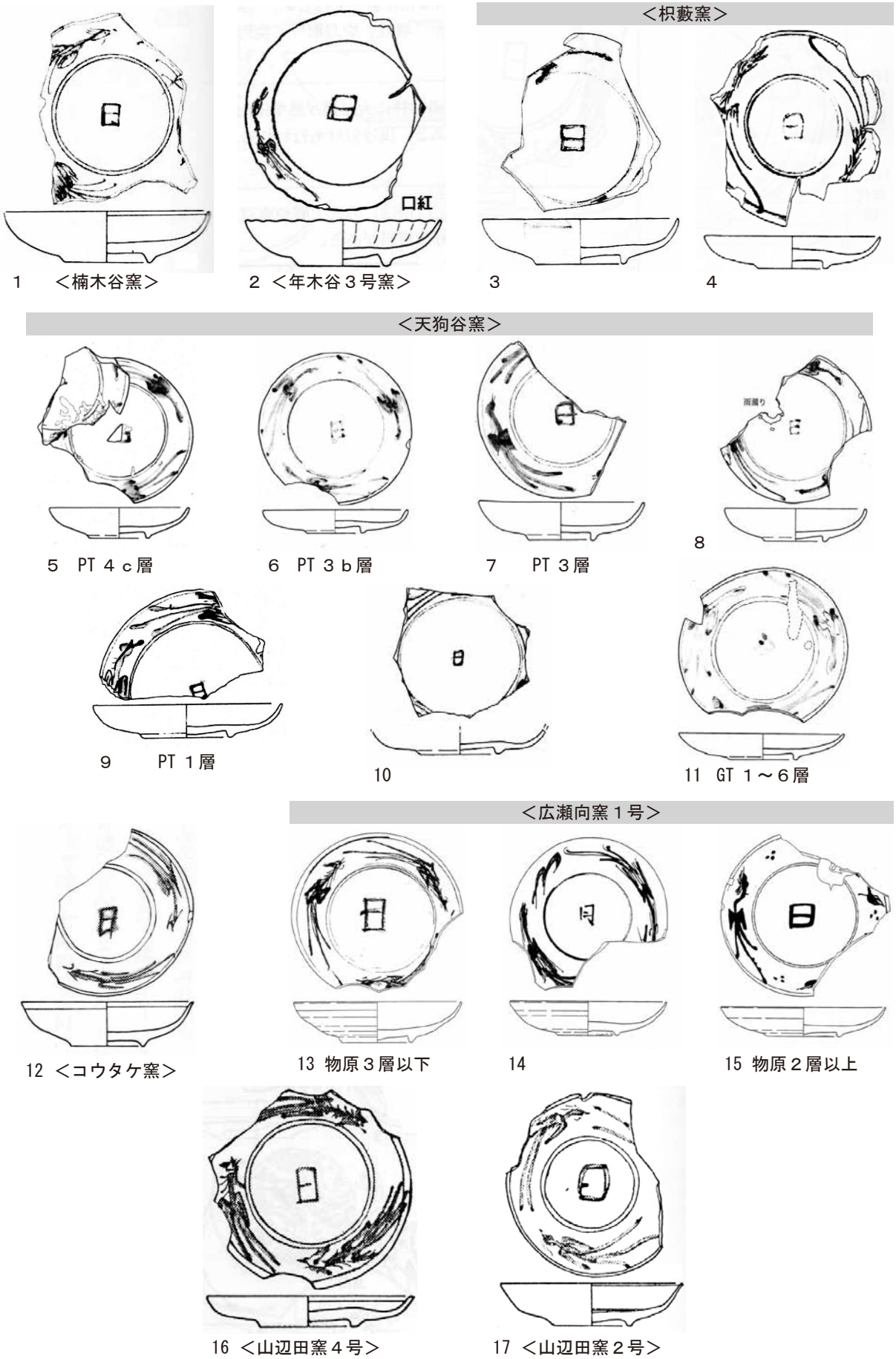

＜枳藪窯＞
口紅
1　＜楠木谷窯＞
2 ＜年木谷３号窯＞
3
4
＜天狗谷窯＞
雨漏り
5　PT ４ｃ層
6　PT ３ｂ層
7　PT ３層
8
9　PT １層
10
11　GT １～６層
＜広瀬向窯１号＞
12 ＜コウタケ窯＞
13 物原３層以下
14
15 物原２層以上
16 ＜山辺田窯４号＞
17 ＜山辺田窯２号＞

図２　染付日字鳳凰文皿

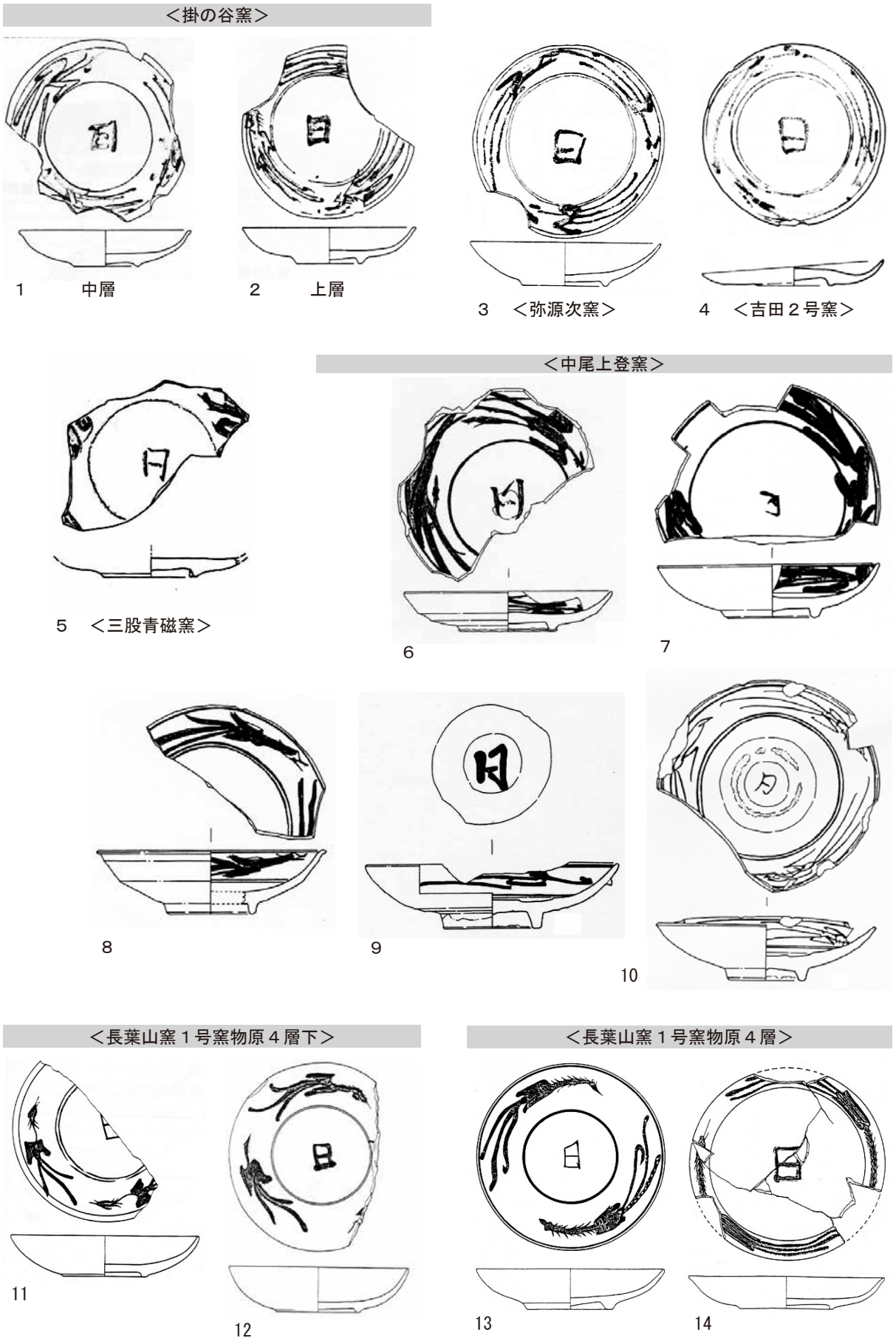
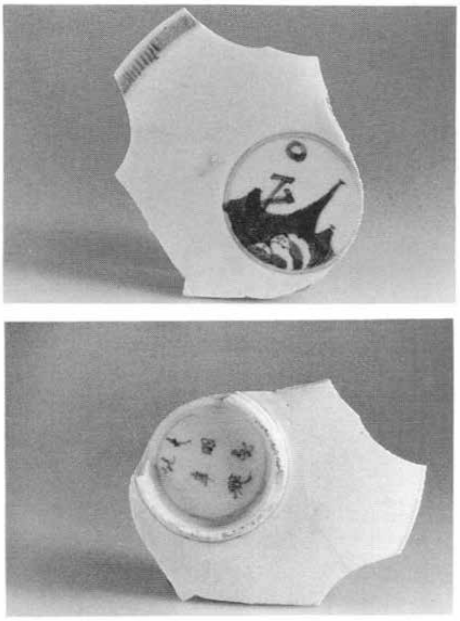

＜掛の谷窯＞
1　中層
2　上層
3　＜弥源次窯＞
4　＜吉田２号窯＞
＜中尾上登窯＞
5　＜三股青磁窯＞
6
7
8
9
10
＜長葉山窯１号窯物原４層下＞
11
12
＜長葉山窯１号窯物原４層＞
13
14

図３　染付日字鳳凰文皿

1

2

図４　染付「雨香斎」銘皿＜猿川窯＞



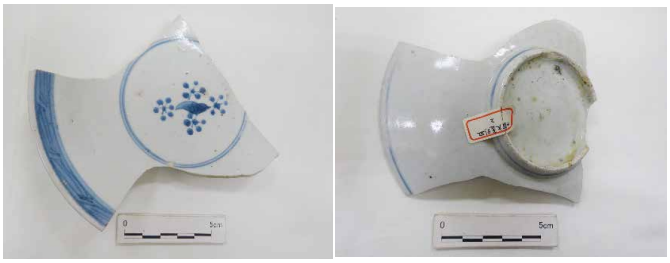
1　　＜猿川窯＞

図５　染付平碗形小皿

＜長吉谷窯＞

2

3



4

＜長吉谷窯＞

5

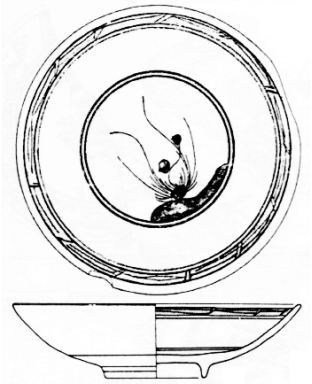
6

7

8

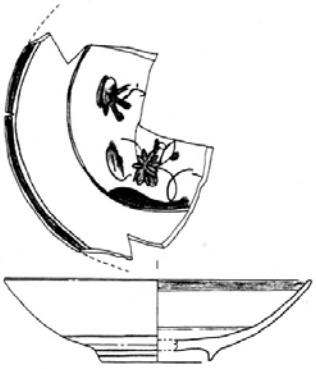
図５　染付平碗形小皿

＜不動山皿屋谷窯＞



1

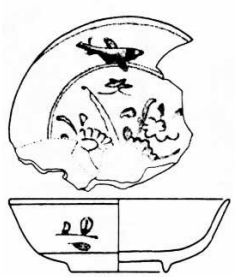
2



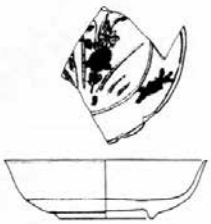
3　＜辺後の谷窯＞

図６　染付平碗形小皿

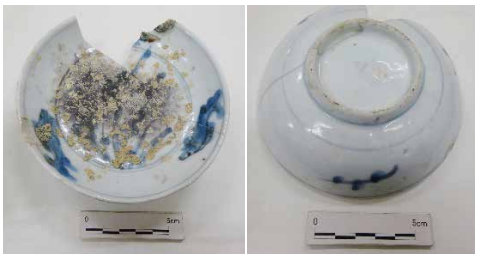
1　＜年木谷３号窯＞



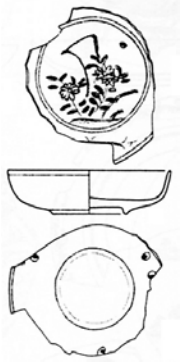
2　＜楠木谷２号窯＞



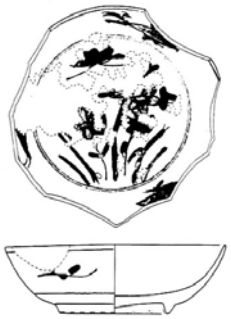
3　＜枳藪窯＞



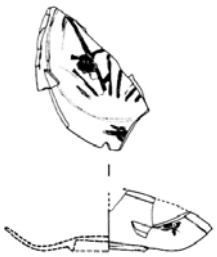
4　＜長吉谷窯＞



5　＜外尾山４号窯＞



6　＜広瀬向１号窯物原２層以上＞



7　＜南川原窯ノ辻窯＞

8　＜長吉谷窯＞

＜辺後の谷窯＞

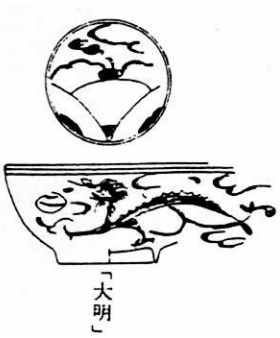
9

10

図７　染付内側面魚文小皿

染付見込荒磯文碗

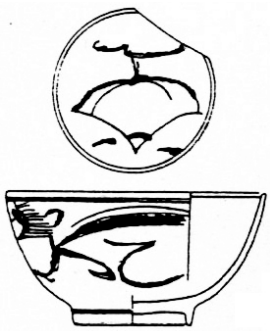
Ⅰ期



1　＜長吉谷窯＞

2　＜鹿児島・吹上浜＞

Ⅱ期



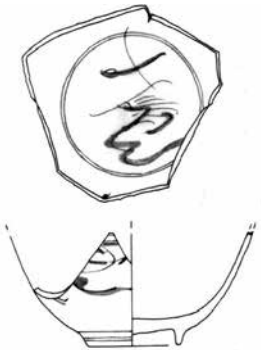
3　＜樋口窯＞

染付見込龍頭文碗

Ⅰ期

4　＜長吉谷窯＞

Ⅱ期



5　＜長崎・三川内東窯＞

図８　染付見込み荒磯文碗・龍頭文碗

1　＜長吉谷窯＞

2　＜柿右衛門窯＞

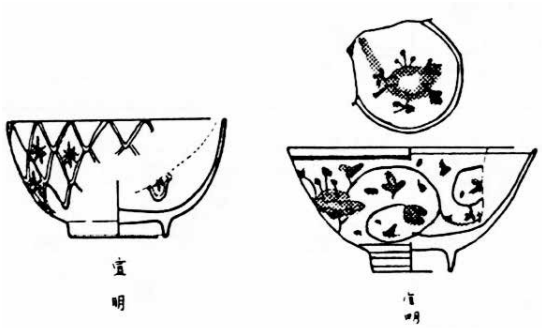
3　＜不動山皿山窯＞

4　＜辺後の谷窯＞

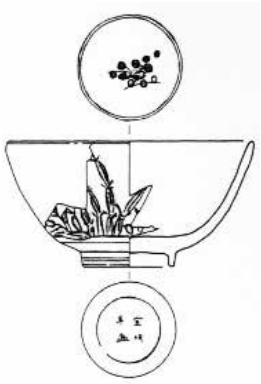
図９　染付寿字鳳凰文皿

＜長吉谷窯＞

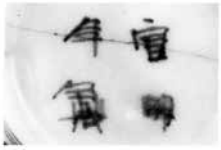
1



2　3



4　＜辺後の谷窯＞



5　＜長吉谷窯＞

図 10　染付「宣明」銘碗

佐賀県で出土したＶＯＣ（オランダ東インド会社）銘磁器の胎土組成分析による産地推定

田端正明・德永貞紹

要旨

江戸時代に肥前磁器の海外輸出を担ったオランダ東インド会社（ＶＯＣ）は、商品として輸出するものの他、各地のオランダ商館などで使用するため社用のＶＯＣ銘を入れた染付磁器の皿を注文したことがある。佐賀県内では生産地である有田でＶＯＣ銘磁器皿が出土している他、磁器生産やＶＯＣとは直接の関係がない消費地遺跡においても出土例がある。しかし、これらがどこで生産されたかは不明である。本研究では、シンクロトロン蛍光Ｘ線分析法により出土磁器の胎土組成分析を行い、分析結果を陶土製作における水簸工程の元素移動に基づいて元素分布を解析した。その結果、ＶＯＣ銘のある磁器は全て有田で生産されたことが明らかになった。上福２号窯跡（嬉野市塩田町）で出土したＶＯＣ銘磁器皿と類似の文様を有するＶＯＣ銘をもたない芙蓉手皿は有田で製作された磁器とは異なった胎土組成であり、上福２号窯ではＶＯＣ銘磁器は製作していなかったと推定された。

１．はじめに

長崎出島の商館を通じて 17 世後半から 18 世紀前半に大量の肥前磁器を海外へ輸出していたオランダ東インド会社（ＶＯＣ）は、アジアや西欧の市場向けに商品として輸出するものの他、17 世紀末以降、皿の中央に社名である「連合東インド会社」の頭文字ＶＯＣを組み合わせたマーク（ＶＯＣ銘）を入れた皿を注文した（大橋 1995）。このＶＯＣ銘磁器皿は、各地のオランダ東インド会社の商館や会社内で使用するためのもので、長崎の出島オランダ商館跡の発掘調査で多数の出土例がある。佐賀県内では肥前磁器の中核産地である有田の窯跡や窯業関連遺跡でＶＯＣ銘皿が出土しており、オランダ東インド会社からの注文により有田で製作されたと考えられている。しかし、磁器生産やオランダ東インド会社とは直接の関係がない消費地遺跡でもＶＯＣ銘皿の出土例があり、佐賀市の西中野遺跡、西渕遺跡、三重津海軍所跡で４例、嬉野市の笹谷遺跡で１例が発掘されている[1]。このうち嬉野市塩田町の笹谷遺跡出土のＶＯＣ銘磁器は、近くに位置する上福２号窯跡でＶＯＣ銘はないものの文様が類似する芙蓉手皿が出土したことから有田ではなく同窯で製作された可能性が示唆され（峯﨑 2004）、佐賀市の遺跡で出土したＶＯＣ銘磁器も正確な産地は確定していない。本研究では、ＶＯＣ銘磁器の産地を推定するために磁器の胎土組成をシンクロトロン光施設での蛍光Ｘ線分析法で決定した。その胎土組

成を今まで著者らが提案してきた、磁器の素地となる陶土製作に欠かせない水簸工程における陶石中の元素移動の違い（可溶性元素と難溶性元素）に基づいて解析した。

２．分析試料の概要

分析試料（表１）は佐賀県で出土した肥前磁器で、ＶＯＣ銘皿と関連資料および比較資料である。

No. １～５は有田の窯跡と窯業関連遺跡で出土したＶＯＣ銘皿。１は見込み中央と高台内中央にＶＯＣ銘を入れ、瑞果文を主文様とするタイプ。４は芙蓉手で見込み中央にＶＯＣ銘を入れ、鳳凰・椿・柘榴を主文様とするタイプで、５も同類と思われる。３も芙蓉手で見込み中央にＶＯＣ銘を入れ、主文様は牡丹文で何本もの線で茎や草文を表すタイプ。２は月桂樹文で囲んだＶＯＣ銘を見込みに入れる。

No. 1065 ～ 1067・1071・457 は佐賀市と嬉野市の消費地遺跡で出土したＶＯＣ銘皿。1065 ～ 1067 は佐賀市兵庫北地区の佐賀藩中下級武士の屋敷跡と思われる調査区の出土品で４と同タイプ。1071 も佐賀市の三重津海軍所跡で出土した同タイプの小片で、幕末期のものではなく周辺からの混入品。457 は嬉野市塩田町の笹谷遺跡で江戸期の掘立柱建物跡付近から出土したやはり同タイプのＶＯＣ銘皿。

以上のＶＯＣ銘皿は、１がＶＯＣ銘の丁寧な書き方から 17 世紀末（1680 ～ 1690 年代頃）、出土例が多い芙蓉手の４・５・1065 ～ 1067・1071・457 は 17 世紀末～ 18 世紀前半（1690 ～ 1730 年代）の幅に収まるとみられるが、３の芙蓉手はＶＯＣのやや粗い書き方などから 18 世紀前半頃の可能性が高く、２は 18 世紀第２・３四半期頃に降る。なお、笹谷遺跡出土の No. 463 は 17 世紀後半（1660 ～ 1680 年代頃）の芙蓉手皿で、ＶＯＣ銘を入れるタイプとは異なり、まるで生産地資料のように歪みがある。ＶＯＣ銘を入れた肥前磁器は海外輸出時代の初期には作られておらず（大橋 1995）、ＶＯＣ銘皿の多くは 17 世紀末（1690 年代）～ 18 世紀中頃で、輸出を再開した中国磁器と海外市場で競合した時期に生産された。

No. 458 ～ 460・462 は 18 世紀前半（1730 年代頃）に短期間操業した嬉野市塩田町の上福２号窯跡から出土した芙蓉手皿で、主文様は口縁部のみで確認できない 459 を除き鳳凰・椿・柘榴と考えられ、側面区画内文様と併せてＶＯＣ銘皿に多いタイプに類似する。見込み中央はＶＯＣ銘ではなく三巴状の枝葉文を描いており、ＶＯＣ銘皿そのものではないが、有田以外で 18 世紀前半に海外輸出向け芙蓉手皿生産が確認されているのは上福２号窯と長崎県長与皿山窯（ＶＯＣ銘磁器と違う文様）のみで（山本 2016）、笹谷遺跡出土のＶＯＣ銘皿が位置的に近い上福２号窯の製品である可能性が示された（峯﨑 2004）。No. 461 も上福２号窯出土だが、「大明成化年製」銘のある国内向け製品でＶＯＣ銘とは関連しない。約３km 北側の志田西山でも

同時代の国内向け磁器製品が生産されている[2]。

No.1068 と No.1069 は比較のため分析対象とした試料で、1068 は染付のみで色絵を施さない色絵素地の状態で、18 世紀前半（1700 ～ 1740 年代）の髭皿。色絵素地が商品として流通する例はあるが、西欧での用途に限定され日本で需要がない髭皿が国内消費地で出土するのはまったく異例である[3]。三重津海軍所跡として調査された地区の出土品だが隣接する町屋と思われる区域にあたり、海軍所時代のものではない。1069 は将軍御好み十二通りの献上品で一種のみ伝世例が確認されていない「松千鳥絵猪口」に該当する 19 世紀の鍋島焼であり（徳永 2017)、佐賀城本丸跡の出土品である。

３．実験

表１に示す出土磁器について、佐賀県立九州シンクロトロン光研究施設（佐賀県鳥栖市）の BL07 で蛍光Ｘ線分析を行った。磁器の欠けたところの測定箇所にＸ線が正確に当たるように、Ｘ線と同じ方向から来るレーザー光で試料面のスポットを決め、検出器位置から見て約 45°になるように試料位置を調整した（図１）。照射Ｘ線のサイズを 1mm (H) x 1mm (W) に絞った。Dead time は５秒以下になるように試料と検出器との距離を調整した。30 keV のＸ線を照射し、磁器の蛍光Ｘ線スペクトルを 10 分間測定した。入射Ｘ線強度は時間とともに減少するので、測定時間中の照射Ｘ線の総カウント数で個々の測定される蛍光Ｘ線強度を規格化した。蛍光Ｘ線スペクトルを OriginPro 2024 ソフトを用いてスペクトルを分割し、Gaussian 関数で個々の元素のスペクトル強度および面積を求めた(Tabata, Yagi, Nishimoto, Ghaffar 2021)。また、ルビジウムの RbKβ線とイットリウムの YKα線、およびストロンチウムの SrKβ線とジルコニウムの ZrKα線のスペクトルの重なり割合は複数の標準鉱物資料(産業技術総合研究所、地球化学物質データベース）を用いて求め、試料中の YKα と ZrKα の値を求めた（Imai, Terashima, Itho, Ando 1955)。個々の測定における試料表面と検出器との距離の違い、試料の設置角度の違い、および試料表面の凹凸によるＸ線散乱による蛍光Ｘ線強度の違いを補正するために、測定時の大気中のアルゴン (Ar) の蛍光Ｘ線強度を基準にして各元素の蛍光強度を比較した。

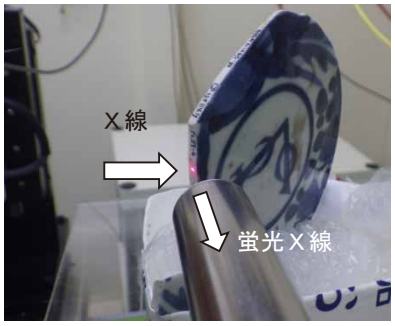


図１　測定図（試料４）
Ｘ線が磁器破片部の微小域に照射され、蛍光Ｘ線が検出器でスペクトルに変換される。

４．結果と考察

（１）蛍光Ｘ線スペクトル

30 keV のＸ線で励起した磁器の蛍光スペクトルを図２に示す。Ar から Sn（錫）までの 23

種の元素（Ar、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Co（コバルト）、Ni（ニッケル）、Cu（銅）、Zn（亜鉛）、Ga（ガリウム）、As（ヒ素）、Pb（鉛）、Th（トリウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y、Zr、Nb（ニオブ）、Mo（モリブデン）、Pd（パラジウム）、Ag（銀）、Sn（錫））を検出した。しかし、後述するように、高エネルギー側に吸収を持つ元素がより高感度に観測されるので、胎土中の微量元素、Pb、Th、Rb、Sr、Y、Zr、Nb の組成割合を中心に磁器の産地推定の解析を行った。しかも、これらは微量元素であり胎土組成の違いに鋭敏であるので、シンクロトロン光を用いる蛍光Ｘ線分析法の利点でもある。

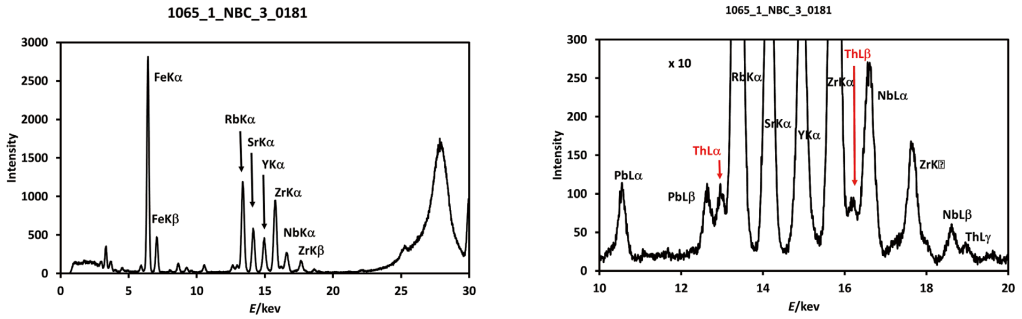


図２　ＶＯＣ銘磁器（試料 1065）の蛍光Ｘ線スペクトル (A)
B は 10 ～ 20keV での 10 倍拡大図、Pb, Th, Rb のスペクトルの重なりは Gaussian 法で分割した。

（２）ＶＯＣ銘磁器の産地推定

①　元素組成比

先に報告したように磁器の胎土組成は陶石の水簸工程で決まる（Tabata, Yagi, Nishimoto, Ghaffar 2021, 田端・上田 2017, 田端・中野・中野 2017）。中でも難溶性元素は水簸過程で細粉された陶石と一緒に水中を移動し、最後の水槽で泥漿に残る。その結果、磁器の胎土中の難溶性元素の蛍光強度比は磁器の生産地を如実に反映する（図 3A）。したがって、既報のように、ＶＯＣ銘磁器の胎土組成について Rb/Nb vs. Zr/Nb のプロットを行った（図 3B）。図には、佐賀城本丸跡で出土した鍋島焼猪口および三重津海軍所跡隣接地で出土した髭皿も比較のために含まれている。全てデータが同じグループに集まった。Zr/Nb の値を図３でＡとＢを比較す

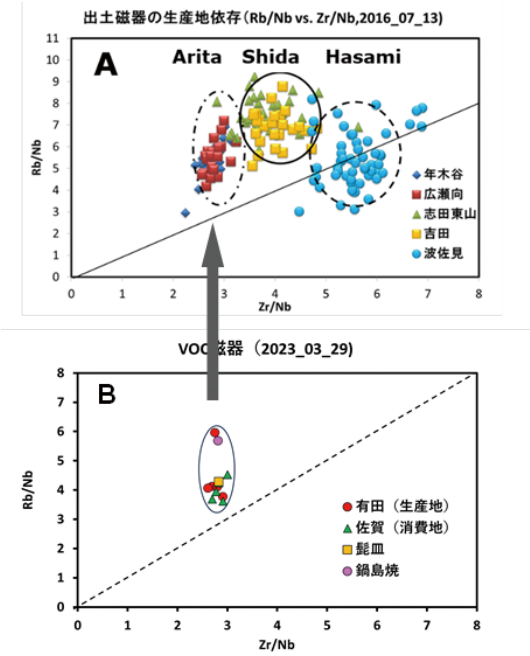


図３　有田、志田、波佐見の磁器の胎土組成 (A) とＶＯＣ銘磁器及び関連・比較磁器 (B) との胎土組成比較

ると、有田の生産地遺跡で出土したＶＯＣ銘磁器及び佐賀の消費地遺跡で出土したＶＯＣ銘磁器は有田で製作されたことが分かる。ＶＯＣ銘磁器ではないが佐賀で出土した西欧での用途に限定される髭皿（文末図参照）も有田で製作されていた。

ＶＯＣ銘磁器の組成を今までの磁器の胎土組成と比較するために、Fe/Rb vs. Zr/Rb および log(Rb/Sr) vs. log(Zr/Sr) をプロットした（図省略）。ほとんどの磁器について鉄の含有量は少なかった。また、佐賀城跡で出土した磁器では、Rb ＞ Sr であったが（Tabata, Yagi, Nishimoto, Ghaffar 2021, 田端・上田 2017, 田端・中野・中野 2017）、ＶＯＣ銘磁器の半数は Sr ＞ Rb であった。磁器製作原料と考えられる泉山陶石の組成は Rb ＞ Sr であるので、ＶＯＣ銘磁器製作においては鉄を除去するために水簸が繰りかえし行われ、Rb の濃度が減少したと考えられる。

②　含有元素の相関関係

難溶性元素は磁器の製作工程で懸濁した泥漿と一緒に水中を移動するという考えから、水への溶解度が小さい、すなわちイオン半径が小さく、電荷が大きい Zr（0.86 Å;4+）と Nb（0.78 Å；5+）に着目して磁器の産地を推定した。本研究では、他の元素間の関係を知るために、検出した 19 種の胎土成分元素について Ar に対する蛍光強度比を求め、元素間の相関関係を散布図行列から調べた。次の元素間に相関関係があることが明らかになった。Nb-Zr、Nb-Y、Nb-

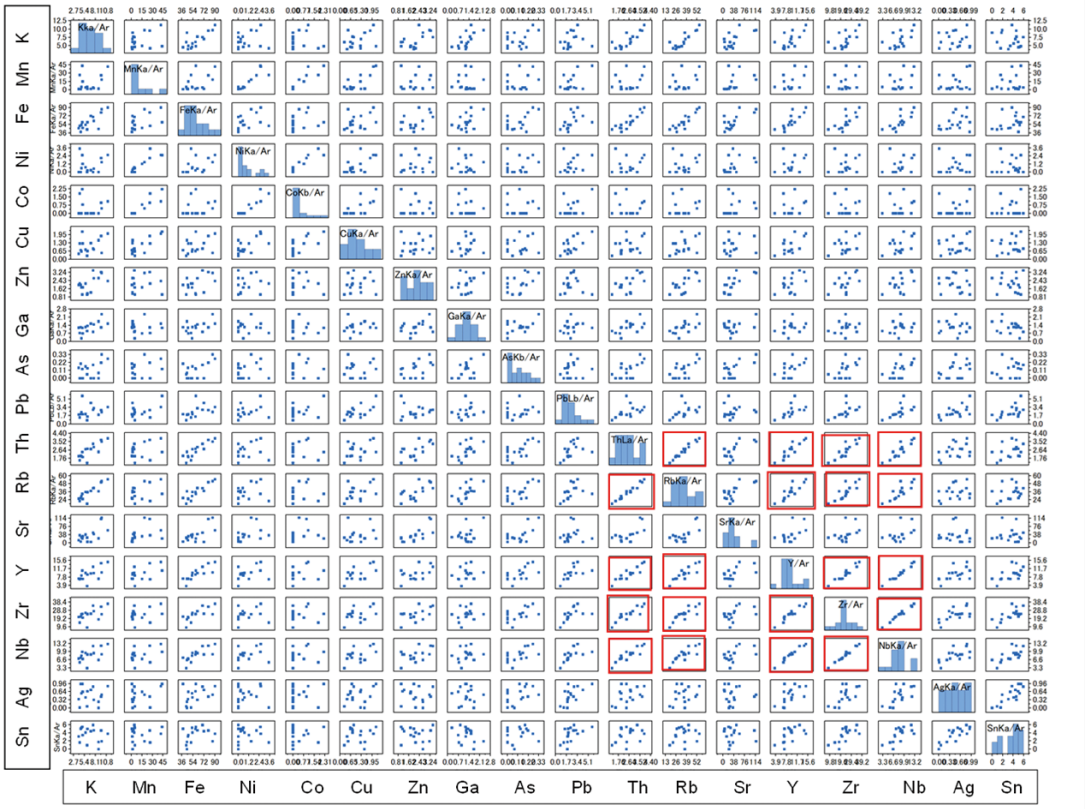


図４　ＶＯＣ銘磁器および関連・比較磁器の胎土組成の相関関係

Th、Zr-Y、Zr-Rb、Zr-Th、Y-Th、Rb-Th、Rb-K。相関がみられなかった元素はMn、Fe、Ni、Co、Co、Cu、Zn、Ga、As、Tl、Pb、Ag、Snであった（図４）。予想されるように、難溶性元素間に相関関係があった。難溶性元素以外としてRb-Kはアルカリ元素として類似性は考えられるが、Th-Rbの直線相関関係は興味ある結果である。

ThとRbのイオン半径と電荷は著しく異なる。Th は0.94 Å（配位数６）と4+であり、Rbは1.52 Å（配位数６）と1+である（R. D. Shannon 1976）。ThとRbは天然の放射性元素であり、同位体の半減期はともに数百億年以上である。^{232}Th（天然存在元素）は140億年、^{87}Rb（天然存在比27.8%）は475億年、^{85}Rb（天然存在比72.2%）は安定である。従って、マグマが冷えてできた火成岩のThとRbの組成比は噴火時のマグマの組成を反映すると考えられる。例えば、地球科学標準岩石の元素分析値を15種の火成岩（JA-1、JA-1a、JA-2、JA-3、JB-1、JB-1a、JB-1b、JB-2、JB-3、JG-1、JG-1a、JG-2、JG-3、JGb-2b、JH-1、JP-1、JR-1、JR-2）（N. Imai. S. Terashima, S. Itho, A. Ando 1955）についてThの濃度をRbの濃度でプロットすると良好な直線関係を確認できた（図５）。

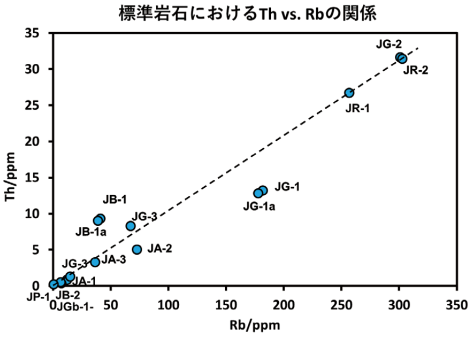


図５　標準岩石におけるRbとThとの相関関係

③上福２号窯跡から出土した磁器

火成岩中のThとRbの濃度の間に直線的相関関係がみられたので、噴火した火成岩が地上で熱水変成した流紋岩（陶石）についても同様な関係あるだろうと考えた。従って、ＶＯＣ銘磁器および関連磁器についてRbとThの蛍光強度比をプロットした。図６は測定した磁器の中のRbとThの蛍光Ｘ線強度のArを基準にした強度比のプロット（Rb/Ar vs. Th/Ar）およびRb/ThのZr/Nbに対するプロットである。図には有田、佐賀、笹谷遺跡（嬉野市）で出土した磁器の他、ＶＯＣ銘磁器を製作した可能性が指摘されている上福２号窯跡（嬉野市塩田町）から

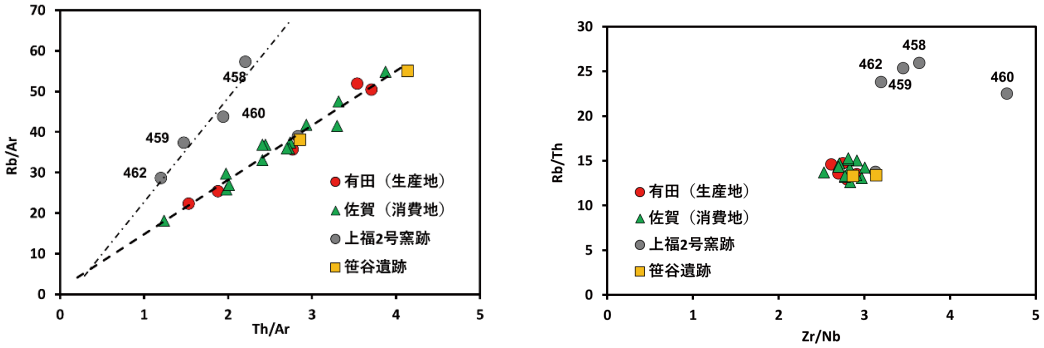


図６　ＶＯＣ銘磁器及び関連・比較磁器のRb/Ar vs. Th/Ar (A) およびRb/Th vs. Zr/Nb (B) の関係

出土した磁器についてもプロットしてある。プロットは二つの直線群に分かれた。生産地遺跡である有田の窯跡等と消費地である佐賀市の遺跡で出土した磁器は同じ直線上に集まった。すなわち、有田で製作された磁器の胎土組成と同じであった。しかし、上福２号窯跡から出土した磁器５点（試料番号458、459、460、461、462）のうち４点（試料番号、458、459、460、462）は別の直線上に集まった。すなわち、有田で製作された磁器の組成とは異なっていた。一方、試料461は有田で製作されたＶＯＣ銘磁器と同じ直線関係にあった。上福２号窯跡で出土した４点の芙蓉手の磁器皿（試料番号、458、459、460、462）はＶＯＣ銘磁器に類似する文様であるが、試料番号458、460、462には皿の見込みにＶＯＣ銘がない。また、試料番号459は中央部が欠けているためにＶＯＣ銘の有無についての判断は不可能である。残り１点（試料番号461）の皿は有田で製作されたと磁器と同じ胎土組成であるが、裏面に「大明成化年製」と判断される銘が書かれており、国内向けの製品と考えられる。一方、笹谷遺跡で出土した二つの磁器、ＶＯＣ銘磁器（試料番号457）と別タイプの芙蓉手磁器皿（試料番号463）は有田で製作された磁器と同じ胎土組成であり、遺跡近くの上福２号窯で製作されてものとは異なっている。すなわち、笹谷遺跡で出土したＶＯＣ銘の磁器は塩田川の反対側に所在する上福２号窯で製作されたものではないと推定される。

以上のように、ＶＯＣ銘を有する磁器は、生産地である有田で出土したものだけでなく、消費地遺跡（佐賀市、嬉野市）の出土品も含めて、全て有田で製作されたことが明らかになった。一方、上福２号窯跡から出土した芙蓉手皿の胎土組成は有田で製作されたＶＯＣ銘磁器とは異なっており、同じく嬉野市塩田町に位置する志田地区の磁器の胎土組成に類似している。

ＶＯＣ銘磁器の胎土組成と比較するために測定した、三重津海軍所跡に隣接する早津江津の町屋と考えられている地区で出土した髭皿および佐賀城本丸跡で出土した鍋島焼はいずれも有田で製作された磁器の胎土組成と同じであった。

５．まとめ

（１）胎土組成の元素のArに対する蛍光強度の散布分布図から、水に溶けにくい微量元素（イオン半径が小さく電荷が大きい元素）Nb、Zr、Y、Thの間に良好な相関関係があった。また、RbもTh特にThと相関関係があった。他の微量元素、Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Zn、Ga、Tl、As、Pb、Srの間には相関関係がみられなかった。

（２）難溶性元素の相関関係より出土磁器の産地を推定した。有田の生産地遺跡、佐賀と嬉野の消費地遺跡で出土したＶＯＣ銘磁器は全て有田で製作された。上福２号窯(嬉野市塩田町)で出土したＶＯＣ銘皿と類似の文様を有する芙蓉手皿の胎土組成は有田で製作された磁器とは異なった胎土組成であり、上福２号窯ではＶＯＣ銘磁器は製作されていなかったと推定される。

（３）水簸工程における難溶性元素の移動に基づく出土磁器の産地推定法は、19 世紀半ばの三重津海軍所跡から出土した磁器の産地推定法として見出したが、100 年以上遡った 17 世紀末～ 18 世紀前半のＶＯＣ銘磁器の産地推定法にも適用できた。

謝辞

本研究で用いた磁器は、佐賀市文化財課、有田町歴史民俗資料館、嬉野市教育委員会、佐賀県立九州陶磁文化館から借りた。試料および出土遺跡に関して御教示と御協力をいただいた村上伸之、峯﨑幸清、大橋康二の各氏に厚くお礼申し上げます。実験は、科学研究費（19K01126, 24K04367）、佐賀県立九州シンクロトロン光研究センター（2207069P, 220114P）で実施した。ここに謝意を表します。

注

1　今回は分析対象としていないが小城市の土生遺跡でも１例出土している。
2　蓮池藩領の志田西山では 18 世紀前半から磁器が生産されている（佐賀県立九州陶磁文化館 1991）。
3　佐賀市兵庫北地区のウー屋敷遺跡で出土した色絵素地も器形から髭皿かとされているが（佐賀市教育委員会 2009；p. 122 Fig. 77-3）、髭皿の最大の特徴である口縁部の抉り部を欠くため断定できない。

参考文献

大橋康二 1995「海外輸出された肥前磁器の特質について－芙蓉手皿を中心として－」『王朝の考古学 大川清博士古稀記念論文集』pp. 513 ～ 535 雄山閣出版
川副町教育委員会 2004『佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）』川副町文化財調査報告書第１集
佐賀県立九州陶磁文化館 1991『塩田町志田西山１号窯跡』肥前地区古窯跡調査報告書第８集
佐賀市教育委員会 2009『ウー屋敷遺跡Ⅱ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 32 集
佐賀市教育委員会 2015『幕末佐賀藩 三重津海軍所跡Ⅳ』佐賀市重要産業遺跡関係調査報告書第７集
塩田町教育委員会 1992『吉浦神社周辺遺跡調査概報』塩田町文化財調査報告書第８集
塩田町教育委員会 1998『上福２号窯跡調査報告書』塩田町文化財調査報告書第 17 集
塩田町教育委員会 2003『町内窯跡発掘調査報告書』塩田町文化財調査報告書第 27 集
田端正明・上田晋也 2017「シンクロトロン蛍光Ｘ線分析法による世界文化遺産三重津海軍所跡（佐賀市）出土磁器の胎土分析―第２報レアメタル分析による生産地推定」『分析化学』66 pp. 839 ～ 846
田端正明・中野充・中野雄二 2017「幕末～明治初期の肥前磁器の胎土分析による生産地識別（中間報告）－佐賀市三重津海軍所跡出土磁器との比較－」『第７回 近世陶磁研究会 資料』pp. 68 ～ 81 近世陶磁研究会
徳永貞紹 2017「佐賀藩内における鍋島焼の使用」『中近世陶磁器の考古学』第７巻 pp. 239 ～ 256 雄山閣出版
峯﨑幸清 2004「志田焼概説」『後期 伊万里 志田焼―大皿編―』pp. 62 ～ 67 有限会社 JP 美術クラブ
山本文子 2016『肥前芙蓉手皿の研究』（青山学院大学博士論文）
M. Tabata, N. Yagi, J. Nishimoto and Abdul Ghaffar 2021「Estimation of places of production of porcelains of unknown origins excavated at the Mietsu Naval Facility site based on

differences in the solubility of trace metals during the elutriation process」『J. Arch. Sci. Reports』36, 102823
N. Imai, S. Terashima, S. Itho, A. Ando 1955,「Geostandards Newsletter」19　pp.135-213
R. D. Shannon 1976「Revised Effective Ionic Radii and Systematic Studies of Interatomie Distances in Halides and Chaleogenides」『Acta Cryst. 』A32　pp.751-767

表１　ＶＯＣ銘磁器及び関連・比較磁器

試料番号	実測番号	試料名	出土場所	所蔵
1		ＶＯＣ銘瑞果文皿	有田町　大樽窯跡（採集）	佐賀県立九州陶磁文化館
2		ＶＯＣ銘月桂樹文皿	有田町　谷窯跡	有田町教育委員会
3		ＶＯＣ銘芙蓉手皿	有田町　猿川窯跡	有田町教育委員会
4		ＶＯＣ銘芙蓉手皿	有田町　赤絵町遺跡	有田町教育委員会
5		ＶＯＣ銘芙蓉手皿	有田町　猿川窯跡（採集）	有田町教育委員会
1065	NBC_3_0181	ＶＯＣ銘芙蓉手皿	佐賀市　西渕遺跡３区	佐賀市
1066	NNN_29_0211	ＶＯＣ銘芙蓉手皿	佐賀市　西中野遺跡 29 区	佐賀市
1067	NNN_49_0354	ＶＯＣ銘芙蓉手皿	佐賀市　西中野遺跡 49 区	佐賀市
1068	SHK_7_0043	花盆文髭皿 色絵素地	佐賀市　三重津海軍所跡７区	佐賀市
1069	SGJ_ 確 _0018	鍋島焼 松千鳥文猪口	佐賀市　佐賀城本丸跡	佐賀市
1071	SHK_22_0059	ＶＯＣ銘芙蓉手皿	佐賀市　三重津海軍所跡 22 区	佐賀市
457	SHK_20_0618	ＶＯＣ銘芙蓉手皿	嬉野市　笹谷遺跡	嬉野市教育委員会
458	SHK_20_0619	芙蓉手皿	嬉野市　上福２号窯跡	嬉野市教育委員会
459	SHK_20_0620	芙蓉手皿	嬉野市　上福２号窯跡	嬉野市教育委員会
460	SHK_20_0621	芙蓉手皿	嬉野市　上福２号窯跡	嬉野市教育委員会
461	SHK_20_0622	柘榴文皿	嬉野市　上福２号窯跡	嬉野市教育委員会
462	SHK_20_0623	芙蓉手皿	嬉野市　上福２号窯跡	嬉野市教育委員会
463	SHK_20_0624	芙蓉手皿	嬉野市　笹谷遺跡	嬉野市教育委員会

図版　分析したＶＯＣ銘磁器及び関連・比較磁器

１　大樽窯跡（内面・外面）

２　谷窯跡（内面・外面）

３　猿川窯跡

４　赤絵町遺跡

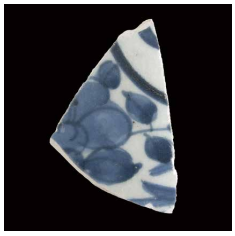
５　猿川窯跡

図７　生産地（有田）で出土したＶＯＣ銘磁器（２～５：有田町教育委員会所蔵）

1065　西渕遺跡

1066　西中野遺跡

1067　西中野遺跡



1071　三重津海軍所跡

図８　消費地（佐賀）で出土したＶＯＣ銘磁器（佐賀市所蔵）

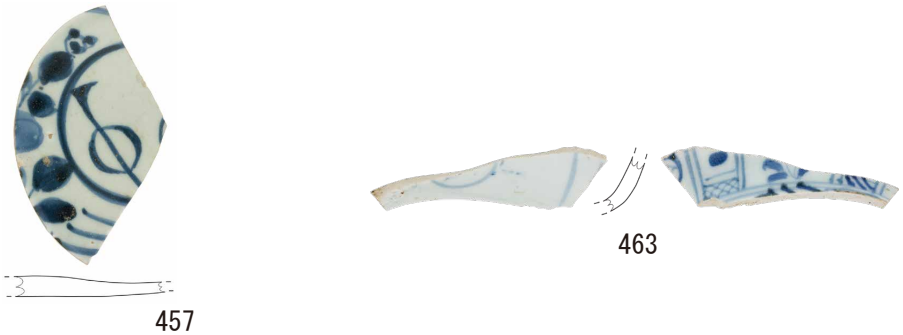


図９　笹谷遺跡（嬉野市塩田町）で出土したＶＯＣ銘磁器および関連磁器（嬉野市教育委員会所蔵）

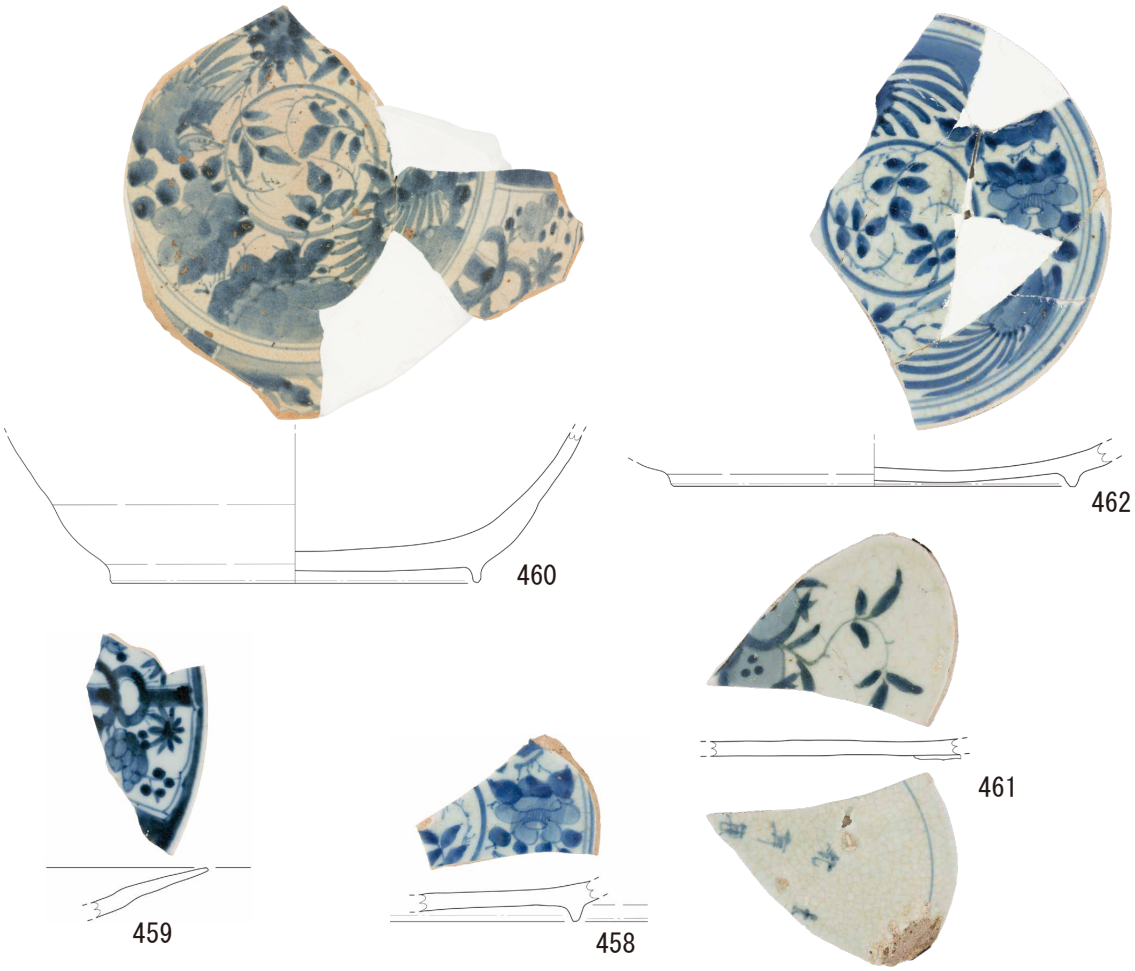
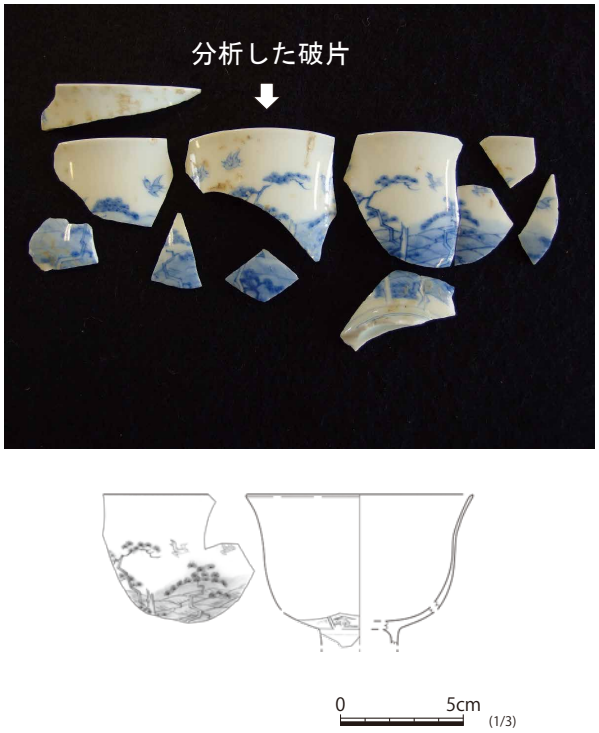


図 10　上福２号窯跡（嬉野市塩田町）で出土した関連磁器（嬉野市教育委員会所蔵）

（図９・10：佐賀市教育委員会 2015）

0　5cm (1/3)

1068　三重津海軍所跡　髭皿
（川副町教育委員会 2004）



1069　佐賀城本丸跡　鍋島焼 猪口
（実測図：佐賀市文化財課）

図 11　比較試料（佐賀市）　髭皿と鍋島焼 猪口（佐賀市所蔵）

日本出土のＶＯＣマーク入り肥前磁器皿の種類と分布

徳永貞紹

１．はじめに

長崎・出島に商館を置き、肥前磁器の海外輸出に大きな役割を果たした連合ネーデルラント東インド会社（Vereenigde Nederlandsche Oost-Indische Compagnie；以下、「オランダ東インド会社」）は、連合＝Ｖereenigde 東インド＝Ｏost-Indische 会社＝Ｃompagnie の頭文字ＶＯＣを組み合わせたモノグラム（monogram；組合せ文字）を同社の倉庫や船、大砲あるいは貨幣そして磁器などに入れた。

ＶＯＣマーク（以下、小稿では「ＶＯＣ銘」と表記）のある染付磁器はバタヴィア（現在のインドネシア　ジャカルタ）を拠点に東は長崎から西はケープタウンまで各地におかれた商館や植民都市などで用いるため肥前に注文したもので、本質的には社用であって商品ではないと考えられる。日本においてはオランダ東インド会社の商館が置かれた長崎・出島から多く出土することは当然であり、有田の窯跡や窯業関連遺跡の出土例は主に有田で生産されたことを示す。一方、近年の発掘調査で出島や生産地以外でも出土例が散見されるようになったが、それらが本来の使用場所以外にどのような背景でもたらされたのかは明らかでない。小稿では日本国内出土のＶＯＣ銘肥前磁器皿の種類と分布状況を整理し、生産地と出島以外での分布の背景について予察する[1]。

２．日本出土のＶＯＣ銘皿の種類

ＶＯＣ銘を入れる肥前磁器の皿は染付である[2]。出土例が伝世品にある種類を網羅しているわけではなく、逆に伝世品が確認されていない出土例もある[3]。発掘調査による出土品と遺跡採集品のうち何らかの形で報告されているＶＯＣ銘皿をＡ～Ｈ群の８種に分類して説明する。

Ａ群（図１−１・２）：内面全体と外側面に瑞果（柘榴・仏手柑・桃）文を施した皿の見込み中央と高台内中央の表裏両面、もしくは高台内中央のみに円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れ、高台の内側に圏線を１条巡らせる。中国・清の康熙年間（1662 ～ 1722）に景徳鎮で生産された瑞果文皿を原型とするが、ＶＯＣ銘を入れるのは肥前のみである。ＶＯＣの書き方が丁寧なもの（１）と細いもの（２）がある。器形は、他の群が折縁皿なのに対し、Ａ群は口縁が内彎ぎみに立ち上がる丸皿である。

Ｂ群（図１−３・４）：芙蓉手で花盆文を主文様とする皿の高台内中央に円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れる。ＶＯＣの書き方はＡ群の細いタイプ（２）に近いが、３はＯとＣの位置が左右逆で、

円形枠には接していない。高台の内側に圏線を巡らせる点はＡ群と共通する。

Ｃ群（図１−５〜７）:内面を口縁から側縁部の外区文様帯と見込み周辺の内区文様帯に区切り、見込み中央に円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れる。内区は外区と区切る圏線から内向きに描いた唐草文を三方に配する以外は余白とし、外区には輸出向け製品にみられるムカデのような独特な形状の唐草を用いた花唐草文を巡らせる（５・６）。内区の唐草文は外区の花文の位置に配される。外区の花唐草文がムカデ状唐草ではないタイプもある（７）。

Ｄ群（図２−８）：芙蓉手で内面を口縁から側縁部の外区と見込み周辺の内区に区切り、見込み中央に円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れる。外区はＥ群と同種の文様であり、内区はＣ群と同様に内向きに描いた唐草文を三方に配すが、唐草文の形状がＣ群とは異なる。

Ｅ群（図２−９〜14）：見込み中央に円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れ、内区に鳳凰・柘榴・椿を描く芙蓉手で、側面区画内には意匠化された太湖石を伴う竹梅文と牡丹文を交互に配す。主文様はＶＯＣ銘がおおよそ正位となるよう天地を決め、右に柘榴、左に椿を置いて、鳳凰は飛翔する１羽のみ描くタイプ（９〜12）と左上方に飛翔する１羽、右下方に太湖石かと思われる岩に乗るもう１羽を対置するタイプ（13・14）がある。

Ｆ群（図２-15〜17）：見込み中央に円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れる芙蓉手で、側面区画内の文様はＥ群と同種であるが、主文様がＥ群とは異なり牡丹と思われる花卉文と線状の草文を何本も描く。

Ｇ群（図３-18・19）：外区にムカデ状唐草の花唐草文を巡らせ、見込み中央に円形枠を伴う細いＶＯＣ銘を入れる。ＶＯＣは主文様を正位に置くと逆さに書かれており、ＶＯＣを囲む円形枠から樹幹を中央に左右から上方に枝を伸ばす梅樹が描かれる。Ｇ群の文様は同じ構図の花盆文（佐賀県立九州陶磁文化館 1990, No.39）が原型であり、中央の花盆を逆さＶＯＣに置き換えたものである。

Ｈ群（図３-20〜27）：円形枠を伴わず月桂樹文で囲んだＶＯＣ銘を見込みに配した紋章風の意匠。ＶＯＣの上方または下方にＮ字を入れるものと、Ｎ字に加えＧ（Ｃ）字を入れるもの(26・27）があり、いずれも口縁部に唐草が毛虫のように表現された花唐草文を巡らせる。他の群より器種やサイズが多様で、鉢や蓋などもあり、月桂樹文をあしらったＶＯＣ銘が主文様である点も他の群と異なる。Ｎ字はNederlandsche ＝ネーデルラント（の）を意味するとの説もあるが（Woodward 1974,p.85)、近年は長崎の頭文字を表すものとされ、出島の出土状況から同一文様の食器セットとして注文製作された可能性が高いと指摘されている（山口 2015)。

生産年代は、Ａ〜Ｇ群がおおよそ 17 世紀末〜 18 世紀前半、Ｈ群は相対的に後出であり 18 世紀前半〜中頃とみられる。ＶＯＣ銘を入れた肥前磁器はＶＯＣの表現に違いがあり、年代が

下るにしたがい書き方やバランスが崩れていく傾向が指摘されている（大橋 1999)。窯場ごとに多少の違いが生じることも考慮しなければならないが、ＶＯＣの表現や主文様などの精粗から見ると、Ａ群の書き方が丁寧なもの（１）は 17 世紀末（1680 ～ 1690 年代頃）に収まる可能性があり、Ｅ群は 17 世紀末～ 18 世紀初頭（1690 年代～ 1710 年代頃）を中心とし、Ｅ群でもＶＯＣ銘や文様が崩れたものは下限が 18 世紀前半（1730 年代頃）まで、Ｆ群は 18 世紀前半（1700 ～ 1740 年代頃）に下るものとしておく。

３．日本におけるＶＯＣ銘皿出土例の分布

日本におけるＶＯＣ銘皿の出土例は、管見の限り、出島和蘭商館跡（小稿では「出島オランダ商館跡）と表記する）で 129 例、生産地である有田で 12 例、出島以外の消費地遺跡で 13 例を数える[4]。

生産地では、有田の稗古場窯跡でＡ群１例とＥ群２例（井垣 1976, 挿図 11、永竹・林屋編 1978, p. 289 図版 348、有田町史編纂委 1988, 図版 271-３)、大樽窯跡でＡ群１例（１：井垣 1976, 挿図 13)、猿川窯跡でＥ群１例とＦ群２例（永竹 1959, 第 35 図、山本 2016)、泉山口屋番所遺跡でＥ群３例（野上 1993、山本 2016)、赤絵町遺跡でＥ群１例（有田町教委 1996, PL. 37-6)、谷窯跡でＨ群１例（有田町教委 1992, 第 14 図 128）が報告されている。今のところ有田内山に限られ、出土数は多くない。

出島オランダ商館跡では、Ａ群と判断される資料は確認していないが、これを除くＢ～Ｈ群が出土している（長崎市教委 1986・2000・2001・2002・2008・2010・2018・2019a・2019b、長崎県教委 2005b)。このうちＢ・Ｄ・Ｇ群は出島以外には生産地・消費地遺跡の出土品も伝世品も知られておらず、Ｆ群は出島以外の消費地遺跡では出土例がない。出島から出土したＶＯＣ銘皿の主体はＥ群とＨ群であり、伝世品ではＥ群が多い印象があるが、出島での出土数はＨ群が上回っている。

出島を除く長崎では、長崎奉行所（立山役所）跡および隣接する岩原目付屋敷遺跡でＥ群とＣ群が各１例（長崎県教委 2005a)、魚の町遺跡で分類不明の１例（長崎市教委 2023）が報告されている。

出島と長崎以外の消費地遺跡では、長崎県の出土例は確認しておらず、佐賀県では佐賀市の西中野遺跡（図４-28・29：佐賀市教委 2010a・2010b)、西渕遺跡（30：佐賀市教委 2010c)、三重津海軍所跡（31：佐賀市教委 2022)、嬉野市の笹谷遺跡（32：塩田町教委 1992)、小城市の土生遺跡（33：小城市教委 2022)、福岡県では久留米市の久留米城下町遺跡（34：久留米市教委 2001)、大野城市の雑餉隈遺跡（35：大野城市教委 2018）があるほか、熊本県玉名市の高瀬船着場跡付近採集例（36：蜷父 2004)、香川県丸亀市の丸亀城跡出土例（37：丸亀市教委

2018)がある。雑餉隈遺跡から出島以外で唯一のＨ群が出土している他はいずれもＥ群である。四国の丸亀城跡を除いて九州北部に集中しており、各遺跡での出土数は、西中野遺跡の２つの調査区で計２例が出土している以外は１例ずつと少ない。

４．分布の背景（予察）ーまとめにかえてー

消費地遺跡出土例では長崎・出島のオランダ商館跡が９割を占め、長崎でも市中にはほぼ出回っておらず、あくまでオランダ東インド会社内での使用が主目的であったことを物語る。

出島と長崎以外の肥前では支藩を含め佐賀藩領内に偏っている。佐賀城近郊で佐賀藩中下級武士の在郷屋敷が点在していた兵庫北地区で３例があり、該当する時代の屋敷の居住者は特定されていないが、同じ調査区から出土した鍋島焼と同様に通常は商品流通しない製品が持ち込まれた背景として､生産地に関わる役や私的な人間関係が入手機会の一つであったと考える(徳永 2017)。西中野遺跡出土の 28 は内面に焼成時の鉄分が大きく付着しており、29 にはハリが１つ残ったままである。傷物や余剰品で納品されなかったものが、長崎経由ではなく有田の窯焼、商人あるいは皿山代官所などとの関係性により佐賀にもたらされたものであろう。蓮池藩領にあたる笹谷遺跡では江戸時代の掘立柱建物が検出され、蓮池藩初代の鍋島直澄を祀る吉浦神社が近接して位置することから「神社あるいは藩の施設が考えられる」と報告されるが（塩田町教委 1992)、位置関係以外に関係史料などの根拠は示されておらず、遺跡の性格は不明である。笹谷遺跡例（32）はハリの一部がそのまま付着し、弧状に割れた一辺の縁には窯割れ時に生じるような器表面の凹みがわずかに見られ、やはり二級品として生産地からもたらされたものと推定する。

佐賀藩外での出土例に関しては、久留米城下町跡例は久留米藩が長崎に出張所を設けていたことから長崎から久留米藩へ流れる窓口があったか、生産地から粗悪品や余剰品を国内流通させたかとの２案（園井 2002)、高瀬船着場跡付近例は熊本藩などを通じた長崎との交易（蜚父 2004)、丸亀城跡例は丸亀藩と長崎貿易との関わりや藩主京極家による茶陶としての「阿蘭陀」などの入手過程との関連（東･佐藤 2014）などがＶＯＣ銘皿の搬入背景として示唆されている。久留米城下町例への第２案以外は長崎との関係性を搬入背景として想定するものだが、長崎においてもＶＯＣ銘皿は市中で決して一般的な存在ではなかったことを踏まえると、佐賀藩での事例とは別の経路かもしれないが久留米城下町例への第２案の方が可能性としては高い。高瀬船着場跡付近例はＶＯＣ銘に焼成時のフリモノが熔着した二級品であり、雑餉隈遺跡例は焼成時の釉薬の状態が良くないため納品されなかったものが何らかの偶発的理由で国内流通したものかと指摘されている（大野城市教委 2018)。

出島と長崎以外の消費地出土例は１例を除いてＥ群であるが、ＶＯＣ銘のＯ字やＣ字が楕円

形になる書き方や文様表現の崩れなどから、Ｅ群の中でも 18 世紀前半頃の新しい様相を示す。Ｅ群は出土品も伝世品も多いＶＯＣ銘皿を代表する一群であるが、この頃から出島オランダ商館ではＨ群への移行が始まり、納品されなかったＥ群の残余が遠くない消費地に紛れ込んだものかもしれない。

謝辞

起稿に際して御協力・御教示いただいた下記の機関・各位に深く感謝申し上げます。

有田町教育委員会　嬉野市教育委員会　小城市教育委員会　佐賀市文化財課

太田正和　大橋康二　村上伸之　山本文子　輪内 遼　　（敬称略　五十音順）

注

1　小稿は佐賀県内出土ＶＯＣ銘磁器皿の胎土組成分析による産地推定（田端・德永 2025, 本誌前掲）に関連し、陶磁史・考古学的視点から説明するもので、資料数がもっとも多い出島オランダ商館跡出土品について実見調査していないため予察とする。

2　例外として低火度焼成した素地に色絵を施した特殊品がある（注３）。中国磁器では２頭のライオンが王冠を掲げる紋章とＶＯＣ銘を入れ、1728 の年紀と“調和は小さきものを成長させる”というラテン語の成句が記された色絵の一群があり（Woodward 1974, カラー図版 A2、館蔵 柴田夫妻コレクション 8-176)、オランダ東インド会社のデュカトーン貨幣の意匠を元にした注文品とみられる。

3　出土例のないタイプの伝世品は、染付皿内側面にＶ、Ｏ、Ｃを１文字ずつ配した 18 世紀中頃～後半の例（佐賀県立九州陶磁文化館 2000, No. 50）や、低火度焼成の素地を本焼きせずに色絵を施した製品で高台内中央に円形枠を伴うＶＯＣ銘を入れた 18 世紀前半の例（同上 , No. 49）があり、後掲のＡ群と同じ丸皿の器形で唐花文を描き高台内中央にＶＯＣ銘を入れるタイプ（Woodward1974, p. 76）や、Ｅ群の主文様に類する構図で外区は瑞果（仏手柑・柘榴）と菊・牡丹を配するタイプ（同上 , pp. 74 ～ 75-108）なども紹介されている。

4　今回はＶＯＣ銘が一部だけでも遺存する皿を対象資料とした。なお、柿右衛門窯跡第１次調査の出土資料として紹介されたＶＯＣ銘皿は報告書では酒井田家裏庭の採集品とされ（有田町教委 1977, 第６図)、柳川城下町跡にあたる福岡県柳川市の上町遺跡で出土した見込みがＶＯＣ銘とされる染付皿（九州歴史資料館 2018, 第 60 図２）は未実見で評価を保留しており、今回の対象には含めていない。

引用・参考文献

有田町教育委員会 1977『柿右衛門窯跡 発掘調査概報』

有田町教育委員会 1990『赤絵町遺跡』

有田町教育委員会 1992『佐賀県有田町 谷窯跡の発掘調査』

有田町史編纂委員会 1988『有田町史 古窯編』有田町

井垣春雄 1976「谷窯古窯址とＶ．Ｏ．Ｃ．の皿」『陶説』第 282 号 pp. 13 ～ 21 日本陶磁協会

大野城市教育委員会 2018『雑餉隈遺跡～第２次調査～』大野城市文化財調査報告書第 169 集

大橋康二 1987「17 世紀後半の肥前磁器について－染付芙蓉手皿を中心として－」『オランダ東インド会社 出島商館長ワーヘナール』pp. 50 ～ 52 オランダ村博物館

大橋康二 1995「海外輸出された肥前磁器の特質について－芙蓉手皿を中心として－」『王朝の考古学 大

川清博士古稀記念論文集』pp. 513 ～ 535 雄山閣出版
大橋康二 1999「「伊万里」調査最前線（15） ＶＯＣ文字入りの磁器」『目の眼』第 277 号 pp. 90 ～ 93 里文出版
大橋康二 2003「「伊万里」調査最前線（36） 長崎・出島とオランダ」『目の眼』第 319 号 pp. 34 ～ 39 里文出版
小城市教育委員会 2022『小城市内遺跡 10』小城市文化財調査報告書第 44 集
九州歴史資料館 2018『上町遺跡 ２次調査』福岡県文化財調査報告書第 264 集
久留米市教育委員会 2001『久留米城下町遺跡 第 14 次調査』久留米市文化財調査報告書第 169 集
佐賀県立九州陶磁文化館 1990『海を渡った肥前のやきもの』
佐賀県立九州陶磁文化館 2000『古伊万里の道』
佐賀市教育委員会 2010a『西中野遺跡Ⅷ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 46 集
佐賀市教育委員会 2010b『西中野遺跡Ⅻ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 47 集
佐賀市教育委員会 2010c『西渕遺跡Ⅲ』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 52 集
佐賀市教育委員会 2015『幕末佐賀藩 三重津海軍所跡Ⅳ』佐賀市重要産業遺跡関係調査報告書第７集
佐賀市教育委員会 2022『幕末佐賀藩 三重津海軍所跡Ⅶ』佐賀市重要産業遺跡関係調査報告書第 12 集
塩田町教育委員会 1992『吉浦神社周辺遺跡調査概報』塩田町文化財調査報告書第８集
塩田町教育委員会 1998『上福２号窯跡調査報告書』塩田町文化財調査報告書第 17 集
園井正隆 2002「「ＶＯＣ銘入り染付芙蓉手鳳凰文皿」について」『福岡考古』第 20 号 pp. 51 ～ 58 福岡考古懇話会
蜷父雅史 2004「付論 近世における「高瀬」の側面と出土陶磁器－確認調査の結果から－」『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ』玉名市文化財調査報告第 13 集 pp. 143 ～ 157 玉名市教育委員会
徳永貞紹 2017「佐賀藩内における鍋島焼の使用」『中近世陶磁器の考古学』第７巻 pp. 239 ～ 265 雄山閣出版
長崎県教育委員会 2005a『長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 183 集
長崎県教育委員会 2005b『出島－一般国道 499 号電線共同溝整備工事に伴う緊急調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 184 集
長崎市教育委員会 1986『国指定史跡 出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』
長崎市教育委員会 2000『国指定史跡 出島和蘭商館跡 西側建造物復元事業に伴う発掘調査報告書』
長崎市教育委員会 2001『国指定史跡 出島和蘭商館跡 護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書』
長崎市教育委員会 2002『国指定史跡 出島和蘭商館跡 道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書』
長崎市教育委員会 2008『国指定史跡 出島和蘭商館跡 カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書』
長崎市教育委員会 2010『国指定史跡 出島和蘭商館跡 南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書』
長崎市教育委員会 2018『出島和蘭商館跡 銅蔵跡他中央部発掘調査』
長崎市教育委員会 2019a『出島和蘭商館跡 出島表門橋架橋に伴う発掘調査報告書報告書』
長崎市教育委員会 2019b『出島和蘭商館跡 中島川河川改修事業に伴う発掘調査報告書』
長崎市教育委員会 2023『魚の町遺跡（遺構・遺物報告及び総括編）－第１、２次発掘調査報告書－』
永竹威 1959「有田古窯跡発掘調査抄」『古伊萬里』pp. 397 ～ 426 金華堂
永竹威・林屋晴三 編 1978『世界陶磁全集８ 江戸（三）』小学館
野上建紀 1993「泉山口屋番所遺跡発掘調査概報－佐賀県有田町泉町 526-1、527-1 の調査－」『金沢大学考古学研究室紀要』20 号 pp. 102 ～ 109 金沢大学考古学研究室

東信男・佐藤亜聖 2014「丸亀城下町大手町地区第４次調査出土「ＶＯＣ銘入染付芙蓉手文皿」について」『香川考古』第 13 号 pp.127 ～ 130 香川考古刊行会

丸亀市教育委員会 2018『丸亀城跡発掘調査報告書－大手町地区第３次・第４次調査－』丸亀市埋蔵文化財発掘調査報告第 27 冊

山口美由紀 2015「出島和蘭商館跡出土の貿易陶磁－近世の流通及び産業振興の視点から－」『中近世陶磁器の考古学』第１巻 pp.121 ～ 149 雄山閣出版

山本文子 2016『肥前芙蓉手皿の研究』(青山学院大学博士論文)

C.S.Woodward 1974『Oriental ceramics at the Cape of Good Hope 1652-1795 : An account of the porcelain trade of the Dutch East India Company with particular reference to ceramics with the V.O.C. Monogram, the Cape market, and South African collections』A.A. Balkema

図の出典

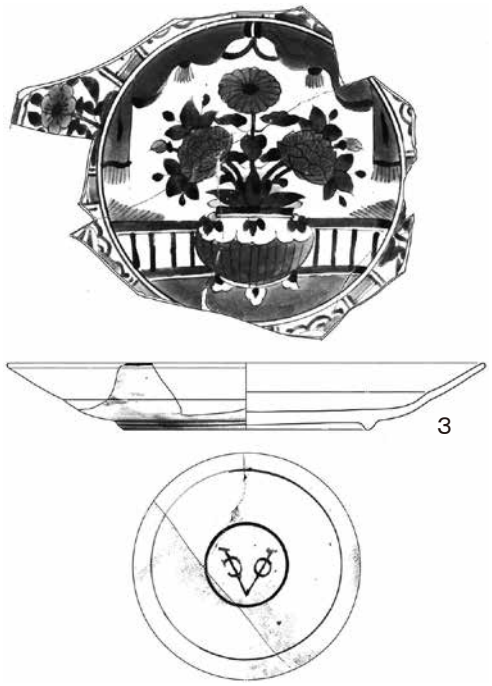
図１-１・図４-28 ～ 30・33（写真）：筆者撮影、図１-５～７・図２- ８～ 11・図３-19・24：長崎市教委 2000、図１-４・図２-16・図３-27：長崎市教委 2002、図２-12 ～ 13・15・図３-18・20 ～ 22・25・26：長崎市教委 2008、図３-22・23：長崎市教委 2018、図１- ３：長崎市教委 2019、図２-17：有田町教育委員会提供、図４-28：佐賀市教委 2010a、図４-29：佐賀市教委 2010b、図４-30：佐賀市教委 2010c、図４-31：佐賀市教委 2022、図４-32：佐賀市教委 2015、図４-33：小城市教委 2022、図４-34：久留米市教委 2001、図４-35：大野城市教委 2018、図４-36：蜑父 2004、図４-37：丸亀市教委 2018

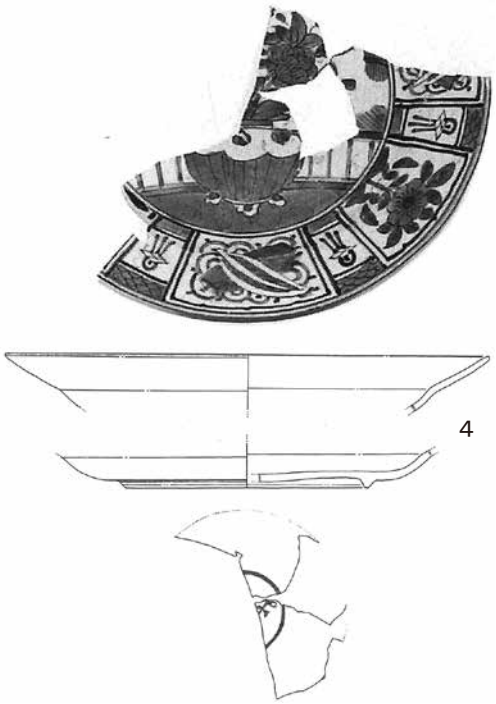
Ａ群

有田 大樽窯跡（採集） 左：見込み 右：高台内 館蔵

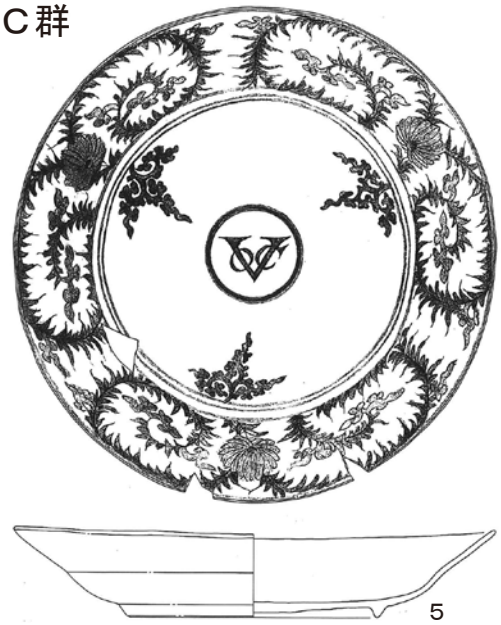
参考：館蔵 今泉吉郎・吉博コレクション

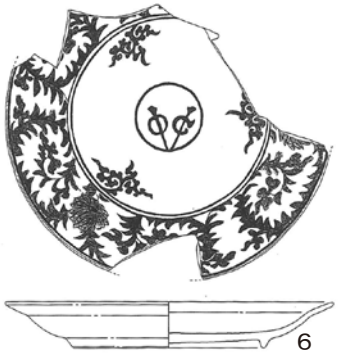
Ｂ群





Ｃ群





0 10cm

図１ 日本出土のＶＯＣ銘磁器の種類：Ａ～Ｃ群（実測図 1/5） １・２以外は出島オランダ商館跡

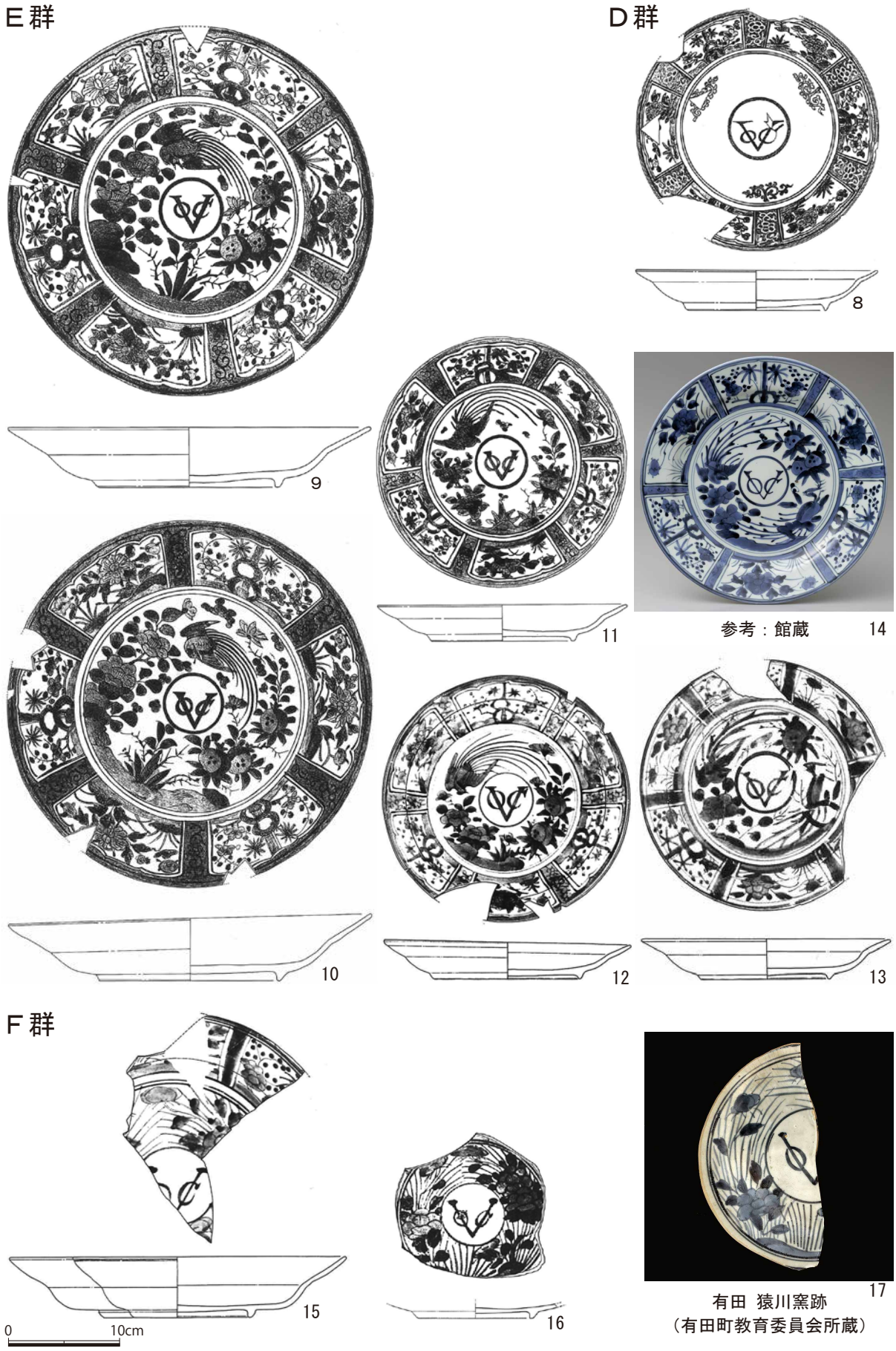
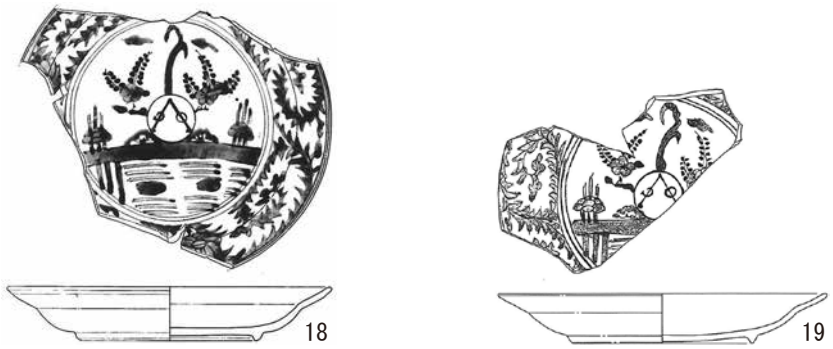


図２　日本出土のＶＯＣ銘磁器の種類：Ｄ～Ｆ群（実測図 1/5）　14・17 以外は出島オランダ商館跡

Ｇ群



Ｈ群

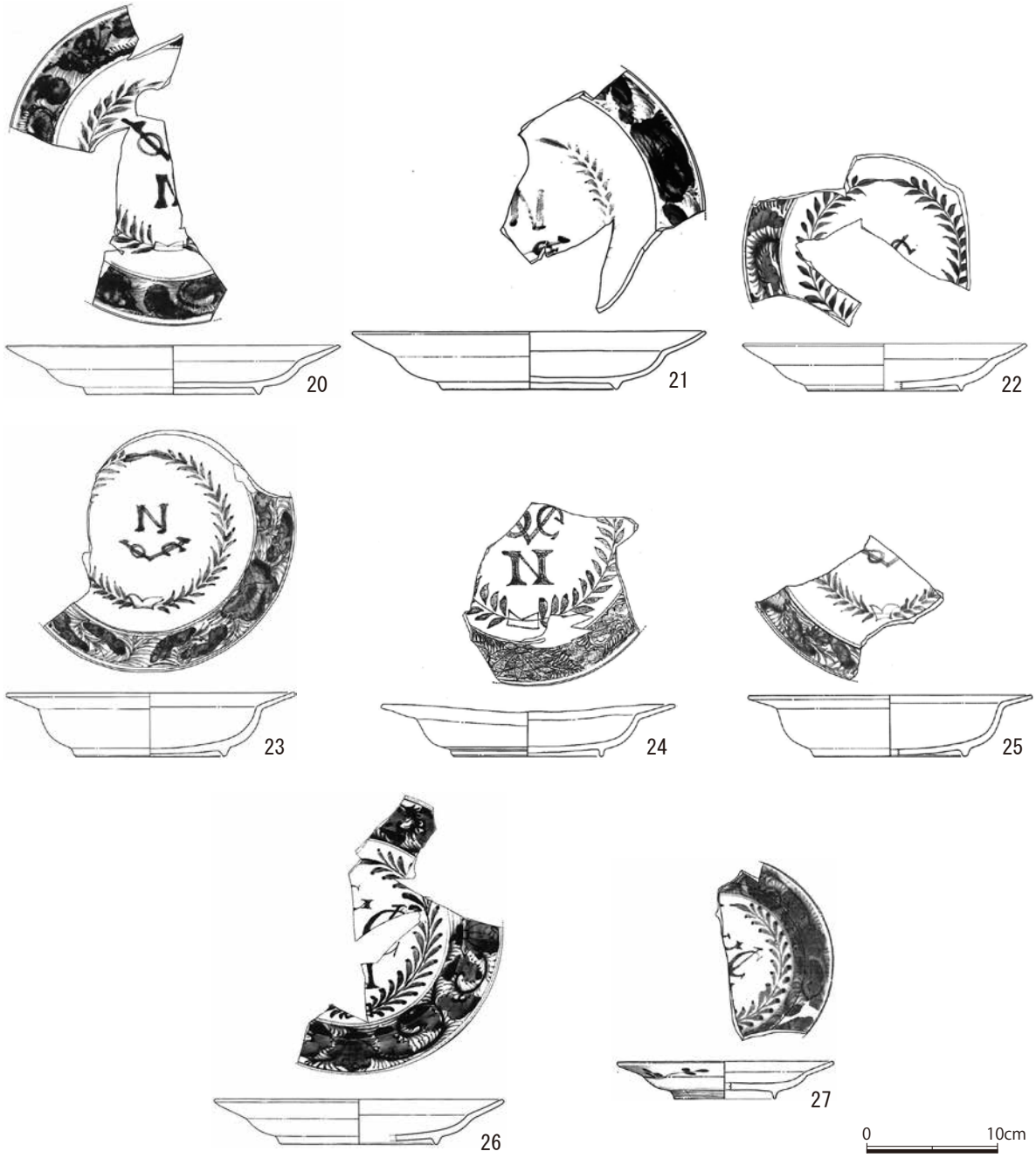
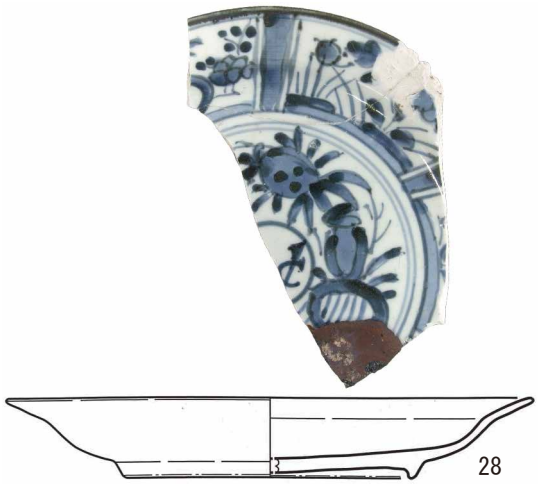
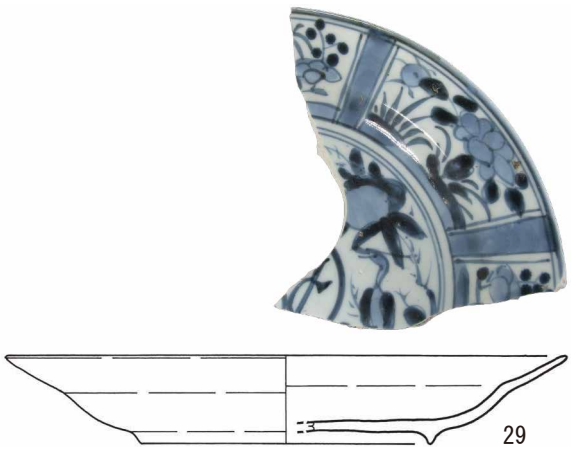


図３　日本出土のＶＯＣ銘磁器の種類：Ｇ・Ｈ群（実測図 1/5）　出島オランダ商館跡

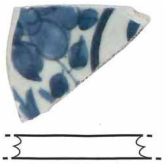


西中野遺跡 49 区



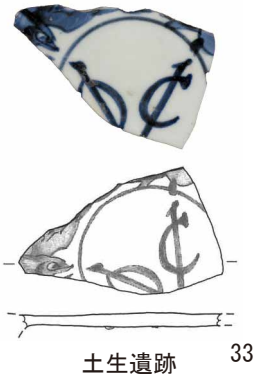
西中野遺跡 29 区

西渕遺跡３区



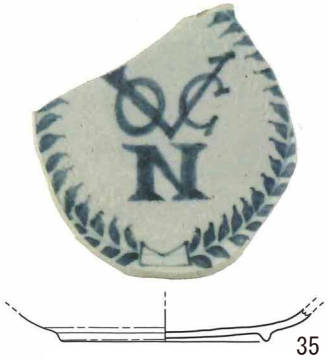
三重津海軍所跡 22 区

笹谷遺跡

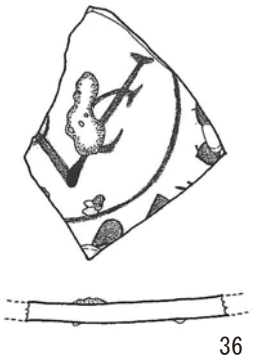


土生遺跡

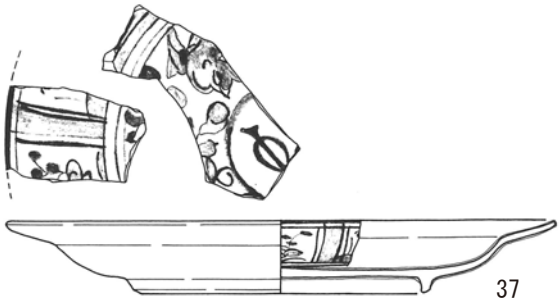
久留米城下町遺跡 14 次



雑餉隈遺跡２次



高瀬船着場跡付近（採集）



丸亀城跡大手町地区４次

0　5cm (1/3)

図４　出島と長崎以外の消費地遺跡出土ＶＯＣ銘磁器（実測図 1/3）

【調査ノート】19 世紀有田大皿の雷文考

宮木貴史

１．はじめに

19 世紀の有田でつくられた染付大皿を中心とする瀬川竹生コレクションでは、大皿という大画面を彩る様々な動物や植物、浮世絵の世界などを見ることができる。そのような、主題、主文とされる文様のほか、口縁の縁取りや区画帯、余白部分を充填する青海波文（せいがいはもん）や四方襷文（よもだすきもん）などのいわゆる地文、地文様と呼ばれるものも多数確認できる。このうち、特に筆者の関心を引いたものが雷文（らいもん）であった[1]。直線の組み合わせにより構成された角張った渦文を、稲妻を象徴化したものとして「雷文」と呼び、肥前磁器が作られ始めた 17 世紀前半頃から使用されている[2]。だが、瀬川竹生コレクションの複数の資料で確認できる雷文は渦が多重で、渦状に見えずに斜線の組み合わせによる石畳文かと思うものもある。実際、よく見ると渦状ではなく入れ子状になっているものもあるが、これが果たして 19 世紀の資料に特徴的な雷文なのか、あるいは大皿に特に使用されるものなのか、などを検討するにあたり、足掛かりとして瀬川竹生コレクションにおける雷文の抽出、分類、施文状況の整理を行った。

２．雷文の分類と施文状況について

直線で構成された渦巻を雷文とし、あてはまるものを抽出した結果、16 点の資料で確認できた。この 16 点の資料に見られる雷文を本稿では５つに分類した。以下、各分類と施文状況についてまとめる。なお、画像一覧を図１に、分類データを表１に示した。

（１）多重雷文

１つの雷文が六重以上の渦巻となっているものを「多重雷文」とした[3]。最も多く 12 点の資料で確認できる。特徴は細い線でほぼ隙間がないぐらいに描かれていることである。また、雷文の１辺を構成する線数が６本前後では渦巻が確認できるが、10 本前後になると中心部以外は入れ子状に描かれており、そもそも縦横の線数も一致していないように見える。

施文状況としては、口縁部を一周する文様帯（以下、口縁帯）として使用されていることが多いが、見込み内の充填文様として使用されている場合もある。その際、通常より太線で描かれているものも確認できた（図１−８）。また、雷文を構成する線とは別に区画線が描かれている場合が多い。絵付け時点の前後関係は分からないが、割付のために雷文より先に描かれた可能性はあるだろう。特に余白を充填する場合、先に格子状の線を書き入れてから雷文を描いた可能性がある。多重雷文の場合は線同士が密になっているため、区画線との区別がつきにく

い。ただし図１-11 は、通常雷文の間に１本入る区画線が３本ほど書かれている。17 世紀の事例として、雷文を半裁したような文様同士の間に、４本程度の縦線が入るものが見られる（大橋 1994）ため、この系譜を引き継いだ表現だろうか。

（２）三重雷文

１つの雷文が三重の渦巻のものを「三重雷文」とした。図１-13、14 の２例ではあるが、いずれも主文を構成する一部になっている。13 は見込みを格子状に区画し、その一画に三重雷文を４つ配置する。別の一画には魚々子文を充填した円形寿字文を重ねる。これと雷文とを互い違いに配置することで、全体で見ると石畳文を構成している。14 は牡丹の花を切り裂くように、稲妻を形式化させたものとして雷文を描いている。

（３）四重雷文

１つの雷文が四重の渦巻のものを「四重雷文」とした。図１-15 の１例のみ。口縁帯に描かれているが、共に描かれている五重雷文より太い線である。おそらく、さらに外周にある小さな如意頭文が雲を表しており、稲光の表現として太めの四重雷文を配していると思われる。この文様帯の中では四重雷文が主で、五重雷文が従の関係にある。

（４）五重雷文

１つの雷文が五重の渦巻のものを「五重雷文」とした。四重雷文と同様図１-15 の１例のみで、口縁帯および見込み主文の１つである巻き軸の柄に使用されている。充填文様としての使用である。

（５）縦横連続雷文

中心線が縦向きと横向きになる雷文を左右に並べ、これを線が全て接続するように書き連ねたものを「縦横連続雷文」とした。図１-３、16 の２例が確認できる。どちらも縦向きが二重、横向きが三重になっており、口縁帯の文様として使用されている。

表１　瀬川竹生コレクションにみられる雷文一覧

No.	図録番号	文様１	文様２	施文状況	資料名	年代	収蔵番号
1	021	多重雷文		口縁帯及び充填文	染付巻物松竹梅文大皿	1780 ～ 1820 年代	15332
2	025	多重雷文		充填文	染付丸文大皿	1820 ～ 1860 年代	15341
3	029	多重雷文	縦横連続雷文	１、２とも口縁帯	染付双魚文大皿	1780 ～ 1820 年代	15346
4	035	多重雷文		充填文	染付瓢箪馬文輪花大皿	1790 ～ 1830 年代	15353
5	036	多重雷文		口縁帯	染付瓢箪馬文大皿	1820 ～ 1860 年代	15352
6	052	多重雷文		口縁帯	染付葡萄文大皿	1820 ～ 1860 年代	15429
7	059	多重雷文		口縁帯	染付浄瑠璃本文大皿	1820 ～ 1860 年代	15375
8	064	多重雷文（太線）		充填文	染付牛文大皿	1800 ～ 1840 年代	15413
9	098	多重雷文		口縁帯	染付牡丹蝶文輪花大皿	1790 ～ 1820 年代	15426
10	100	多重雷文		口縁帯	染付牡丹蝶文大皿	1820 ～ 1860 年代	15369
11	108	多重雷文		口縁帯／区画線多重	染付龍富士山文大皿	1820 ～ 1860 年代	15390
12	112	多重雷文		口縁帯	染付福寿字文大皿	1800 ～ 1840 年代	15383
13	113	三重雷文		主文の一部	染付寿字雷文大皿	1800 ～ 1840 年代	15362
14	114	三重雷文		主文の一部	染付牡丹雷文大皿	1800 ～ 1840 年代	15367
15	104	四重雷文	五重雷文	１は口縁帯／２は口縁帯及び充填文	染付近江八景文輪花大皿	1820 ～ 1860 年代	15393
16	048	縦横連続雷文		口縁帯（一部）	染付芙蓉文大皿	1820 ～ 1860 年代	15427

３．多重雷文に近似する文様

前章のとおり、瀬川竹生コレクションでは多重雷文とした六重以上の渦巻きのものが最も多くの資料でみられた。多重雷文の特徴である細い線で密に描いた文様は他にも見られるため、この特徴を持つ地文を細密地文と仮称し、事例を図２にまとめた。例えば図２−１のような網代文は、縦横の線がそれぞれ 10 本前後で密に描かれている（多重網代文）。図２−２〜５は２種類の斜線で構成された文様で、雷文か網代文の一種とみることもできるが、ここでは三角文とした。これも線数が６〜 10 本以上と多重になっている（多重三角文）。図２−６は止まり木の木目文である。木目文は波線で構成されていること、入れ子状になっていることが特徴である。６も多重の入れ子状になっている。ちなみに図２−５も四重から五重の木目文である。こちらは中心だけ雷文風な渦巻き状で他は入れ子状に描かれている。

４．まとめ

瀬川竹生コレクションにみられる雷文を分類した。巻き数の少ないものや縦横連続雷文もあるが、多重雷文が最も多く、同じ特徴を持つ文様も網代文等、他にも確認できた。多重雷文が専ら口縁帯や充填文として使用されているのに対して、三重雷文は主文の一部として使われている。では 19 世紀以外、大皿以外の事例はどうだろうか。詳細は稿を改めたいが、九州陶磁文化館所蔵の柴澤コレクションを概観してみると、多重雷文はやはり 19 世紀の大型品に使用されていた。しかし、その施文状況をみると大皿ではいずれも見込み中ほどを区画する文様帯への使用であった（図３−１、２）。この見込区画帯の文様としては多重網代文もみられる（図３−３）。また、18 世紀以前の資料には雷文自体少ないが、１点色絵の資料があった（図３−４）。今後、雷文をさらに集成し、検討を進めていきたい。

注

１　瀬川竹生コレクションを見ていると、中心に点を打った丸文を書き連ねるいわゆる魚々子文も目に付く。瀬川竹生コレクション中では、特殊なもの（中心が点ではなく丸のもの）１点を含めて 14 点見られた。

２　17 世紀の事例については大橋康二氏によって５種類が紹介されている（大橋 1994）。

３　１つの雷文が五重までのものについては、同一意匠内での巻き数が安定している。六重以上になると、巻き数が安定しないため多重雷文でまとめた。

参考文献

大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社

佐賀県立九州陶磁文化館 2012『古伊万里の文様集成』佐賀県立九州陶磁文化館

佐賀県立九州陶磁文化館 2020『開館 40 周年記念・寄贈記念　特別企画展　柴澤コレクション』佐賀県立九州陶磁文化館

佐賀県立九州陶磁文化館 2024『瀬川竹生コレクション寄贈記念・特別企画展　江戸大皿百物語―躍動する青の世界―』佐賀県立九州陶磁文化館

吉永陽三 1989「やきものにみる文様（16）雷文様」『セラミック九州』No. 19 p. 7 佐賀県立九州陶磁文化館

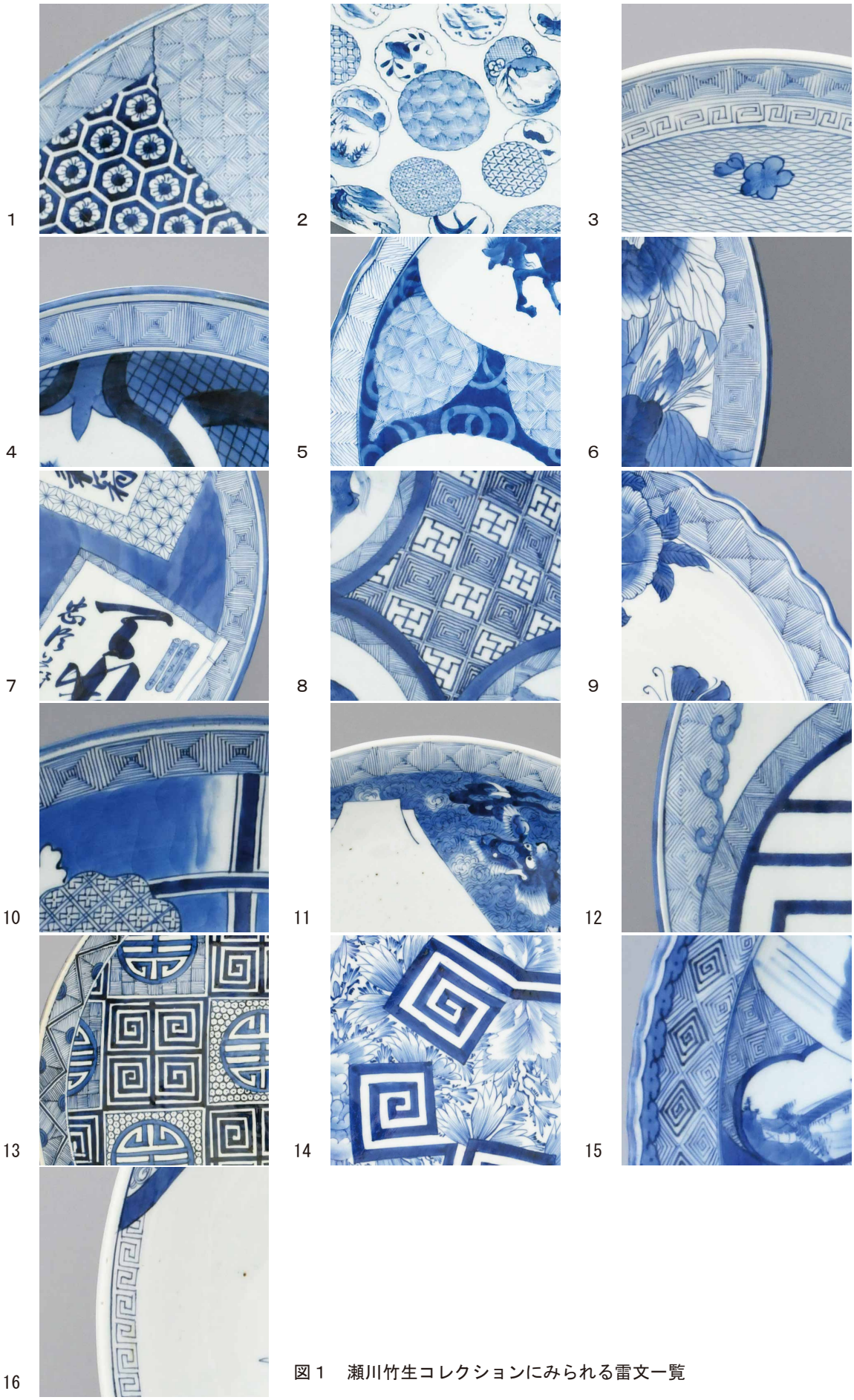
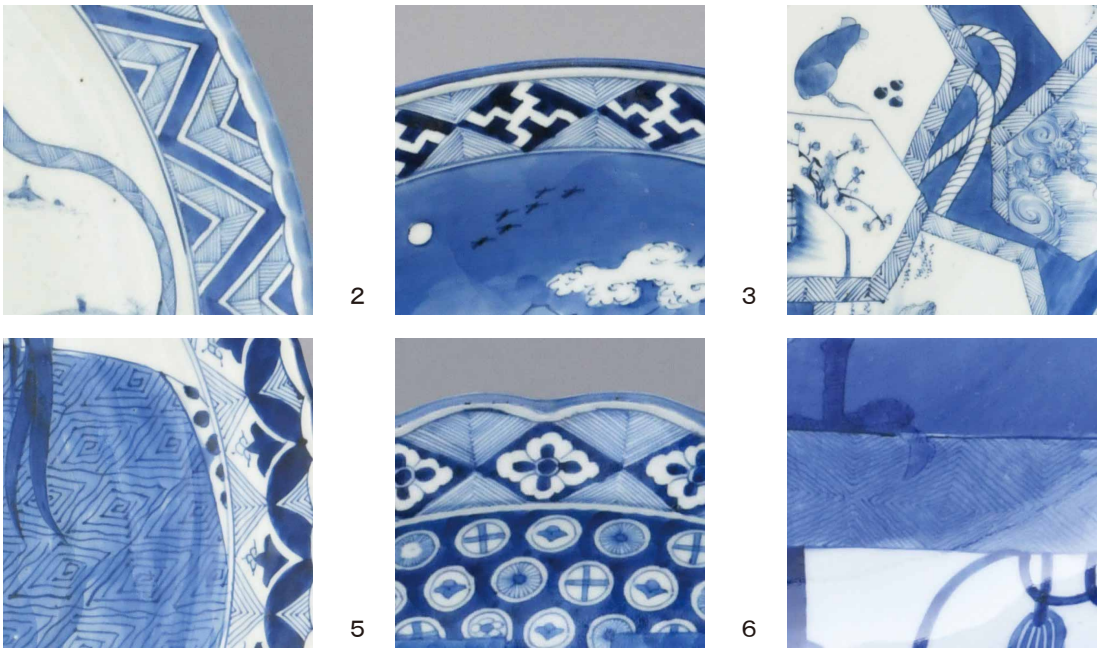


図１　瀬川竹生コレクションにみられる雷文一覧

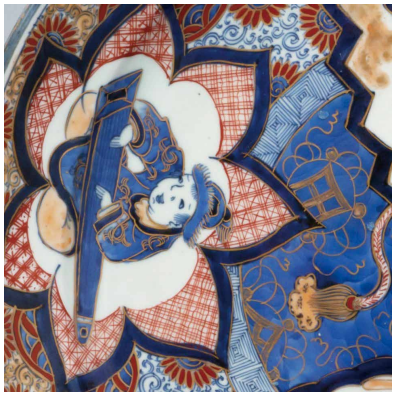


1 ＝ 040(15379)　2 ＝ 081(15396)　3 ＝ 115(15380)　4 ＝ 118(15400)　5 ＝ 119(15414)　6 ＝ 090(15371)

※図版番号＝図録番号（収蔵番号）

図録番号は『瀬川竹生コレクション寄贈記念・特別企画展 江戸大皿百物語―躍動する青の世界―』から

図２　瀬川竹生コレクションにみられる細密地文の例



１　多重雷文

２　多重雷文

３　多重網代文

４　色絵の雷文

1 ＝ 356(14526)　1800 ～ 1840 年代
2 ＝ 364(14534)　1820 ～ 1860 年代
3 ＝ 377(14547)　1840 ～ 1860 年代
4 ＝ 168(14336)　1690 ～ 1730 年代

※図版番号＝目録番号（収蔵番号）　資料年代

目録番号及び資料年代は『開館 40 周年記念・寄贈記念
特別企画展 柴澤コレクション』から

図３　柴澤コレクションにみられる雷文及び網代文

一　上手汐　弐十
　十ニ付六百文
一　小せんちや　十
　代四百文
〆金五両三部壱朱
　正銭拾四貫五百文也
右之通念入仕立
可申上候宜御頼仕候　已上
八月二日　肥前有田　諸隈喜右衛門
近藤萋五郎様

肥前伊萬里船問屋
福市屋良助江名当ニ而
仕切御仕向之事奉頼上候

一　金弐歩右御注文
　手附は〆慥ニ請取申し
　為其一札如件
八月二日

※茶湯茶碗のこと。『日本国語大辞典』「茶湯（ちゃとう）」「茶を仏前や霊前に供えること。またその煎茶。おちゃとう。さとう」。

（4）小山屋七郎兵衛宛升屋与右衛門送り状（「贈状之事」）　天保十五年九月二十六日付

　贈状之事
一　焼物入籠　三からけ
一　書状　弐通
〆
　此運賃六百文
一六百六拾文　伊万里ゟ諸国へ
一弐百文　当所諸国へ
〆　壱貫四百六拾文
右之通近藤萋五郎殿荷物
此度加路浦雲津屋市五郎殿船
より差送り申候間御地着之節
御改御受取被成右運賃諸懸り共
右之通御渡し被成被下候仍而贈状如件
天保十五辰ノ九月二十六日　升屋与右衛門印（手形　赤間関升与　不用）

因州鳥取ニて
小山屋七郎兵衛殿

辰八月二日認　諸限喜ゟ印（肥前 有田〈諸喜 皿山）

近藤萋五郎様

（3）覚　天保十五年八月二日付

覚

一　御茶とふ茶碗※　惣数十五
　壱ツニ付弐百文宛
一　盃　惣数九ツ
　壱ツニ付三百文宛
一　茶わん　十
　壱ツ三百文宛
一　三段弁当重　壱ツ
　金壱部
一　尺五寸大鉢　弐枚
　壱枚ニ付金壱両
一　尺五部同　弐枚
　壱枚ニ付三部
一　七寸さし美鉢　弐枚
　壱枚ニ付三朱
一　はし立　切透しニ〆　壱ツ
　金壱部
一　香爐　壱ツ
　代金壱朱
一　盃臺　壱ツ
　金弐朱
一　丼　壱升五合入　弐ツ
　壱ツニ付壱部
一　同八合入　弐ツ
　壱ツニ付三朱
一　皿　弐十
　束ニ付三朱
一　並茶わん　六十
　束ニ付三百文
一　同中皿　十
　束ニ付八百文
一　同ならちや
　代壱貫文
一　並小盃　弐十
　十ニ付三百文

右同断御紋同
代金弐部
一　中丼　弐ツ
右同断御紋同
代金壱部弐朱
一　御盃臺　壱ツ
右同断御紋同
代金弐朱
一　極上山水絵小皿　弐十
代金壱部弐朱
一　極上同絵手汐　弐十
代銭壱〆弐百文
一　極上中茶碗　十
代銭四百文
一　蝶唐草ノ中皿　十
代銭八百文
一　か屋丸ならちや　拾与
代銭壱貫文
一　葵絵茶碗　六十
代銭壱貫八百文

一　唐花小皿　弐十
代銭六百文
一　尺五寸大鉢　壱枚
模様山水絵御紋丸之内釼片葉ミ
代金壱両
〆金六両三部壱朱
銭拾四貫五百文
金〆弐両弐朱ト銀弐分
合　金八両三部三朱ト銀弐分
内　八月二日
金弐部　御手許
寅十二月三十日下着
同五両
〆
さし引　三両壱部三朱ト銀弐分

右之通差送申候条御改
御受取可被下候尤残金
之義者品々御仕送可被下候
奉願上候

右同断御紋鶴之丸
代銭弐百文
一　同　　壱ツ
右同断御紋丸之内蔦
代銭弐百文
一　御盃　口金入　弐ツ
右同断御紋角切方之内釼花菱
代銭六百文
一　同　口金入　壱ツ
右同断御紋立角之内釼花菱
代銭三百文
一　同　　口金入　五ツ
右同断御紋丸之内釼片葉ミ
代銭壱貫五百文
一　同　口金入　壱ツ
右同断御紋丸之内三ツ蔓柏
代銭三百文
右御盃之義惣様口金入置候
一　御四段重　　壱組
右同断御紋丸之内釼片葉ミ

御注文三段ニ而御座候得共恰好要敷
相見へ候故四段ニ〆焼立差上申候
代金壱部
一　尺五寸大鉢　弐枚
右同断御紋角切方之内釼花菱
代金弐両
一　尺五部中鉢　弐枚
右同断御紋同
代金壱両弐部
一　七寸さし味　弐枚
右同断御紋同
代金壱部弐朱
切すかし
一　御箸立　壱ツ
右模様極山水絵御紋同断
代金壱部
一　御香爐　壱ツ
右同断御紋同
代金壱朱
一　大丼　弐ツ

（1）近藤萋五郎宛諸隈喜右衛門書状　天保十五年八月二日付

以手紙啓上仕候。残暑強御座候得共、益御堅勝被成御座、珍重之御義奉賀寿候。次ニ当方無事罷在候、乍憚御無念被下間敷候。惣而ハ去々年ニハ御順拝御苦労之御義、中々遠察仕候。其砌御注文被下候陶器品々、早速も焼立送上可申之処、仕立方再三焼直し手込勝ニ而、甚大延引仕候段、真平御悔恕可被降候。此節惣様焼立差送申候条、御改御受取可被下候。就而ハ下ノ関問屋迄推参仕候条、事ニよりてハ其御地罷越度奉存候。乍然此月延引仕候ハハ、難罷越候故、残金之処、早々御仕送可被下候。其内尺五部中鉢壱枚余計に差上申候条、是又御求被下度奉頼上候。誠ニ御出之節ハ大形之至、失礼之段御高免被下候。先ハ御頼旁如是御座候。以上

辰八月二日　喜右

萋五郎様　人々御衆中

尚々跡方御注文等御座候はば被仰越可被下候、随分念を入焼上可申候条、何卒宜敷奉願上候。以上

代銭壱貫文

一　同　　五ツ

右同断御紋立角之内釼花菱

代銭壱貫文

一　同　　壱ツ

右同断御紋丸之内はね大之字

代銭弐百文

一　同　　壱ツ

右同断御紋丸之内三ツいてふ

代銭弐百文

一　同　口金入　五ツ

右同断御紋丸之内釼片葉ミ

代壱貫五百文

一　同　口金入　五ツ

右同断御紋丸之内影片葉ミ

代壱貫五百文

一　同　　壱ツ

右同断御紋丸之内抱丁子

代銭弐百文

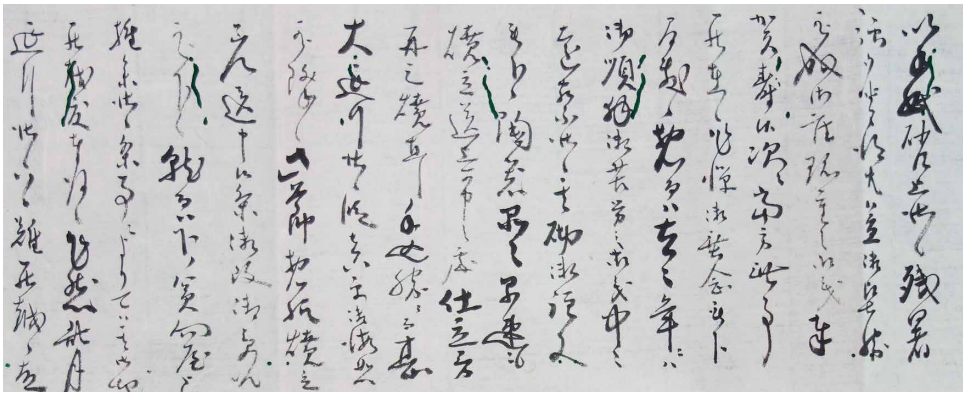
一　同　　壱ツ

（2）近藤萋五郎宛諸隈喜右衛門送り状（「送り状之事」）　天保十五年八月二日付

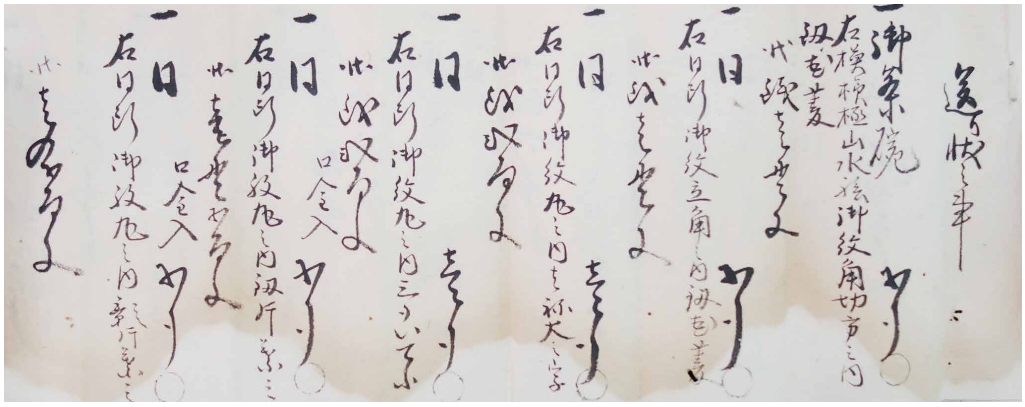
送り状之事

一　御茶碗　五ツ

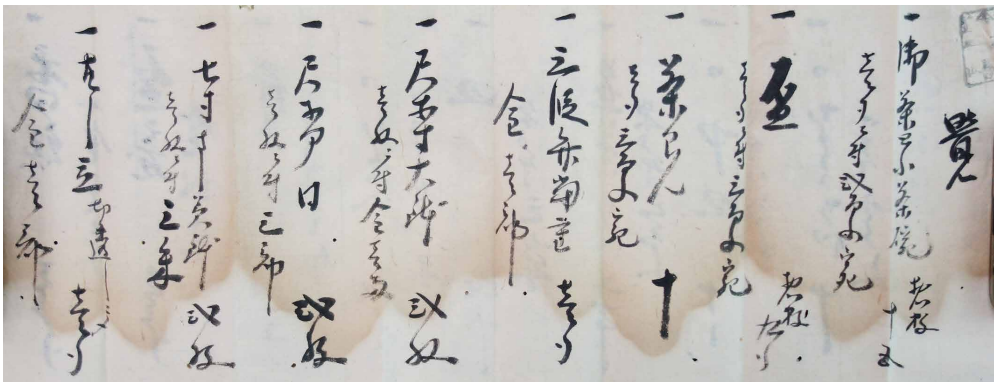
右模様極山水絵御紋角切方之内釼花菱



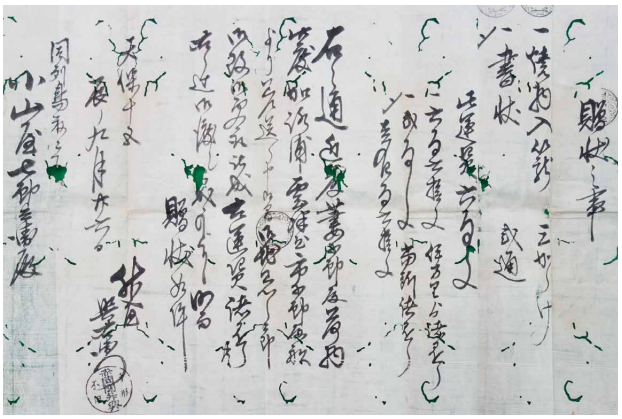
〈写真１〉近藤萋五郎宛諸隈喜右衛門書状



〈写真２〉近藤萋五郎宛諸隈喜右衛門送り状



〈写真３〉覚



〈写真４〉小山屋七郎兵衛宛升屋与右衛門送り状

（四）小山屋七郎兵衛宛升屋与右衛門送り状（「贈状之事」）　天保十五年九月二十六日付

下関の升屋与右衛門から鳥取の小山屋七郎兵衛へ宛てた送り状。荷物の内訳は「焼物入籠　三からけ」と「書状　弐通」とあり、二百点近い近藤家注文品は籠三つにまとめて梱包されていたことが判明する。下関～鳥取間の輸送を担ったのは鳥取賀露浦の雲津屋市五郎の船だったようだ。賀露浦は現在の鳥取県鳥取市賀露町に位置する港町で、鳥取城下の海の玄関口にして北前船等の寄港地であった。近藤家が所在した竹生村から千代川をさらに下った場所に当たる。差出の升屋は山陰沖の水運を手広く行っていたようで、鳥取市青谷町青谷の湊神社には升屋与右衛門が航海安全を祈願して寄進した狛犬がある［原、一九八四］。

以上の四点からなる近藤家文書には有田焼製品注文方法の一例（有田を訪れた注文主が製作者に直接発注）や輸送の様態（伊万里・下関・鳥取の船問屋が輸送に関与）、決済方式（伊万里商人を介した仕切勘定）、そして器種ごとの金額などが示されている。特別注文の事例であり、必ずしも一般的なものではないが、有田焼流通の研究に資する重要な情報を多く含む資料といえよう。

付記

本稿は令和六年九月七日～一一月四日に佐賀県立九州陶磁文化館で開催した瀬川竹生コレクション寄贈記念・特別企画展「江戸大皿百物語―躍動する青の世界―」に伴う成果である。近藤家文書の存在はかつて有田町歴史民俗資料館の元館長尾崎葉子氏から当館に情報提供いただいていたものである。閲覧・調査に当たっては同館学芸員永井都氏にひとかたならぬ御協力を賜った。また、翻刻に際して佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸係長藤井祐介氏から助言を得た。そのほか本稿をなすに当たり全般にわたって当館学芸課員の示唆を受けた。記して感謝申し上げる。

参考文献

有田町史編纂委員会編、一九八五、『有田町史　陶業編一』、有田町
池田兆一、二〇一三、「喜右衛門さんの手紙」、有田町歴史民俗資料館編『季刊　皿山』一〇〇
伊藤康晴、二〇一八、「一字一石塔（宝塔）の造立過程―高草郡竹生村東近藤家文書より―」、鳥取県立博物館編『鳥取県立博物館研究報告』五五
尾崎葉子、二〇一一、「因幡国・近藤家から有田皿山への注文」、有田町歴史民俗資料館編『季刊　皿山』九二
尾崎葉子、二〇一九、「米子の大庄屋　東近藤家が今に伝えるもの」、有田町歴史民俗資料館編『季刊　皿山』一二一
佐賀県立九州陶磁文化館編、二〇二四、『瀬川竹生コレクション寄贈記念・特別企画展　江戸大皿百物語―躍動する青の世界―』
原一宏、一九八四、『野の石―山陰の石仏めぐり―』

〈表〉近藤家注文の有田焼製品

	品目	数量	金額	（３）「覚」での表記	備考
1	茶碗（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	5	１貫文	「御茶とふ茶碗」	
2	茶碗（極山水絵御紋立角之内釼花菱）	5	１貫文		
3	茶碗（極山水絵御紋丸之内はね大之字）	1	200 文		
4	茶碗（極山水絵御紋丸之内三ツいてふ）	1	200 文		
5	茶碗 口金入（極山水絵御紋丸之内釼片葉ミ）	5	１貫 500 文	「茶わん」	
6	茶碗 口金入（極山水絵御紋丸之内影片葉ミ）	5	１貫 500 文		
7	茶碗（極山水絵御紋丸之内抱丁子）	1	200 文	「御茶とふ茶碗」	
8	茶碗（極山水絵御紋靏之丸）	1	200 文		
9	茶碗（極山水絵御紋丸之内蔦）	1	200 文		
10	盃 口金入（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	2	600 文	「盃」	
11	盃 口金入（極山水絵御紋立角之内釼花菱）	1	300 文		
12	盃 口金入（極山水絵御紋丸之内釼片葉ミ）	5	１貫 500 文		
13	盃 口金入（極山水絵御紋丸之内三ツ蔓柏）	1	300 文		
14	四段重（極山水絵御紋丸之内釼片葉ミ）	1	金１部	「三段弁当重」	
15	尺五寸大鉢（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	2	金２両	「尺五寸大鉢」	
16	尺五部中鉢（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	2	１両２部	「尺五部大鉢」	
17	七寸さし味（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	2	金１部	「七寸さし美鉢」	
18	箸立 切すかし（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	1	金１部	「はし立」	
19	香爐（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	1	金１朱	「香爐」	
20	大丼（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	2	金２部	「丼」	１升５合入り
21	中丼（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	2	金１部２朱	「丼 八合入」	８合入り
22	盃臺（極山水絵御紋角切方之内釼花菱）	1	金２朱	「盃臺」	
23	小皿（極上山水絵）	20	金１部２朱	「皿」	
24	手塩皿（極上山水絵）	20	200 文	「上手汐」	
25	中茶碗	10	400 文	「小せんちや」	
26	中皿（蛸唐草）	10	800 文	「並中皿」	
27	奈良茶碗（か屋丸）	10	１貫文	「ならちや」	
28	茶碗（葵絵）	60	１貫 800 文	「並茶わん」	
29	小皿（唐花）	20	600 文	「並小盃」	
30	尺五寸大鉢（山水絵御紋丸之内釼片葉ミ）	1	１両	記載なし	

の折に近藤が注文した品物について、焼成がうまくいかずに何度も焼き直したため納品が遅れたことを詫びるとともに、ようやく完成したので今般送るという主旨。輸送には下関の問屋が関与していたこと、代金は一部が先払いされていたこと、今後の贔屓を期待して「尺五部中鉢」がおまけとして進呈されていたことなどが分かる。尚尚書では、また注文いただいた折には念入りに作るので何卒宜しくお願いしたいと営業文句も忘れていない。文中に出てくる「御順拝」については伊藤康晴が明らかにしたとおり、天保十三年萋五郎が九州地方を巡拝したことを指す［伊藤、二〇一八］。萋五郎は前年の天保十二年（一八四一）までに数年かけて法華経二十八品を経石に書写しており、写経を終えた翌年の巡拝とは肥後熊本城下の本妙寺をはじめとする日蓮宗関係の寺院・霊地を巡る旅であった可能性が高いという。肥前地方での巡拝先は不明であるが、佐賀県内では小城の松尾山光勝寺や有田の光瑞山法元寺（有田皿山の陶器祈願所）などを訪れたことが想像される。伊藤が鳥取県立博物館所蔵の東近藤家文書から詳細に経緯を跡づけたとおり嘉永元年（一八四八）には萋五郎の発願で一字一石塔（宝塔）が造立されており、その背景には個人的な日蓮（法華）信仰以上に大庄屋として地域社会の安寧と繁栄を願う気持ちがあったようだ。

（二）近藤萋五郎宛諸隈喜右衛門送り状（「送り状之事」）天保十五年八月二日付

（一）に付随する送り状。諸隈から発送された有田焼製品の器種名称・数量・文様・金額が記される。次頁の〈表〉は記載内容をまとめ（三）との対応関係を示したものである。注文品の数量は三十件百九十九点にのぼる。項目は器種と文様ごとに分けられている。器種は湯飲み碗、煎茶碗、飯碗、盃、段重、大皿（尺五寸・尺五分）、皿（七寸）、小皿、手塩皿、箸立て、香炉、大丼、中丼、盃台等である。文様はいずれも山水文に剣花菱紋・剣片喰紋等の近藤家家紋と思われるものが添えられている。合計金額は金八両三分三朱＋銀二分で、そのうちの三両一分三朱＋銀二分が残金であった。

（三）覚　天保十五年八月二日付

（一）・（二）と同日付の覚。諸隈は萋五郎に対し伊万里津の船問屋福市屋良助を名宛人として仕切決済してくれるよう依頼している。「金弐歩右御注文　手附は〆慥ニ請取申し為其一札如件」とあることから、（二）において「御手許」と記されていた金二分は手付金であったことが分かる。

【資料紹介】因幡国高草郡竹生村近藤家文書―幕末期の有田焼製品納入・輸送に関わる資料

芳野貴典

解題

有田町歴史民俗資料館には因幡国高草郡竹生村（たけなりむら）（現在の鳥取市竹生）の近藤家に伝来した有田焼製品八十二点と古文書四点が収蔵されている。天保十五年（一八四四）八月に有田の窯焼諸隈喜右衛門から近藤萋五郎に納められた製品とそれに付随する書状・送り状等の文書である。製品に一次的な文字資料が伴って伝存する数少ない例であり、幕末期の有田焼製品が生産者から消費者に届くまでの経過をうかがい知ることのできる貴重な手がかりといえる。当該資料は平成二十三年（二〇一一）鳥取県米子市の池田兆一・純代御夫妻から同館に寄贈されたもので、近藤家は純代氏の実家に当たる。寄贈の経緯については『季刊皿山』九二、一〇〇、一二一号掲載の尾崎葉子氏及び池田兆一氏の論稿に詳しいので、そちらを参照いただきたい。本稿ではこのうち古文書四点の全文を翻刻する。

注文主の近藤萋五郎は文化三年（一八〇六）頃千代川上流域に位置する智頭郡智頭宿（現在の鳥取県八頭郡智頭町智頭）の大庄屋国米家に生まれた。諱は珍宜。竹生村の大庄屋・宗旨庄屋（鳥取藩領で寺社・戸籍・五人組・宗門改め等を担った）を務めていた近藤家に婿入りし十代目当主となった。のちに妻みねの弟仙五郎に家督を譲り、自身は東近藤家を立てた［伊藤、二〇一八：五七］。萋五郎が有田の窯元に製品を発注し、それらが納入されたのは別家を立てた後のことである。

製作者・発送主である諸隈喜右衛門については現時点で詳しい情報を見出し得ていないが、文化五年（一八〇八）二月付池田伝平宛の大窯売渡状に存人の一人として名前が載る［有田町史編纂委員会編、一九八五：一九六］。また、近藤家伝来品の底裏には「諸喜」銘が入っている。

本稿で翻刻する各文書の梗概は次のとおりである。

（一）近藤萋五郎宛諸隈喜右衛門書状　天保十五年八月二日付

諸隈喜右衛門から近藤萋五郎への書状で（二）、（三）とともに商品に同封されたものと考えられる。一昨年すなわち天保十三年（一八四二）「御順拝」

執筆者（掲載順）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館　名誉顧問）

田端正明（佐賀大学 名誉教授、特任教授）

徳永貞紹（佐賀県立九州陶磁文化館　シニア・アドバイザリー・フェロー）

宮木貴史（佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員）

芳野貴典（佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員）

佐賀県立九州陶磁文化館
研究紀要　第 10 号

令和７年（2025 年）３月２４日
編集発行　佐賀県立九州陶磁文化館
〒 844-8585　佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙 3100-1

印　　刷　株式会社　三光
〒 848-0022　佐賀県伊万里市大坪町乙 4161-1

BULLETIN

OF

KYUSHU CERAMIC MUSEUM

No.10

CONTENTS

Hizen Ceramics and Its Export to Worldwide Markets
・・・・・・・・・・OHASHI Koji

Estimation of places of production of VOC (Dutch East India Company) Marked Porcelain Excavated in Saga Prefecture, Japan, by Analyzing of Clay Composition
・・・・・・・・・TABATA Masaaki,　TOKUNAGA Sadatsugu

Types and Distribution of Hizen Porcelain Dishes with VOC Marks Excavated in Japan
・・・・・・・・・TOKUNAGA Sadatsugu

“Research Note” Review on Thunder Pattern in the 19th Century Arita Large Dishes
・・・・・・・・・MIYAKI Takafumi

“Material Introduction” Documents of the Kondo Family, Takenari-mura, Takakusa-gun, Inaba Province - Materials Related to the Supply and Transportation of Arita Ware Porcelain during the Late Edo Period
・・・・・・・・・YOSHINO Takanori

2025

Kyushu Ceramic Museum
Toshaku Otsu 3100-1, Arita, Saga, 844-8585, Japan